ISSN 1881-9184

Vol. 9 2015

The Bulletin of Kansai University of Health Sciences

関西医療大学紀要

関西医療大学

巻頭言

医学・医療と生命倫理
―パターナリズムからインフォームド・コンセントへ

吉田　宗平

関西医療大学学長

古くはギリシャ時代から、医療人には、「不易の倫理」(「黄金律」) として「ヒポクラテスの誓い」があります。「患者の生命を救うためには、最善をつくす」という、「生命の尊厳」の立場に立ってあくまで「延命すること」が唯一最大の目的とされて来ました。しかし、現代は延命医療が進歩し、従来の「家庭死」から「病院死」へと死のあり方が変遷したことで、終末期医療におけるさまざまな死の類型が社会的にも関心を呼ぶようになりました。すなわち、「安楽死」や「尊厳死」などのように法的な死の類型が多様化し、臓器移植とも関連して脳死とその判定基準などの医療倫理が新たに問い直されるようなりました。一方で、こうした時代の変遷とともに、生殖医療を初め遺伝子治療などの先進医療や再生医療など近代医学の急速な技術的進歩の中で、生命の取り扱いや研究のあり方などに関する研究倫理ついても厳しく問われる時代になりました。

近年、医学の近代化の中で、患者―医師関係における非対称性（医療情報の質と量、医療技術評価の困難性、閉鎖性、心理的依存性など）がますます拡大して、必しも患者の立場をよく理解した上での医師による説明が困難となっています。そして、「上からの一方的な治療方針」が医師によって患者に提示さる傾向は未だ十分には改善されてはいません。確かに、「ヒポクラテスの誓い」は黄金律として長い間、一定の基準として医療倫理の支柱となってきました。しかし、現代医療の変遷の中、医療を受ける主体である患者本人の自主的判断が無視され、その人権を侵害することが、医師の「ヒポクラテス流パターナリズム」として批判されるようになってきました。

そこで登場したのが、「インフォームド・コンセント informed consent：IC（充分説明された上での同意）」という言葉です。それは、第2次世界大戦当時のドイツの悲惨なナチスによる人体実験とユダヤ人の大量虐殺という悲惨な史実に対する深刻な反省から生まれました。大戦後開かれたニュールンベルク国際軍事裁判（1945-46年）で、その戦争犯罪の実態が明らかにされ、欧米の医師たちを震撼させました。この裁判の傍ら184人の医師が起訴された別の裁判が進み、24人が死刑、20人が終身刑、98人が懲役を課されています。そして、その厳しい戒めのもと、「ニュールンベルクの倫理綱領」(1949年）が制定され、その第1条には、「研究対象となる人間の自発的承認が絶対に重要である」ことが明記され、それが現代医療におけるICの礎石となりました。

どうして「ヒポクラテスの誓い」を知る医師が患者を守らずに、ナチスの権力にすり寄っていったのでしょうか？

その理由は、未だ充分には分析はされていません。その一つとして、「ヒポクラテスの誓い」の根底に「パターナリズム（父権主義、温情的干渉主義)」があったことが、指摘されてきました。すなわち、「医学の専門家の私が言う通りにしていれば、間違いないのだからすべて私に任せて、養生に専念しなさい」といって「知らしむべからず、よらしむべし」という患者の自主性を無視する態度があったことです。そこに、安易な「優生思想」(アーリア民族の保護育成）と結びついた医師たちが、ナチズムの非人道的な全体主義に取り込まれていく弱点があったと言われています。そうして、T4作戦（本部がベルリン市Tiergarten 4番地にあった）といわれるユダヤ人の大量殺害や精神科医が率先して重症障害者を「生きるに値しない人々」として「安楽死」させてしまった悲惨な出来事が次々と起こりました。

「ニュールンベルクの綱領」は、医療の主体は医師で

はなく、患者であることを明確にしました。この被験者の自発的同意の尊重が、医療においても1964年世界医師会「ヘルシンキ宣言」の中心となり、「インフォームド・コンセント（IC）」と呼ばれるようになりました。そして、医師の側には、患者に充分理解できるよう「説明義務」が求められ、患者はそれに基づいて「自発的な意志を持って同意すること」が医療の中のルールとなって来ました。

戦後70年、本年2月に94歳で亡くなったドイツのヴァイツゼッカー元大統領は、大戦後40周年（1985年）5月の連邦議会において、「荒野の40年」と題し、世界に大きな反響を呼んだ演説を行いました。その中で、彼は「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけがありません。後になって過去を変たり、起らなかつたことにするわけにはまいりません。しかし、過去に目を閉す者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」と警告しています。

しかし、日本もナチスの人体実験と同様の「731部隊」による非人道的な人体実験を行っています。この部隊は、第2次世界大戦中に中国東北部（かっての「満州」）に配属された防疫給水部隊の通称です。彼らは、細菌兵器の開発に従事し、捕虜となった主に中国人や朝鮮の人々を「マルタ」と呼んで数々の人体実験に使用したとされています。日本にも、こうした大戦中に犯した人体実験の戦争責任があります。しかし、これを遂行した医師たちは、米国にそのデータを提供することで免罪され、ドイツの医師たちとは違って、その責任を追及されることはありませんでした。彼らは、戦後も日本の医療の中枢となり、その無反省による一つの必然的な帰結として、「薬害エイズ事件」（1980年）が起こったと言われます。この事実に目をそむけ、その歴史に関してそのまま「なかった」ことにすることができるでしょうか。日本には、当時のドイツ医学を継承した名残があり、決して、正しい意味で、こうした戦時中の悲惨な体験が反省された訳ではありません。

西欧とは文化の異なる日本でも、「医は仁術なり」と言われ、医術は単なる技術ではありませんでした。「仁」とは中国を中心とする儒教思想の根本理念で、自他のへだてなく、一切のものに対していつくしみ・親しみ・なさけぶかくある心で、「忠恕」とも言われます。日本文化の中では、「おもてなし」という言葉にも、その意味が含まれています。これは、「ヒポクラテスの誓い」にも等しい医療の理想と言えますが、基本的には、やはり封建社会の中でのパターナリズムの範疇にあり、一定の時代的制約を受けた考え方といえます。

すでに、紀元前4世紀のころ、荘子は儒教道徳を中心とした統治社会のパターナリズムの側面に対して鋭い警告を発していました。

南海の帝・儵（しゅく）と北海の帝・忽（こつ）とが、中央の帝・混沌（こんとん）の地で幾度か会いましたが、そのたびに混沌は快くもてなしました。儵と忽はなにかお礼をしようと相談しました。
「人は皆七つの穴があり、見たり、聞いたり、食べたり、息をすることができるのに、混沌には穴がない。
穴をあけてあげたらどうだろう。」
そこで二人は、毎日一つずつ穴をあけました。
ところが、七日目混沌は死んでしまいました。
（『荘子』応帝王編）

このように、私たちには、医師あるいは医療人主導のパターナリズムを克服して、患者の自己決定権を第一とする立場に立って考えると言う、判断軸の変換が求められています。この事に無自覚なままでは、やはり患者不在の医療となってしまいます。ICに基づく「究極のホスピタリティ」を目指す医療を実現することが問われているのではないでしょうか。

ながい間、医師にとって「黄金律」とされた「ヒポクラテスの誓い」には弱点があり、医師にとって自明の理であった「父性主義・温情的干渉主義」が批判されました。そして、医療における理想の目標は、患者の「自主性（patient autonomy）」または「自己決定権（self determination）」の確立にあると言われます。ただ、その決定に当たって必要な知識や判断材料は、医療側の手にあり、患者とは大きな非対称性があるため、医療側に説明責任accountabilityが課されることになりました。第2次世界大戦後、米国でもタスキギー事件をはじめとする医師たちの人権を踏みにじる行為が反省され、1970年代からの反核運動、公民権運動、女権運動、消費者運動、ベトナム反戦運動、学園紛争など、それまで正しいと信じられてきた価値観や規範を問い直す公民権運動が次々と起こり、その一環として患者の「自己決定権」の尊重が当然の流れとして提出されました。当時まで、米国でも医師は患者に簡単に病状を説明するだけで、検査、治療の選択はもっぱら医師が行っていた父性主義的な医療でした。そのあり方に反抗して、Let me decide（自分の身体の事は自分で決めさせよ）と主張する患者団体の運動が起こり、それに共鳴した多くの人たちが、

「患者中心の医療」の実現のため、いかなる倫理規範が必要かと論議されるようになりました。

このように、「パターナリズム」から「インフォームド・コンセント」への判断軸の変換は、個人の人権が尊重される近代医療における必然の流れといえます。この両者の関係は、古い形式と新しい形式といえますが、必ずしも悪い形式と良い形式という関係ではありません。それらは、今後も互いに補完し合い、時には対立しながら現代医療を形成していくものと思われます。

現代社会においては、医学の発展と医療技術の高度化に伴い、これまで「運命」と諦めていた不治の病への対応、安楽死、尊厳死など生と死の「選択」が可能となり、一方では、遺伝子工学の発展により、自然の摂理とされた「生命の尊厳」への人為的操作・介入も可能となりました。すなわち、「生命のあり方」すべてが、人の尊厳とその利害に関わる人間存在そのものが問われる時代となりました。「バイオエシックス（bioethics）は、ヘルス・ケアと生物学的サイエンスおいて起こってくる倫理的・社会的・法的・哲学的および、その他の関連する学問である」（ケネディ倫理研究所、1971年）と定義されています。すなわち、バイオエシックスは、バイオ（bio=生命）とエシックス（ethics=倫理）の複合語として新しく生れ、「人の生命に影響をおよぼす」すべての事項を対象としています。生命倫理学という言葉を初めて使用したのは、ポーター（Potter, V.R., 1970年）と言われます。彼の意図するところは、生命科学や医療における倫理問題だけでなく、生態系の破壊や環境問題に対する危機感から生命科学と人文社会科学を統合した新しい学問を提唱することでした。その後、1970年代後半になってこの言葉が、医療関連の研究分野に浸透していったと言われています。この時代の代表的な著作が、ビーチャムとチルドレス（Beauchamp, T.L. and Childress, J.F.）による教科書『生命医学倫理』（Principles of Bioethical Ethics, 1979）として出版され、4原則が提唱されました。すなわち、(1) 自律尊重原則（Respect of Autonomy）：患者の自己決定権の尊重すること、(2) 恩恵原則（Beneficence）:患者の健康を増進することを目的、それ以外の目的で行われてはならないこと、(3) 無危害原則（Nonmaleficence）：患者の害（harm）になる行為はしてはならないこと、(4) 正義原則（Justice）：すべての患者に公平（equality）・公正（fairness）に医療をおこなうこと、とされています。ここでも、(1) 自律尊重原則が最も重視されている点が注目されます。

さて、18世紀ルソーは、当時の思想家が無条件に「文明は直線的に進歩する」と信じ、その反省を失った文明の独走に対して「自然に帰れ」と警告しました。現代医学は、新しい科学技術の発展により著しく進歩していますが、人間の存在を忘れ、人権を無視した発展ではいけません。私たち医療人には、復古主義ではなく、新しいICに基づく医療の実現へと努力することが求められています。すなわち、生命倫理（bioethics）は、「ヒポクラテスの誓い」（「不易の倫理」）の土台の上に、時代の変化の中で生れたICの新しい価値観（「流行の倫理」）を重ねた「不易・流行の倫理」を不断に探求する学問分野と言えます。

最後に、本学の目的は、医療系総合大学として建学の精神（「社会に役立つ道に生き抜く奉仕の精神」）のもと、生命倫理を深く探求してICに基づく「究極のホスピタリティ」を不断に追求する医療人を育成することにあると考えています。また、この「究極のホスピタリティ（おもてなし）」という言葉を本学の文化・風土として育てていきたいと願っています。

目　　次

巻 頭 言

医学・医療と生命倫理 ―パターナリズムからインフォームド・コンセントへ …吉田　宗平

原　　著

伝統医療文化における形神観と「美」の研究　― 鍼灸学の肉体と精神 ― ……王　　財源…… 1

報　　告

消渇について　古医書からの一考察……國松佳子　　戸田静男…… 10

平成26年度　関西医療大学大学院　保健医療学研究科　保健医療学専攻修士論文一覧 …… 23

平成26年度　関西医療大学附属保健医療施設の活動状況について …… 24

平成26年度　ユニット研究活動状況 …… 27

人文・自然科学ユニット研究活動状況…… 27
基礎医学ユニット研究活動状況…… 28
臨床医学ユニット研究活動状況…… 29
鍼灸学ユニット研究活動状況…… 35
スポーツトレーナー学ユニット研究活動状況…… 39
理学療法学ユニット研究活動状況…… 40
ヘルスプロモーション学ユニット研究活動状況…… 46
臨床検査学ユニット研究活動状況…… 50
基礎看護学ユニット研究活動状況…… 53
臨床看護学ユニット研究活動状況…… 54
生涯発達看護学ユニット研究活動状況…… 56
地域・老年看護学ユニット研究活動状況…… 58

平成25年度　関西医療大学動物実験に関する現況調査票 …… 61

平成25年度　関西医療大学動物実験に関する自己点検・評価報告書 …… 63

CONTENTS

Foreword ……Sohei YOSHIDA

Original Research

Study on "Beauty" and Perspectives on Body and Spirit in Traditional Medicine:
Body and Spirit in Acupuncture and Moxibustion ……Zai gen OH …… 1

Report

Syokatsu on Old Medical Book …… Yoshiko KUNIMATSU Shizuo TODA …… 10

Department of Health Sciences, Graduate School of Health Sciences,
Graduate School of Kansai University of Health Sciences in 2014 …… 23

Activity of Intergrative Medicine Clinic, Kansai University of Health Sciences in 2014 …… 24

Activity List of Kansai University of Health Sciences in 2014 …… 27

Kansai University of Health Sciences Questionnaire
on the Present Situation Concerning Animal Experimentation 2013 …… 61

Kansai University of Health Sciences Report on the Self-Examination and
Self-Assessment Concerning Animal Experimentation 2013 …… 63

原　著

伝統医療文化における形神観と「美」の研究
― 鍼灸学の肉体と精神 ―

王　財源[1)]

1）関西医療大学　保健医療学部自然科学ユニット

要　旨

本論は伝統医療を行う上で、精神と肉体が不二なることを中国哲学の観点より論じ、精神美が肉体の「美」を創出する可能性について言及した。

身体の「美」が、「こころ」の働きに由来することを述べた文献は未だ少ない。そこで中国古代の医療文化にみえる、鍼灸学と「美」との関係について、中国古典文献に基づいて検討を加えた。その結果、古代中国の身体観には、すでに「こころ」の働きにしたがって肉体に表出することについて注視されていた。「こころ」の働きが行動となって現れ、顔面の表情を作り出す。そこには個々の異なった感情や環境により基準がない。興味深いことに、古代中国には肉体と精神が一体不二と説く形神思想がある。つまり、内発的な力の開花（エンパワーメント）に「美」の創出があることが考えられていたのである。これらは今日の中国伝統医学に記された内外合一観と符号することが示唆された。

キーワード：美容　精神　鍼灸

Ⅰ．序　論

六朝時代の民衆の風俗習慣を色濃く描き出した『世説新語』には、当時の女性の美貌や容貌について、大衆の考え方が詳細に網羅されている[1)]。興味深いことに『世説新語』の特色が、荀子以来からの相貌や品評より、人の禍福や命運をみる習慣があり、「こころ」の働きが身体に波及する「美」についても論じている。つまり内発的な「美」は喜、怒、哀、楽などの感情がそのまま身体上の行動となって現れることである。各々の環境や経験、知識や見識により異なり基準がない。「美」における価値観も同じ、人間が五官（物質）より取り入れた情報により「美」を判断する。そこにはそれぞれの異なった「美」意識が発生し、「こころ」と「物質」の調和が保たれるという[2)]。そこで本論では鍼灸美容を実施する上で、鍼灸教育で必要な「美」について、「こころ」と「物質」（肉体）の関係より検討した。

Ⅱ　方　法

『荘子』『論語』『抱朴子』等々の思想、哲学書、『黄帝内経』を始めとする医書を用いた。また、化粧技術などの一般的な社会風俗の記録書である『世説新語』（六朝）『天工開物』（明）『事林広記』（宋）、人物評価の書籍として『人物誌』（魏）『挺経』（清）等々を用いた。

また、医書原文は人民衛生出版社整理『黄帝内経』影印本（2013）、日本内経医学会所蔵の明刊無名氏本『新刊黄帝内経霊枢』（内藤湖南旧蔵）を集録した『霊枢』（2006）と、校勘は篠原孝市監修、黄帝内経素問（下）『黄帝内経霊枢』ｵﾘｴﾝﾄ出版社（1985）を用いた。

訓読には南京中医薬大学中医系篇著、原書『黄帝内経霊枢訳釈』上海科学技術出版社（1986）、石田秀実、白杉悦雄監訳『現代語訳・黄帝内経霊枢』（2007）と、石田秀実、島田隆司ほか訳『現代語訳・黄帝内経素問』（2006）、東洋学術出版社を参考にした。

尚、検証方法を迅速化するために本学所蔵の『四部叢刊』『歴代漢方名作選』『歴代鍼灸名作選』『正統道蔵』（繁体字図文版・凱希メディアサービス）を用いて、古典にみえる蔵府、気血が皮毛や肌膚に与える人体上の生理的な働きについて抽出した。さらに史実上の思想背景との比較を行うことを目的に『諸子集成』中華書局香

港分局（1978）や、文淵閣本『四庫全書』（電子版・漢字情報システム）を参考に、先秦から清代前半に至る「美」と身体におる伝統医学との相関性を考察した。

Ⅲ　結果と考察

人間の精神と肉体との繋がりは、古来、『荘子』『論語』等々で論じられてきた。それらは先人らの智慧の結晶によって発展を遂げ、後世にみる伝統医療文化へと継承され、今日の伝統医学を形成する礎の一つとなった。これらを踏襲して本論では古代中国の文学、哲学観より書誌学的に、伝統的な美学を通じて考察を進めた。

『世説新語』
賢姫、第十九
「王司徒婦、鍾氏女、太傅曽孫。亦有俊才女徳」[3]。
王司徒の婦は、鍾氏の女にして、太傅の曽孫なり。亦俊才女徳有り。
（王司徒の妻は鍾氏の娘、太傅の曽孫であり、やはりすぐれた才と婦人の徳とそなえていた）[4]。

ここに載る俊才とは、傑出した才知のことで、女子の本来の美しさが、その人間的な聡明さや懸命さ、つまり「徳」に美の象徴があったという。

おそらく六朝期における、客観的な「美」の象徴には男女により異なった価値観があり、人間の内面に潜む本質的な「美」と、装飾などで飾れる外見上の「美」が異なっていた。女性における「美」については、肌の白さより、むしろ「徳」が女性に求められていた。そしてこれら内面と外形の関係性は、古代の中国文献に共通してみられる特徴でもある。

医書『黄帝内経』も内外の関係性について注目していた。

『重広補注黄帝内経素問』巻第一
上古天真論第一
「恬惔虚无、真気従之、精神内守、病安従來」[5]。
恬惔虚無なれば、真気之に従い、精神内に守る、病安んぞ従い来らんや。
（心がけは安らかで静かであるべきで、貪欲であったり、妄想したりしてはならない。そうすれば真気が調和し、精神もまた内を守ってすりへり散じることはない）[6]。

ここに記された「恬惔虚无」という『老子』の思想に流れる水脈は、底辺で医書である『黄帝内経』と結びついていることがわかる。

『雲笈七籤』巻五十九、諸家氣法、延陵君修養大略をみると「恬憺虚無、眞炁從之、精神内守、病從安來」とある。「信哉!是故須知形神之理、養而全之、審内外之病、愼而修之」と、すべからず形神の理論を知り、内外の病を審らかにする。と、道家思想にも養生の法則として記されていた[7]。

また、『荘子』は形神を兼ね備えた者を「聖人の徳」と表現していることから、『荘子』は人のこころの働きが外形の「美」となって現れ人格美を形成すると考えられる。その例文を挙げる。

『文篇』二十四
大宗師　荘子
「若然者、其心忘、其容寂、其顙頯、凄然似秋、煖然似春、喜怒通四時、與物有宜、而莫知其極」。
然るが若き者は、其の心忘たり、其の容寂（かたちじゃく）たり、其の顙頯（ひたひけい）たり。凄然として秋に似、煖然として春に似たり、喜怒は四時に通じ、物と宜しき有りて、其の極を知る莫し。
（こういうふうな人は、すべてを忘れた心、ひっそりとした姿で、広い額をしている。それから受ける感じは、時によると秋のようにさむざむとしたものだし、時によると春のようにほのぼのとしたものを持っている。喜びや怒りの感情は四時の変化に等しく、心は物と調和し、無限の広さを持っている）[8]。

これらのこころの働きが外形となって現れることは、絵画の世界にもみられる。唐代の絵画理論家である張彦遠の「六法」には、「気」と「韻」が生き生きとしてくる「気韻生動」という技法がある。「気韻」には「神」が含まれ、画家自身の気魄が作品に現れるという[9]。

しかしながら『抱朴子』をみると、外面に表出された個々の情報のみでは判断出来ない興味深い事例が記述されていたので挙げておく。

『抱朴子』外篇、巻三
博喻第三十八
「抱朴子曰、膚表或不可以論中。望貌或不可以核能。仲尼以喪家之狗。公旦類朴斲之材。咎繇面如蒙箕。伊尹形若槁骸。及龍陽宋朝猶、土偶之冠夜光。藉孺、董鄧猶錦

紈之裹塵埃也」。

抱朴子曰く、膚表は、以て中を論ず可からず或(あ)り。望貌は、以て能を核ぶる可からざる或り。仲尼は喪家の狗に似。公旦は朴斲の材に類し、咎繇は面蒙供の如く、伊尹は形槁體の苦くなりけり、龍陽、宋朝に及んでは、猶お土偶の冠れるがごとく。藉孺、董賢、鄧通は猶お錦紈の塵埃を裹めるがごとし[10]。

（抱朴子が言う、皮膚の上から中味を論じられない場合がある。顔を見ただけでは能力を見抜けない場合がある。孔子は喪中の家の犬のように痩せていた〈『史記』孔子世家〉。周公は荒削りの木をぶった切ったようにごつごつしていた〈『荀子』非相〉。皐陶の顔はざりがにに似ていた〈『荀子』では孔子の形容になっている〉。伊尹の姿は枯れ木か骸骨のようだった〈『荀子』ではひげも眉もないという〉。一方、龍陽君〈戦国魏王の寵童〉、宋朝〈春秋宋の公子〉は美しいけれども、土人形の頭に夜光の珠をのせたようなもの。藉孺、董賢、鄧通〈それぞれ漢の高祖、哀帝、文帝の寵童〉も、綿や絹でごみを包んだようなものである）[11]。

「抱朴子曰、志得則顔怡。意失則容戚。木朽則末枯。源淺則流促。有諸中者必形乎表、發乎邇者必著乎遠」。

抱朴子曰く、志、得れば則ち顔怡び、意、失すれば則ち容戚み、木、朽つれば則ち末枯れ、源淺けければ則ち流促し。諸を中に有する者は、必ず表に形れ、邇きに發する者は、必ず遠きに著わる、と[12]。

（抱朴子が言う、思うようになれば顔はほころぶ。思うようにならぬば顔色が冴えない。根が腐れば梢は枯れる。水源が浅いと流れはすぐに涸れる。つまり、中にあるものは必ず表に現れ、手元から出たものは必ず遠い先で明瞭になる）[13]。

上記、『抱朴子』博喻篇ではこころの動きが、必ず形になって人体表面に現れることが述べられていた。

そこで医書における「こころ」が伝統医学で言う「神」と、感情でつながるという蔵府学説に載る概念について確認してみたい[14]。

先ず、「こころ」についての先哲らはどのような概念を持つのか探ってみた。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第七
宣明五気篇第二十三
「五藏所藏。心藏神」。

五藏の藏する所。心は神を藏す。

（五蔵にはそれぞれが蔵しているものがある。心蔵は神を蔵する）[15]。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第三
霊蘭秘典論篇第八
「心者君主之官也、神明出焉」。

心なる者は、君主之官なり。神明焉より出ず。

（心は君主にたとえられ、精神、意識、思惟活動などは、みなこれから出るのである）[16]。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第三
六節蔵象論篇第九
「心者、生之本、神之變也。其華在面、其充在血脉」。

心なる者は、生の本、神の変なり。其の華は面に在り、其の充は血脈にあり。

（心は生命の根本をなすもので、智慧や変化の源である。心の栄華は顔面部に現れ、その機能は血脈の充実している様子に現れるのである）[17]。

心は生命の根本をなし、智慧や変化の源であるという。

心の栄華は顔面部に現れ、その機能が血脈の充実している様子に現れるので、顔面の血色が心の虚実と関係していることが理解できる。

また、神明が乱れた時の具体的な状態が、古典医書では以下の内容で記されていた。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第五
脉要精微論篇第十七
「衣被不斂、言語善悪、不避親疏者、此神明之亂也」。

衣被斂めずして、言語の善悪、親疏を避けざる者は、此れ神明の乱れなり。

（病人が煩悶して衣服を正しく着けることができず、言語が錯乱して親疎遠近の区別がつかなくなったものは、一種の譫語であり、神明が乱れてなったものである）[18]。

ここには病人が煩悶して衣服の着脱ができず、言語が錯乱して親疎遠近の区別がつかなくなったものは、神明（精神）の乱れによるものとしている。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第十九
天元紀大論篇第六十六
「夫五運陰陽者、天地之道也。萬物之綱紀、變化之父母、生殺之本始、神明之府也」。

それ五運陰陽なる者は、天地の道なり。萬物の網紀、

変化の父母、生殺の本始、神明の府なり。

（五運と陰陽は宇宙の中の対立と統一にかかわる法則なのである。すべての事物はみな陰と陽という二つの性質の対立する局面をそなえており、それが事物の発生や変化の始元であり、生長と壊敗の根本であり、神明のからくりがその中に蔵されているのであるから、はっきり認識しないでいられるであろうか）[19]。

すべての事物が陰陽という二つの性質に対立する局面を備えており、それが事物の発生や変化の始原であり、成長と破壊の根本であり、神明のからくりがその中に蔵されているという。

このように先哲らによって「こころ」と「神（神明）」の関係が、古来より探求され続けた。

上記の内容から「こころ」（神）の働きは形（形体、容姿）となって外にあらわれることが理解できる。つまり、しぐさや気品、姿勢や動きなどといった、目には見えない「こころ」の状態を、可視化できる状態へ変化させることである。

たとえば、喜、怒、哀、楽などの感情が、「こころ」の働きによって、形となって体表面（優しさ、怒り、しぐさ）に現れる。故に、喜びや怒りは顔の表情筋に影響を与え、さまざまな仕草を作り出すことで、客観的に評価できる顔貌上の「美」を創り出すのである。

これらの「美」意識については『管子』には次のような記述がみえる。

『管子』巻十三
心術下第三十七
「金〈正〉心在中、不可匿。外見於形容、可知於顔色」。
正心中に在れば、匿す可からず。外、形容にあらわれ、顔色に知らる。

（誠の心が身にあれば、それを覆い隠すことはできない。それは外に出て態度に現れ、顔つきでも知られるのである）[20]。

『管子』巻第十六
内業第四十九
「全〈正〉心在中、不可蔽匿。和〈知〉於形容、見於膚色」。
全心中に在れば、蔽匿す可からず。形容に知られ、膚色に見る。

（誠の心が身にあれば、それを覆い隠すことはできない。それは態度で知られ、顔色に現れるのである）[21]。

つまり、「全き心」は容貌や容姿の色や形となって現れるという興味深い内容が述べられている。

さらに「こころ」の修養と強壮な身体との関係については、前掲した『荀子』にもみえるが、とくに美容と結びつく皮膚との関わりについて検討した。

『管子』巻第十六
内業第四十九
「人能正静、皮膚裕寛、耳目聡明、筋信而強」。
人能く正静なれば、皮膚裕寛に耳目聡明に、筋信びて骨強し。

（人が平正静虚でいられるならば、その皮膚はふっくらとつややかであり、耳や目の働きは聡明であり、筋肉は強く、しなやかに伸びて骨は堅強である）[22]。

また、『管子』にみえる、「こころ」と「気」との結び付きをみる。

心術下第三十七には
「氣者身之充也。行（正）者（行）之義也。充不美、則心不得」。
気は身の充なり。正は行ひの義なり。充、美ならざれば、則ち心、得ず。

（気は身体中に充実するものである。正しい状態とは行動があるべき道義に適合することである。身体中に充実する気が純美なものでなければ心は正しい働きをすることができない）[23]。

これらの文脈には「こころ」の状態が、そのまま身体に影響を及ぼすことが記されていた。

次に、「気」の正常な流れや働きを失うことにより、肉体的な老いが始まる。そのために、延命長寿による若返りの手段として、古典医書『黄帝内経』に「気」を益す方法が述べられている。例えば鍼で「気」を補うことで、身体の容貌上の「美」を作りあげるという先人の智慧を挙げてみたい。

『黄帝内経霊枢経』巻第二十
邪客第七十一
「輔鍼導氣、邪得淫泆、眞氣得居」。

鍼をたすけて気を導けば、邪は淫泆することを得、真気は居ることを得ん。

（鍼を補助する手法を用いて、正気を導き、邪気を消散させ、真気が内を守ることができるようにしなければならないのである）[24]。

以上の論述を踏まえて、本論が体質の改善に主眼を置いた、「美」を創出するための実践論として明かされていることがわかる。

さらに伝統医学を基盤とする体質の診察法を通じて、「美」の創出を妨げる因子を考察し、それが実践的な鍼灸美容の内容と如何に結びつくのかを、以下の古典文献より論証を試みた。

先ず、「美」の創出を求める上で、その最大の特徴が全身を診て局所の状態を観察する方法である。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第二十三
疏五過論篇七十七
「凡欲診病者、必問飲食居處、暴樂暴苦、始樂後苦。皆傷精氣、精氣竭絶、形體毀沮」。

およそ、病を診せんと欲する者は、必ず飲食、居處、暴かに樂しみしか暴かに苦しみしか、始めに樂しみも後に苦しみしかを問う。皆、精気を傷り、精気をして竭絶せしめ、形體をして毀沮せしむればなり。

（およそ病人を診察する者は、必ずまず飲食、日常生活と周囲の環境や、精神上、突然喜んだり突然苦しんだりしなかったか、あるいは最初喜んで後に苦しまなかったか、などについて問う必要がある。こうした正常でない生活は、いずれも精気をすりへらす可能性があり、精気を衰え竭きさせ、身体をこぼち失わせてしまうからだ）[25]。

この文には病者と載るが、美容を求める者も同じこと、健康的な心身の調和が基本となるために、依頼者の訴えに対して傾聴することから始める。それらの行為は、伝統医学に受け継がれた四診という四つの診察方法が基礎にある。それが望、聞、問、切の四診である。とりわけ伝統医学に受け継ぐ切診と「美」の結び付きは興味深い。そこで古典文献よりの論証を試みた。切診とは依頼者の肌に触れることで身体的所見を知る方法である。切診法の中で、とくに「気」の充足を診る脈診は、気血の流動と深く関わっている。ここでの美容は、脈の虚実で蔵府経絡の変化を知り、肌の状態に軸足を置いたものである。

『難経』
六十一難
「切脉而知之者、診其寸口、視其虚實、以知其病、病在何蔵府也」。

脉を切してこれを知る者は、其の寸口を診、其の虚實を視、以てその病い何れの蔵府に在るかを知るなり。

（脉を切してこれを知るとは、寸口の脈を按じてその虚実を弁別し、その病変がどの蔵府にあるかを知ることである）[26]。

上記の文脈より考えても、施術者は体内の気血や津液の不足や過剰を判断し、五蔵や六府の異常をみる。もし、体質に異常があれば、病証名を明らかにして、体質の改善を行い、「美」を創出する。

さらにそこには心理的素因を含めた考察を行わなければならない。そこで鍼灸美容を実践する上で、「美」を求める依頼者が施術者に求める治療姿勢について論証した。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第八
八正神明論篇第二十六
「神乎神、耳不聞、目明、心開而志先。慧然獨悟、口弗能言。俱視獨見。適若昏、昭然獨明、若風吹雲。故曰神」。

神乎なるかな神、耳に聞かざるも、目明らかに、心開きて志先んず。慧然として獨り悟りて、口言うこと能わず。俱に視て獨り見る。適に昏きが若きも、昭然として獨り明らかなること、風の雲を吹くが若し。故に神と曰う。

（いわゆる神とは、望見するだけでわかることを言う。たとえ患者の訴えが耳に達しなくても、望診をすれば、疾病の変化を目で明らかにとらえ、こころの内にすでに理解し、思想の上でも疾病に対する概念をはっきりと認識することができる。これは素早くこころに了解し、神によって会得するその人独自の悟りで、言語で表すことはできない。たとえば、同時に同じものを見ていながら、誰も見抜けないのに、その人だけは望診によって見抜くことができるのである。それはちょうど暗闇の中では、誰もみな何も見分けることができないのに、その人だけは望診を用いて、まるで風が雲を吹き払うように、一点の曇りなく明らかにすることができるというのに似ている。だから神というのである）[27]。

次に施術姿勢に対する文脈を提示する。これは邪念や雑念がないことが問われる。これは現在の鍼灸の臨床にも通じている。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第八
寶命全形論篇第二十五

「一曰治神。二曰知養身。三曰知毒薬爲真。四曰制砭石小大。五曰知府藏血気之診」。

一に曰く神を治む。二に曰く身を養うことを知る。三に曰く毒薬の真たるを知る。四に曰く砭石の小大を制す。五に曰く府藏血気の診を知る。

（第一に精神を集中させること。第二に養身の道をわきまえること。第三に薬物の正しい性能を熟知すること。第四に砭石の大小に注意して適切なものを用いること。第五に蔵府気血の診断方法を会得すること）[28]。

また、美しい肌を保つ精神状態と血の関係について記されていた。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第十七
調経論篇第六十二
「血有餘則怒、不足則恐」。

血、有餘なれば則ち怒り、不足なれば則ち恐る。

（血が余ればイライラしやすく、血が不足すれば恐れやすくなる）[29]。

これらは血の不足が顔面部の所見としてみられる興味深い内容である。

『黄帝内経霊枢経』巻第十八
陰陽二十五人第六十四
「手少陽之上、血気盛則眉美以長、耳色美。血気皆少則耳焦悪色」。

手の少陽の上、血気盛んなれば則ち眉美しくして以て長く、耳色美し、血気皆少なければ則ち耳焦げ悪しき色なり。

（上部を循行する手の少陽経脈に、気血が充足していれば、眉毛は美しく長く、耳部もきれいで潤いがある。血気がともに少なければ、耳部は焦げ枯れたようでツヤがない）[30]。

ここには気血の不足が身体の眉毛に及ぼす影響についてふれていた。

従って、体表の「美」への創出という観点には、健全な気血の運行と、蔵府や経絡の正常な働きが常に保たれることが必要であり、古典医書に見る限りでは、内外合一観という形神の融合、即ち、身体内部の健康に裏付けされた、鍼灸による美容の創出が、今後の鍼灸美容教育に取り入れる必要性が示唆された（表1）。

Ⅳ　結　論

表1. 形（外）、神（内）観の古典文献別比較　（部分抜粋・年順不同）

文　献　名	外	内
論　語	文（文　飾）	質（本　質）
世説新語	男性の美は「容姿」 容止篇第十四	女性の美は「徳」 賢媛篇第十九
荘　子	形　全	徳　全・神　全
爾雅注疏	美士為彦	美女為媛
霊　枢　本蔵篇	視其外応従外	知其内蔵知内
霊　枢　外揣篇	司　外	揣　内
素　問　陰陽応象論	以　表	知　裏
素　問　八正神明論	形謂形診可観	神謂神智通悟
類　経　巻三	養　形	養　神
淮南子	外束其形	内総其徳
冰　鑒	外為気色	内為精神
眞　誥　運題象篇	目者身之鏡　耳者体之牖　心悲則面燋　脳減則髪素 視多則鏡昏　聴衆則牖閉	

※「美」の創出は文学から哲学に、哲学から医学の中へと共生する。
本来の伝統医療文化には、哲理と技術の共生による内発的な「美」が求められる。
古典理論には精神や生命の活動の淵源を「神」（内）とし、肉体や身体などの可視できる範疇のものを「形」（外）という表現を用いる事が少なくはない。
　但し、古典では「形」の動きは「神」が主宰するとある。これは医書や文学書には共通した概念で記されている。
また、欽定四庫全書に記される宋の朱子集註、孟子巻六、告子章句下や、論語精義巻一上、元の朱公遷撰、四書通旨巻六、右明内外輕重之分には「有諸内必形諸外」という文脈が載る。この理論は現代中医診断学において用いられている内外の考え方と一致している。このことから考えても、古来より普遍的な理論として存在していた。

欧米の「美学」が一学問として歩み出したのはここ200年ほど前ではあるが、東洋の美学の歴史は『楚辞』や『詩経』の時代にまでさかのぼることができる。そこには美しく若さを願う女性の生き方が色濃く反映している。女性の生き方が変わると、「美」の基準も変わらざるを終えない。「美」は時代によって移り変わり、そこには女性たちの生き方が色濃く反映している。つまり、鍼灸に求められる「美」には基準がなく、相手が変われば「美」は無限に存在し、個々の価値観によって「美」のモノサシは創出される。それらは古代中国の文学、哲学観より、また、書誌学的にも伝統的な美学と通じていた。

よって「美」の底流に脈打つ思想には、中医学で言う人間の精神と大自然の営みとの中にある「気」（生命力）[31]と「徳」（精神魂魄）[32]の共生を主とした、人間の内発的な力の開花（エンパワーメント）にある。このことが内面の変化を外面の美しさを表出させ、「人間の完全な内実」[33]による若々しい健康的な肉体を作り上げ、さらに個性や自我の発見より、美しい心身の容貌へとつながることが『論語』『荘子』『淮南子』『黄帝内経』『世説新語』等々の哲学、文学からの諸文献を通じて、中国伝統医療文化にも影響を与えたのである。そしてこれらの背景には、周易などにみる「内剛外柔」の概念が底流に流れ、先人らの「美」に対する卓越的な考え方がみえる。今後、鍼灸の美容教育でも、これら本質的な理論体系の構築に還元できる、身体観への深き洞察力をもつ施術者の育成が必要であることが今後の課題として示唆された。

文献・注釈

1）蒋凡、李笑野、白振奎評注『全評新注世説新語』人民衛生出版社、2009年、810-845頁。

2）万志全著『中国古代審美思想』中国社会科学出版社、2010年、258-260頁には『鄭板橋集』所載の板橋題画の「竹」をあげ、こころの物質化について述べている。鄭燮著『鄭板橋集』板橋題画、「竹」上海古籍出版社、1962年、154頁を参照。

3）蒋凡、李笑野、白振奎評注『全評新注世説新語』人民文学出版社、2009年、829-830頁。

4）目加田誠、三樹彰、田中忠『世説新語』（下）新釈漢文大系78、明治書院、1978年、860頁。

5）『正統道藏』洞真部、衆術類に所収の馬承禎撰「修眞精義雜論」愼忌論に同文が載る。

6）島田隆司訳を所収する『現代語訳・黄帝内経素問』（上）、東洋学術出版社、2006年、32頁。

7）張君房編、李永晟点校『雲笈七籤』三、中華書局、1988年、1298頁。

8）唐順之篇『文篇』巻二十四、大宗師、欽定四庫全書にある。句読は阿部吉雄ほか、『老子・荘子』明治書院、新釈漢文大系第7巻、2007年、249頁。

9）宇佐美文理著『歴代名画記』岩波書店、2010年、99-106、188頁。

10）御手洗勝著『抱朴子』外篇簡注（三）、広島大学文学部中国哲学研究室、1968年、1045-1046頁。

11）本田濟著『抱朴子外篇2』平凡社、2002年、88-89頁。

12）御手洗勝著『抱朴子』外篇簡注（三）、広島大学文学部中国哲学研究室、1968年、1029頁。

13）本田濟著『抱朴子外篇2』平凡社、2002年、85頁。

14）拙著『わかりやすい臨床中医蔵府学』第三版、医歯薬出版、2013年、21-22頁。

15）藤山和子訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、408頁。

16）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、161-164頁
『黄帝内経素問補註釋文』巻之八、霊蘭秘典論篇、『黄帝内経素問遺篇』巻之三、『黄帝内経素問遺篇』巻之五に同文がある。

17）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、183-184頁。

18）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、273-274頁。

19）松村巧訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』下、東洋学術出版社、2006年、4-6頁。『黄帝内経素問補註釋文』巻之五「府官府也。言所以生殺變化之多端者、何哉以神明居其中也。下文曰、天地之動静、神明爲之綱紀。故『易繫辭』曰、陰陽不測之謂神。亦謂居其中也。○新校正云、詳「陰陽」至「神明之府」與『天元紀大論』同注頗異」とある。

20）「金」と「正」の誤りとする。（兪樾、許維遹）に従い、

「正心在中」に改める。遠藤哲夫著、新釈漢文大系、第43巻『管子』中、明治書院、2010年、700-702頁。

21）全心在中不可蔽匿、心術下篇（2）の「金心在中不可匿」の「金」を「正」に改めたのにならい、「全」を「正」の字に改める。また、和於形容見於膚色の「和」を「知」の誤りとする。（劉績、王念孫）に従い、「知」の字に改める。遠藤哲夫著、新釈漢文大系、第43巻『管子』中、明治書院、2010年、835-836頁。

22）遠藤哲夫著、新釈漢文大系、第43巻『管子』中、明治書院、2010年、832-833頁。

23）遠藤哲夫著、新釈漢文大系、第43巻『管子』中、明治書院、2010年、696-699頁。

24）白杉悦雄訳所収『現代語訳・黄帝内経霊枢』下、東洋学術出版社、2007年、327-328頁。

25）石田秀実訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』下、東洋学術出版社、2006年、494-495頁。

26）戸川芳郎監訳、浅川要、井垣清明、石田秀実ほか訳所収『難経解説』東洋学術出版社、1987年、336-338頁。

27）藤山和子訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、440-442頁。

28）藤山和子訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、424-425頁。

29）藤山和子訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』中、東洋学術出版社、2006年、375-376頁。

30）白杉悦雄訳所収『現代語訳・黄帝内経霊枢』下、東洋学術出版社、2007年、254-255頁。

31）楊咏祁著《『藝概』論美学範疇「気」》が、徐林祥主篇『劉熙載美学思想研究論文集』、四川大学出版社、成都、1993年、95-107頁に所収。

32）潘顕一、李裴、申喜萍著『道教美学思想史研究』商務印書館、2010年、544-545頁。

33）柴田治三郎責任篇集・訳『世界の名著45』ブルクハルト「人間の発見」中央公論社、1981年、350頁。同書55頁にブルクハルトが描いたルネサンスの真髄が、個々の人間、個性、自我の発見にあるという。また、産業と技術の構造によって、個性や人間が無視されることについて警鐘を鳴らしている。

Original Research

Study on “Beauty” and Perspectives on Body and Spirit in Traditional Medicine: Body and Spirit in Acupuncture and Moxibustion

Zai gen OH [1)]

1）Faculty of Health Sciences in Kansai University of Health Sciences

Abstract

This paper argues that from the perspective of traditional Chinese medical philosophy, the spirit and the body are indivisible, suggesting that it is possible for mental health to lead to physical “beauty.”

There is little literature as yet suggesting that physical beauty has its roots in mind and spirit. I examined ancient Chinese literature, focusing on the relationship of beauty with acupuncture and moxibustion that can be traced to medical culture in ancient China. I found that, according to ancient Chinese views, “beauty” was thought to manifest itself physically as a consequence of the workings of the spirit. It was believed that the workings of the spirit surface as actions and form expressions on the face. There was no standard for individuals’ different emotions and environments. Interestingly, in ancient China, there was an idea that the body and spirit were indivisible. In other words, this implied the emergence of “beauty” through the effective channelization of the internal energy（“empowerment”）. This appears to correspond to the perceptions on the oneness of mind and body in Chinese traditional medicine, as practiced today.

Keyword：Beauty　Spirit　Acupuncture and Moxibustion

報　告

消渇について　古医書からの一考察

國松佳子　　戸田静男

関西医療大学大学院　保健医療学研究科

要　旨

目的

近年の糖尿病羅患人口の増大は、生活習慣病に起因するといわれている。このことから、糖尿病は現代病の一つと捉えられている。古医書に記載されている「消渇」は、口渇、多飲、律液消耗の症状であると述べられている。これらは、現代でいう糖尿病の症状と類似している。そのようなことから、われわれは、古医書から「消渇」についての論述を抽出、考察した。このことは、糖尿の鍼灸治療に対して大いに参考になるものと思われる。

方法

『黄帝内経』、『諸病源候論』、『備急千金要方』、『三因極一病証方論』、『鍼灸資生経』、『済生方』、『普済方』、『丹溪心法附餘』、『古今醫統大全』、『鍼灸大成』、『證治準繩』、『類経』、『景岳全書譯注』が参照された。

結果

「消渇」について最も重要と思われる古医書の記載を年代順に以下のように列記した。

1.『黄帝内経』奇病論篇では「口内が甘くなる。これは脾癉といい津液が脾に停滞。原因は美食過食で、熱が溢れる。」とある。
2.『諸病源候論』では「口渇で水を飲む」という症状で「癰疽多発」とある。また『黄帝内経』の消渇の原因と同じ記載がある。
3.『備急千金方』では「飲酒」を主な原因とし、「五臓の乾燥」を防ぐため生活習慣を慎み、その必要性が「大癰にある」と述べている。
4.『三因極一病証方論』では「消渇は精血の消耗、津液の枯渇」と述べている。
5.『鍼灸資生経』では、消渇の治療穴12穴が記載されている。
6.『済生方』では「消渇はすべて腎」とあり、『備急千金方』と同じく戒めを述べている。
7.『普済方』では「三消を患う者」とし、『備急千金方』、『済生方』と同じく戒めがあり、原因は「心火」と述べている。
8.『丹溪心法附餘』では「消渇」を「三消」に分け、「皆熱が原因。」としている。
9.『古今醫統大全』では「消渇に三焦あり」とし、『備急千金方』、『済生方』、『普済方』と同じ戒めがあり、「心火の乗」と述べている。
10.『鍼灸大成』では、消渇の治療穴19穴が記載されている。
11.『證治準繩』では「原因は飲食物。或いは精神の度を過ぎ」で、「陰気を損失」とし、その結果「燥熱の鬱滞」であると述べている
12.『類経』では三消に分け「消の陰陽」を述べ、「すべて火証とすることに疑問」を呈している。
13.『景岳全書譯注』では『類経』と同様に分けるが「虚実に分ける」ことを強調している。

考察

「消渇」の症状には、糖尿病による口渇、多尿、腎症、神経障害や皮膚軟部組織の感染症と思われる記載が各古医書にみられた。「消渇」は五臓における気、血、津液の停滞が慢性化し、化火した結果、陰分を消耗した陰虚の症状で、治療は第一次予防である陰虚の前段階にあたる実火実熱段階での養生法が重要であると思われる。

結語

「消渇」の鍼灸治療においても、生活習慣の変容が最重要であることを古医書の考察で知ることができた。

キーワード：消渇、糖尿病、古医書

【緒言】

「消渇」は最も古くは、『黄帝内経　素問』奇病論篇四十七に記載され、そこに発生経過が述べられている。

「帝曰有病口甘者 病名為何 何以得之 岐伯曰此五気之溢也 何以得之 名曰脾癉 此肥美之所発也 此人必数食甘美而多肥也 肥者令人内熱甘者令人中満 故其気上溢転為消渇（黄帝がいう。口の中が甘くなる病がある。これは何の病か。岐伯がいう。これは五味の精気が上に向かって溢れたためです。病名を脾癉といいます。食物は口から入って胃に蔵されますが、脾によって食物の精気として運化されて、津液が脾に停滞してしまうことがあります。そのため、口内に甘味を感じます。これは栄養豊富な美食で誘発された病です。この病になると、みな濃厚で甘く美味しい食物を好んで多く食べるようになります。濃厚な食味は人の体内に熱を生み、甘味は胸腹部を張満させます。ゆえに、その気が上部に溢れて消渇と」と。このように二千年以上前に、消渇として『黄帝内経』に取り上げられた消渇は、現代の糖尿病[1]と類似する症状である。

消渇の消は「きえる、つきる、なくなる、よわる、おとろえる、とける」の意味があり、渇は「かわく、のどがかわく、つきる、かれる、むさぼる」の意味がある[2]。この、消渇は血糖測定のない時代では、治療時にはすでに合併症が発生した段階で多くは不治の病であった。

現代、糖尿病は血糖コントロールによって死に直結する疾患ではなくなった。しかし、生活習慣病として慢性合併症である網膜症、腎症、神経障害を発症し、動脈硬化性疾患も伴い、QOL（quality of life）の低下へと導いていく代表的な疾患である。世界的に増大し続けており、本邦の糖尿病数は2012年の厚生労働省国民健康・栄養調査結果[3]では、950万人で、糖尿病の可能性を否定できない人（境界型に相当）数が1,100万人と推定されている。

また、消渇の医中誌における研究は主に中医学弁証と方剤の研究31件検索であり、古典文献研究はさらに少ない。消渇に対して多くの古医書に養生法が記載され、鍼灸治療法も記載されている。このようなことから、古医書の消渇を考察研究することで、増え続ける現代の糖尿病に対しても有益な鍼灸治療を提示できるのではないかと考えた。

【方法】

著名な中国古医書の１３書[5～17]を使用した。（表１、２）

表１　中国の代表的医書（下線が今回使用した医書）

中国		日本	
新石器時代	1万年		
「砭石」の出現	夏	縄文	約1万年前
	殷（1600 ？）	弥生	BC3世紀頃～
	周（前1100）		倭の国王が後漢皇帝より金印
『黄帝内経』の出現	春秋		（57）
（B.C.475~221）	戦国（前400）		
	秦（前221）		
『史記』司馬遷（B.C.90）	前漢（前202）		
『馬王堆帛書』（B.C.25）			
『黄帝八十一難経』扁鵲	後漢（25）		
（B.C.25~A.D.210）			
華佗が麻酔法による開腹術の			
実施（112~208）			
『傷寒雑病論』張仲景			
（200~210）	三国（220）		卑弥呼が魏に使いを送る（239）
	隋（581）		
『諸病源候論』巣元方（610）	唐（618）		法隆寺建立（607）遣隋使
『備急千金要方』孫思邈（652）			第一回遣唐使（630）
	宋（960）	飛鳥	大化の改新（645）
	金（1120）	（701）	朝廷は農薬寮を設け中国医学を導入
		平安	
		（794）	『医心方』丹波康頼（984）

『三因極一病証方論』陳言（1175）			
『鍼灸資生経』王執中（1220）			
『済生方』厳用和（1253）			
		鎌倉（1192）	『頓醫抄』梶原性全（1303）
	元（1271）		
	明（1368）		
		室町（1392）	
『普済方』朱肅（1460）		安土桃山（1573）	『啓廸集』曲直瀬道三（1574）
『丹溪心法附餘』程充（1481）			『扁鵲新鍼書』
『古今醫統大全』徐春甫（1556）			『鍼灸合類』
			『鍼灸枢要』
			『刺鍼家鑑集脈論』
『鍼灸大成』楊継洲（1601）		江戸（1603~1868）	『鍼灸五蘊抄』
『證治準繩』王肯堂（1602）			『鍼灸抜粋』
			『獅子流西村鍼灸秘録』
『類経』張景岳（1624）			
『景岳全書譯注』張景岳（1640）			
	清（1644）		『鍼灸則』菅沼周桂（1767）
			『内科秘録』本間棗軒（1864）

表２　参照箇所

古医書	参照箇所
『黄帝内経　素問』	奇病論篇四十七
『諸病源候論』	消渇諸病
『備急千金要方』	第二十一巻消渇
『三因極一病証方論』	消渇叙論　三消脉證
『鍼灸資生経』	消渇第三巻
『済生方』	四巻　第二十二消渇論治
『普済方』	百七十六巻消渇門
『丹溪心法附餘』	燥門消渇六十八
『古今醫統大全』	五十二巻消渇門
『鍼灸大成』	消渇第二～八巻
『證治準繩』	難病　消癉第五冊
『類経』	十六巻消癉熱中　六十附消癉治法
『景岳全書譯注』	三消消渇

【結果】

『黄帝内経』以前の成立といわれている、『馬王堆帛書』[4]の五十二病方には消渇の記載はなかった。

『黄帝内経　素問』奇病論篇四十七では「帝曰有病口甘者 病名為何 何以得之 岐伯曰此五気之溢也 何以得之名曰脾癉 此肥美之所発也 此人必数食甘美而多肥也 肥者令人内熱甘者令人中満 故其気上溢転為消渇」と記載され部位は脾で、口内の甘味は、消渇を発症する前の脾癉の症状としてあらわれると記載がある。

『諸病源候論』は隋代、610年に巣元方の著書で消渇諸病の篇に記載がある。病因は『黄帝内経』と、同様の美食過食で誘発され、石薬による燥熱も病因となり、部位は脾、腎で症状は口渇と口内が甘い、そして熱が留まり経絡の流れがなくなり血気が塞がり癰疽が多発すると記載されている。

「由少服五石諸丸散積経年歳石勢結於腎中使人下焦虚熱」

「石勢独盛則腎為之燥故引水而不小便也」

「其病変多発癰疽此坐熱気留於経絡不引血気壅渋故成癰膿」

「有病口甘者名為何 何以得之 此五気之溢也 名日脾癉 夫五味入於口 蔵於胃 脾為之行其精気 溢在脾冷人口甘此肥美之所発 此人必数食甘美而多肥令人内熱甘者令人満 故其気上溢転為消渇」

「其久病変成発癰疽或成水疾」

『備急千金要方』は唐代、652年に孫思邈の著書で第二十一巻消渇の篇に記載がある。「長年の飲酒で消渇とならない者はいない」と一番の原因とし「酒宴がおさまることなく、ついに三焦は猛烈に熱をもたされ五臓は乾燥する」とし、「慎むものに三つ一、飲酒　二、房事　三、塩辛い食べ物や麺類」と記載されている。また「食事は人の倍食べるが気力がつかない。虚熱が原因である」と記載され、症状は多尿、大癰で、「戒めの所以は大癰にある」、「消渇を病む人は必ず癰疽が発生して死ぬ」と記載されている。

「論曰凡積久飲酒未有不成消渇」

「然則大寒凝海而酒不凍明其酒性酷熱物無」

「以加脯炙鹽鹹酒客耽嗜不離」

「其口三之後製不由己飲啖無度咀嚼醬不擇酸鹹積年長夜酣興不解遂使三焦猛熱五臓乾燥」

「木石猶且焦枯在人何能不渇 治之愈否屬在病者 若能如方節慎旬月可瘳 不自愛惜死不旋踵」

「方書醫藥實多有效其如不慎者何其所慎有三 一飲酒二房室三咸食及面」

「能慎此者雖不服藥而自可無他 不知此者縦有金丹亦不可救深思慎之」

「又曰消渇之人愈與未愈常須思慮有大癰何者 消渇之人必於大骨節間發癰疽而卒 所以戒之在大癰也當預備癰藥以防之」

『三因極一病証方論』は金代、1175年に陳言の著書で消渇叙論、三消脉證の篇に記載がある。心火が散漫していくと渇となり、渇病から消渇になり、消渇はすべて精血の消耗、津液の枯渇によりおこると記載がある。部位として消中の脾、消腎の腎は心に属すると記載されています。症状は、口渇、多尿、不眠、痩せが記載されている。

「夫消渇皆由精血走耗津液枯乏引飲既多小便必利寝衰退微肌肉脱剥指脉不榮精髄内竭」

「况心虚煩悶最能發渇風寒厚湿病冷作熱入 于腎經引水自救皆明文也不知其因施錯謬 醫之大患不可不知」

「渇病有三日消渇消中消腎消渇属心 故煩心致心火曼渇而引飲經云脉軟散者當病消渇」

「消中属脾癉熱成」

『済生方』は金代、1253年に嚴用和の著書で四巻、第二十二消渇論治の篇に記載がある。

消渇は、腎において起きるとし、節度の無い飲食、房事、丹石服用で「腎水が枯れ心火が燃え三焦が五臓を乾燥させる。」と述べ、症状は口渇や多尿とし、ここにも「常に防がねばならない患いが癰」とされ、よくよく慎むものとして「一、飲酒　二、房事　三、塩辛い食べ物」とし「これらをよく慎む者は服薬せずに自力で治る。これらをわきまえずに、やりたいようにやるものは高貴な妙薬でも救うことはできない。深く考え慎まなければならない。」としている。

「論曰消渇之疾皆起於腎」

「盛壯之時不自保養快情縦慾飲酒無度喜」

「食脯炙醢醢或服丹石遂使腎水枯竭」

「心火煩熾三焦猛烈五藏乾燥」

「消渇之人癒興未癒常防患癰疾」

「其所慎者三一飲酒二房室三醎食」

「及能慎此者雖不服藥而自可」

「不如此者縦有金丹亦不可救瀉思慎之」

『普済方』は金代、1460年に朱肅の著書で百七十六巻消渇門の篇に記載がある。腎虚あるいは美食で肥ることで起き、腎虚で心火を制御できないと記載されている。部位は、心、脾、腎で症状は、口渇や尿が少ない場合や多尿の場合があり、『備急千金要方』『済生方』と同じ慎むべき戒めを述べている。

「夫三痟者 本起腎虚或食肥美之所發也」

「陰陽阻隔 氣不相榮 故陽阻陰而不降 陰無陽而不昇 上下不交 故成疾矣」

「夫痟者 痟渇痟中痟腎也 此由少年服乳石熱藥」

「躭嗜酒肉 葷辛熱麺炙」

「荒淫色慾 不能將理 致使津液耗竭」

「脾中受熱 水臓乾枯 四體尪羸 精神恍惚」

「吃食多而飲水少 小便赤黄者 痟中也」。

「飲水味甘 隋飲便下 小便而白濁 腰腿痟瘦者 痟腎也」

「斯皆五臓精液枯竭 經脈血澁 榮衛不行 熱氣留滞 遂成斯疾矣」

「渇病有三　曰痟渇痟中痟腎 痟渇屬心 故煩 必致心火散漫 渇而引飲」

「痟腎屬腎 盛壯之時 快情縦慾 年長腎衰 多服丹石之所致 經云腎實則痟 不渇而小便自利名曰痟腎 亦名内痟」

「痟渇以渇而不利 引飲加甚言之 痟中以不渇而利」

「熱氣内痟言之 痟腎以渇而復利 腎燥不能制約言之」

「熱氣上騰 心虚受之 病屬上焦 謂之痟渇」

「熱畜於中 脾虚受之 病屬中焦 謂之痟中 熱伏於下 腎虚受之 病屬下焦 謂之痟腎」

「是腎虚弱心氣渙散所致 故可補心腎 去煩熱 則其疾可愈」

「上實熱而下虚冷 上熱故煩渇多飲 下寒故小便多出」

「本因下部腎水虚 而不能制其上焦心火 故上實熱而下虚冷」

「補養元氣 若下部腎水得實而勝退上焦心火 則自然消渴止。」

「陰實陽虚不能制水 小便利而常多 豈知痟渴小便多者榮養百骸 故腸胃之外 燥熱大甚 雖復多飲于中」

「虚則虚熱 心火屬陽而本熱 虚則爲寒 若腎陰虚則心火陽實」

『丹溪心法附餘』は明代、1481年の程充の著書で燥門消渴六十八の篇に記載がある。

「消渴には肺を養い、火を降ろし血の生産を促すことが主な治療である。」、「上、中、下の三消に分けて治療」し、部位は「上消の者は肺」、「中消は胃」、「下消の者は腎」で原因は皆、熱でなったものであると記載されている。

「消渴養肺降火生血爲主」

「分上中下治　三消皆禁用半夏 血虚亦忌用」

「内傷病退後燥渴不鮮 此有餘熱在肺經。」

「上消者肺也 多飲水而少食 大小便如常」

「中消者胃也 多飲水而小便赤黄」

「下消者腎也 小便濁淋如膏之状 面黒而瘦」

「消渴　消中　消腎　經意皆云熱之所致也」

『古今醫統大全』は明代、1556年の徐春甫の著書で五十二巻消渴門の篇に記載がある。

病因はすべて心火の乗と美食で肥ると記載がある。上焦は肺、中焦は胃、下焦は腎と記載されている。症状は多飲、多尿、多食、小便淋、癰疽、背疽と記載されている。

「消渴有三焦受病之異」

「病機論消渴之疾 三焦受病也 有上消中消腎消」

「上焦受病　多飲水而小食 大便如常或小便清利」

「知其燥在上焦 屬於肺也 又謂之鬲消病也」

「中焦受病　渴而飲食多 小便黄 経曰熱能消穀」

「知其熱在中焦 屬於胃也 又謂之消中」

「下焦受病　初發小便淋下 知膏油之状」

「知其病在下焦 屬於腎也 又名腎消」

「諸経皆燥熱爲渴惟三焦爲甚」

「有因肥甘美食而渴者 有醉飽入房而渴者」

「消渴病總爲心火所乗 肺金太燥」

「水不制火 消中屬脾瘅熱而有三者之異」

「消渴病因膏粱肥之変」

「消渴雖有數者之不同」

「其爲病之肇端 則皆膏粱肥甘之変」

「酒色勞傷之過 皆富貴人病之」

「則治可瘳 若有一毫不謹 總有名醫良劑 必不能有生矣」

「消渴属熱有内外虚實之分 夫消渴本乎熱也 而熱有内外虚實之分 消渴末傳瘡疽中滿論」

「總論所謂 末傳能食者 必發癰疽背瘡」

「有能食者 必傳中滿鼓脹 皆爲不治之證也」

『證治準繩』は明代、1602年の王肯堂の著書で第五冊、難病、消瘅の篇に記載がある。

不適切な飲食が病因であること、あるいは精神の度を過ぎ違えることや、大きな病での陰気の損失が病因であると記載があり、部位は腸胃、腎で、症状は、口渴、多飲、多食、多尿と記載がある。

「消渴者因飲食服餌之失宜腸胃乾涸而氣不得宣平或精神過違其度」

「而耗之或因大病陰氣損」

「而血液衰虚陽慓悍而燥熱鬱甚之所成也」

「呑飲水多而小便多曰消渴若飲食多不甚渴小便數」

「而消瘦者名曰消中若渴而飲水不絶腿消瘦而小便有脂液者」

「名曰腎消一皆以燥熱太」

『類経』は明代、1624年の張景岳の著書で十六巻消瘅熱中、六十附、消瘅治法の篇に記載がある。病因は火の偏盛で、上における神消、下における精消があると記載がある。「消の陰陽」を述べ「乃以歸脾之屬去白木木香　八味之屬　去丹皮澤瀉　一以養陽一以養陰　出入間用至三百餘劑　計人參二十餘斤而後全癒　此非神消於上精消於下之證乎　可見消有陰陽　不得盡稱爲火證　姑紀此一按　以爲治消者之鑒」とし、「すべて火証とすることに疑問」を呈している。部位は心肺腸胃脾肝腎で症状は口渴、多飲、消穀善飢、頻回の尿便と記載がある。

「愚按消瘅消中者 即後世所謂三消證也 凡多飲而渴不止者爲上消消穀善饑者爲中消溲便頻」

「而膏濁不禁者爲不消如氣厥論之云肺消鬲消奇病論之云消渴即上消也」

「脉要精微論云瘅成爲消中 師傳篇云 胃中熱則消穀令人善饑 即中消也」

「邪氣藏府病形篇云 腎脉肝脉微小皆爲消瘅 肝腎在下即下消也」

「雖多飲於中 終不能浸潤於外 榮養百骸 故渴不止而小便多出」

「夫一身之心火 甚於上 爲膈膜之消甚於中爲腸胃之消甚於下 爲膏液之消 甚於外 爲肌肉之消」

「上甚不已 則消及於肺 中甚不已 則消及於脾下甚不已則消及於肝腎 外甚不已 則消及於筋骨 四藏皆消盡 則心始自焚而死矣」

「故素問有消瘅 消中 消渴 風消 膈消 肺消之説 消之證不同歸之火則一也 此三消從火」

「然以予之見 猶有説焉如陰陽別論曰二陽之病發心脾其

傳爲風消 此以陽明爲十二經之海 土衰而木氣乘之故爲肌肉風消也」

「氣厥論曰 心移寒於肺爲肺消 飲一溲二死不治 此言元陽之衰 而金寒水冷 則爲肺腎之消也」

「是皆以陰抑陽 以水制火 必以温劑 散去寒邪 其疾自癒 諸如此者 總皆消渇之類也 夫消者 消耗之請」

「陽勝固能消陰 陰勝獨不能消陽乎 故凡於精神血氣 肌肉筋骨之消無非消也」

「損傷心腎 元陽既虧 則陰邪勝之 故多陰夢 陽衰則氣虚陽不師陰 則水不化氣 故飲水少而溺濁多也」

「陽氣漸回 則陰邪自退 此正内經所謂心移寒於肺 飲一溲二之證耳」

「此非神消於上 精消於下之證乎 可見消有陰陽 不得盡稱爲火證 姑紀此一按 以爲治消者之鑒」

『景岳全書譯注』は明代、1640年の張景岳の著書で三消消渇の篇に記載がある。病因は陰虚によって発症すると記載され、「虚実に分ける」ことを強調している。部位は上焦、中焦、下焦に分かれ、肺と胃と腎であり症状は口渇、多飲、消穀善飢、痩せ、尿淋濁が記載されている。

「三消之病三焦受病也」

「上消者渇證也大渇引飲隋飲隋渇以上焦之津液枯涸」

「古云其病在肺而不知心脾陽明之火皆能熏炙而然故又謂之膈消也」

「中消者中焦病也多食善饑不爲肌肉而日加削痩其病在脾胃又謂之消中也」

「下消者下焦病也小便黄赤爲利淋爲濁」

「如膏如脂面黒耳焦日漸消痩其病在腎故又名腎消也」

「此三消者古人悉認爲火證然有實火者以邪熱有餘也」

「凡治消之法最當先辨虚實」

「但去其火則津液自生而消渇自止」

「若由真水不足則悉屬陰虚無論上中下急宜治腎必使陰氣漸充精血漸復則病必自愈」

「若但知清火則陰無以生而日見消敗益以困矣」

「一三消證古人以上焦屬肺中焦屬胃而多從火治是固然矣」

「然以余論之則三焦之火多有病本於腎而無不由乎命門者」

「夫命門爲水火之腑凡水虧證固能爲消渇」

「而火虧證亦能爲消爲渇者何也蓋水不濟火則火不歸原故有火游於肺而爲上消者」

「有火游於胃而爲中消者有火爍陰精而爲下消者是皆真陰不足水虧於下之消證也」

「又有陽不化氣則水精不怖水不得火則有降無昇所以入膀胱而飲一溲二以致泉源不滋」

「天壌枯涸者是皆真陽不足火虧於下之消證也」

「陰虚之消治宜壯水固有言之者矣」

「陽虚之消謂宜補火則人必不信」

「余因消證多虚難堪剥削若不求其斫喪之因而再伐生氣則消者癒消無從復矣 故再筆於此用以告夫明者」（表３）

表３　古医書に記載される病理

古医書	病因	部位	症状
『黄帝内経　素問』	美食過食で脾瘅、内熱	脾	口内が甘い
『諸病源候論』	美食過食で脾瘅、燥熱	脾、腎	口渇、口内が甘い、癰疽
『備急千金要方』	飲酒、長年の塩味、虚熱	三焦、五臓	多尿、大癰
『三因極一病証方論』	心火による精血の消耗、津液の枯渇	心、脾、腎	口渇、多尿、不眠、痩せ
『済生方』	美食過食、丹石服用で腎水の枯れにて心火	腎、心	口渇、多尿、癰
『普済方』	腎虚、美食、心火	心、脾、腎	口渇、尿少あるいは多尿
『丹溪心法附餘』	熱	肺	多飲、多食
『古今醫統大全』	心火の乗、肥満	肺、胃、腎	多飲、多尿、多食、小便淋
『證治準繩』	不適切な飲酒、精神の度を過ぎる、病による陰気の損失	腸、胃、腎	口渇、多飲、多食、多尿
『類経』	火の偏盛、上の神消と下の精消	心、肺、腸胃、脾、肝、腎	口渇、多食、消穀善飢、頻尿・便
『景岳全書譯注』	陰虚	肺、胃、腎	口渇、多飲、消穀善飢、痩せ、多尿、尿淋濁

また、これら古医書のうち７冊に病因が食事や飲酒によると記載されている。

『黄帝内経　素問』美食過食、『諸病源候論』美食過食、『備急千金要方』酒宴を続けること、『済生方』節度のない飲酒、『普済方』美食で肥る、『古今醫統大全』美食で肥る、『證治準繩』飲食物の不適当と述べられている。（表４）

表４　飲食飲酒が誘因と記載されている古医書

古医書	誘因
『黄帝内経　素問』	美食過食
『諸病源候論』	美食過食
『備急千金要方』	長期の飲酒（酒宴）
『済生方』	節度の無い飲食
『普済方』	美食で肥る
『古今醫統大全』	美食で肥る
『證治準繩』	飲食物の不適当

そして、治療穴は中国古医書の代表的な2書『鍼灸資生経』、『鍼灸大成』を選び治療穴を抽出した。

『鍼灸資生経』は金代、1220年の王執中の著書で消渇第三巻に記載がある。

「商丘主煩中渇千　意舍主消渇身熱面自黄同朋」

「意舍關衝　然谷主消渇嗜飲」

「隠白主飲渇　勞宮主苦渇食不下」

「曲池寒熱渇」

「行間　太衝主乾善渇並千」

「意舍見　腹脹　中膂兪治腎虚消渇汗不出朋作汗出」

「兌端治小便黄舌乾消渇」

「然谷治舌縱煩滿消渇」

「水溝治消渇飲水無度朋　同」

『鍼灸大成』は明代、1601年楊継洲の著書で消渇第二～八巻に記載がある。行間　湧泉。「主消渇之腎渇。」

「陰市　一名陰鼎　膝上三寸　伏兎下陥中　拜而取之　銅人針三分　禁灸」

「主腰脚如冷水　膝寒　痿痺不仁　不屈伸　卒寒疝　力痿少氣」

「小腹痛　脹滿　脚氣　脚以下　伏兎上寒　消渇」

「腎兪　十四椎下兩旁　相去脊各一寸五分　前與臍平　正坐取之」

「銅人針三分　留七呼　灸以年為壮　明堂灸三壮　素問刺中腎六日死　其動為嚏」

「主虚勞羸瘦　耳聾腎虚水臓久冷　心腹填滿　脹急　兩脇滿引小腹急痛」

「脹熱　小便淋　目視　少氣溺血　小便濁　出精夢泄」

「腎中風　踞坐而腰痛　消渇」

「小腸兪　十八椎下兩旁。相去脊各一寸五分　伏而取之　銅人針三分　留六呼　灸三壮」

「主膀胱三焦津液少　大小腸寒熱　小便赤不利　淋歴遺溺　小腹脹滿」

「泄利膿血　五色赤痢　下重腫痛　脚腫　五痔　頭痛　虚之　消渇」

「中膂兪　二十椎下兩旁　相去脊各一寸五分　俠脊伸起肉　伏而取之」

「銅人針三分　留十呼　灸三壮」

「明堂云腰痛俠脊裏痛　上下按之應者　從項至此穴痛　皆宜灸　主腎虚消渇」

「意舍　十一椎下兩旁　相去脊各三寸　正坐取之　銅人針五分　灸五十壮　至百壮」

「明堂灸五十壮　下經灸七壮　素註灸二壮　甲乙灸三壮　針五分」

「主腹滿虚脹　大便滑泄　小便赤黄　背痛　悪風寒　食飲不下　嘔吐消渇」

「然谷　一名龍淵　足内踝前起大骨下陥中　一云内踝前　在下一寸」

「別於足太陰之郄　足少陰腎脉所溜為榮火　銅人灸三壮　針三分　留五呼」

「令人立饑欲食　刺足下布絡中脉血不出為腫」

「主咽内腫　不能内唾　時不能出唾　心恐懼如人将補」

「涎出喘呼少氣　足腑腫不得履地　寒疝　小腹脹上槍胸脇」

「欬唾血　喉痺　淋瀝白濁　痿不能久立　足一寒一熱　舌縱煩滿　消渇」

「陽池　一名別陽　手表腕上陥中　從指本節　直模下至腕中心」

「手少陽三焦脉過為原　三焦虚實皆之」

「素註鍼二分　留六呼　灸三壮　銅人禁灸」

「指微賦云　鍼透抵賦大陵穴　不可破皮　恐傷鍼縛曲　主消渇」

「行間　足大指縫間　動脈應手陥中　足厥陰肝脉所溜為榮火」

「肝實則瀉之　素註鍼三分　銅人灸三壮　鍼六分　留十呼」

「主嘔逆。洞泄。遺溺癃閉。消渇。」

「期門　直乳二肋端 不容旁一寸五分 又曰乳旁一寸半直下又一寸半」

「肝之募 足厥陰太陰陰維之會 銅人針四分 灸五壮」

「主胸中煩熱 賁豚上下 目青而嘔 霍乱 泄利 腹堅硬」

「大喘不得安臥 脇下積氣 傷寒心切痛」

「喜嘔酸 食飲不下 食後吐水 胸脇痛支滿」

「男子婦人 血結胸滿 面赤火燥 口乾消渇」

「承漿　唇稜下陥中 開口取之 大腸脉胃脉督脉任脉之會」

「素註鍼二分 留五呼 灸三壮 銅人灸七壮 止七士壮 過七七停四五日後 灸七七壮」

「明堂三分得氣即瀉 留三呼 徐徐引氣而出」

「日灸七壮 過七七停四五日後 灸七七壮」

「若一向不灸　恐足陽明脉斷　其病不癒　停息復灸　令血脉通宣　其病立癒」

「主偏風半身不遂　口眼喎斜　面腫　消渇」

「水溝一名人中　鼻柱下溝中央。近鼻孔陥中。督脉手足陽明之會」

「素註針三分　留六呼　灸三壮　銅人針四分　留五呼　得氣即瀉」

「灸不及針　日灸三壮　明堂日灸三壮　至二百壮　下經灸五壮」

「主消渇飲水無度」

「兌端　唇上端 銅人針二分 灸三壮 主癲疾吐沫 小便黄舌乾 消渇」

「支正　主七情氣欝 肘臂十指皆攣 及消渇」

「照海　主夜發座 大便閉 消渇」

「太谿　主消渇 房勞不心意婦人水蠱」

「海泉　一穴　在舌下中央脉上是穴 治消渇 用三稜針出血」

「消渇　水溝 承漿 金津 玉液 曲池 勞宮 太沖太衝 商丘 隠白」

「百日以上者 切本可灸」

以上から『鍼灸資生経』と『鍼灸大成』の両方の医書に掲載されているのは「意舎」「太衝」「行間」「隠白」「中膂兪」「然谷」「水溝」「承漿」で、奇経を除くと「意舎」「太衝」「行間」「隠白」「中膂兪」「然谷」である。（図１）

図１『鍼灸資生経』と『鍼灸大成』の医書に掲載されている経穴

【考察】

医書は、最も古いとされる『五十二病方』に消渇の記載はなかった。前漢初期に編まれたとされる『老官山漢墓』に消渇の文字が記載される。最も古く体系だった重要な医書として漢代に成立したとされる『黄帝内経』、隋代の代表的医書『諸病源候論』、唐代の代表的医書『備急千金要方』を使用し、唐代の代表的医書『外台秘要方』の消渇の病理、病因の記載は『諸病源候論』と同様であった。宋代の代表的医書『三因極一病証方論』と『鍼灸資生経』、金代の代表的医書『済生方』、元代の『丹溪心法』を明代にまとめられた『丹溪心法附餘』、明代の『普済方』、『古今醫統大全』、『鍼灸大成』、『證治準繩』、『類経』、『景岳全書譯注』が参照された。その他、消渇の方剤が多数記載されている古医書は別稿とした。

糖尿病は慢性の高血糖を主徴とし、エネルギー代謝、脂質代謝、蛋白代謝が複合的に障害される全身性代謝異常疾患である。典型的な糖尿病症状として、高血糖に伴う浸透圧利尿により口渇・多飲・多尿が生じるほか、尿糖によるエネルギー喪失や蛋白・脂質の異化亢進による体重減少がある。慢性の高血糖は細胞内への糖流入増加をもたらし、ポリオール経路[1]の過剰活性化などの細胞内代謝障害を惹起して最小血管の透過性亢進や閉塞、細胞外基質の増加を招き網膜症、腎症、神経障害の主たる要因となる。代謝障害を生じる経緯は多様であるが日本人の９０％を占めるのは２型糖尿病で、主因はインスリン分泌障害とインスリン作用低下（抵抗性）の相加作用である。過栄養・肥満によってインスリン抵抗性が生じる機序は多様であり、内臓脂肪増加に伴う遊離脂肪酸の門脈内への過剰放出、肝の糖・脂質処理の障害、脂肪細胞のアディポネクチンやレプチンなどアディポサイトカインの分泌異常や、マクロファージなど炎症惹起細胞の浸潤に伴う慢性炎症[18]、血管内皮のインスリン抵抗性による筋でのインスリン作用障害がある。２型糖尿病は遺伝要因が濃厚であり、欧米人やアジア民族の疾患感受性遺伝子の同定が報告されている。米国糖尿病予防プログラムの成績では、糖尿病の強力な遺伝子（TCF2多型）を有しても、生活習慣の適切な是正[19]によって糖尿病リスクを半減しえた[20]。また環境ストレスによる発症要因として膵β細胞死[21]も報告されている。近年、病原体由来ではない炎症として自然炎症についての報告[22-25]があり、糖尿病をはじめ生活習慣病に深く関わっていることを示す文献がみられる。東洋医療における消渇は、古医書において、「心火」、「虚熱」、「燥熱」と、炎症を思わせる病因を指摘している。生体の恒常性

が崩れ、消渇という病態を現すのを陰陽論五行説を用いて示すと図のようになる。（図２）消渇の鍼灸治療における重要穴の穴性[26]と病理[27]を、表に示す。（表５）

図２　消渇治療穴と穴性の五行図

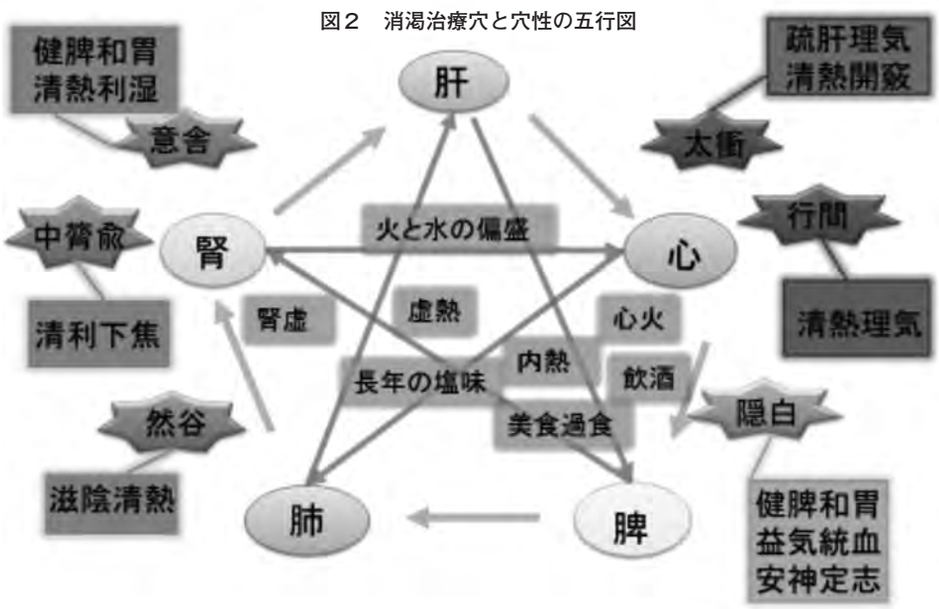


表５　消渇に有効とされる正経六経穴

経穴	経、要穴	穴性	病理
太衝	肝経 原穴 兪土穴	疏肝理気 清熱開竅	肝気鬱滞 心火上炎
行間	肝経 榮火穴	清熱理気	肝火上炎 痰火擾心
隠白	脾経 井木穴	健脾和胃 益気統血 安神定志	肝陽上亢
然谷	腎経 榮火穴	滋陰清熱	陰虚発熱
意舍	膀胱経	健脾和胃 清熱利湿	脾胃不和 湿滞中焦
中膂兪	膀胱経	清利下焦	下焦湿熱 陰虚陽亢

穴性は、1934年羅兆琚が初めて定義した。現在、腧穴の効能、薬能をモデルに表記することに論争があるが、消渇の病理を理解する上で有用と考え引用した[28]。

内因[28]として七情により気が滞る。気が鬱滞し火を形成する。これを病理現象として化火といい、実邪となって経絡に実反応をあらわし、実熱症状をあらわす。また、火は陰液を消耗し、陰液が消耗されると陽気を抑えることができず、虚熱となって陰虚症状があらわれる。不内外因[29]として暴飲暴食や油濃い物、甘い物の過食は脾の働きを阻害し気虚や湿邪という病理現象をあらわす。気の滞りによる熱や陰虚による熱、水穀の滞りによる痰濁による熱で各臓腑の陰陽バランスの失調をきたす。

病因の一つである心火は何らかの精神的なストレスによって起こるものや、過労や睡眠不足などにより発生し、腎の衰え[30]により心火を制御できず、心火が燃え、命門の火を上昇気流のように吸い上げ、ますます腎陰が減少してしまう病証となる。美食過食は陰液を滞ら

せ痰となり湿熱となる。湿熱は脾の運化と受納機能を低下させ、後天の精の供給源である脾からの滋養が減少し津液、血の生成に支障をきたす。酒は古医書に戒める記述が多く、「酷い熱をもっている」と記載され、現代も２０の大規模なコホート研究のメタ解析によって多量の飲酒は糖尿病発症を促進する可能性があると報告されている[31)]。

消渇の治療穴「太衝」は肝気鬱滞、心火上炎の治療穴として鬱滞した肝気の流れを改善し心火の原因を取る清熱開竅の穴性を持っている。「行間」は肝気が火化した肝火上炎や痰と火が心神をかき乱した状態を治療する清熱理気の穴性をもっている。「隠白」は、脾経を補い臓腑関係の胃との健脾和胃をはかり、脾の作用である益気統血を促し、母子関係である心と安神定志を保つことによって相克関係の肝の肝陽上亢を抑制すると考える。火を司る心と水を司る腎は健康時には心腎相交し、互いに生理平衡を保っている。心中の陽は腎陽を温養し、腎中の陰は心陰を滋養し、陰陽水火は動的平衡を保っている。それが、心火によって腎陰が虚損し、心腎不交し陰虚発熱する。「然谷」は、腎経の榮火穴で、熱を清し腎陰を滋養する滋陰清熱の穴性をもっている。「意舎」の意は脾に舎る思慮作用をあらわし、舎は脾気の出入りするところで、脾病を治す穴とされる。不摂生な食事やストレスによる脾胃の失調、甘い物、油ものの食べ過ぎにより脾の運化作用の失調で脾胃不和となり、湿熱が発生し湿滞中焦となる。「意舎」は健脾和胃、清熱利湿の穴性をもっている。「中膂兪」は、腎陰の虚損によって生じた下焦湿熱、陰虚陽亢を下焦である腎の湿熱を清する清利下焦の穴性をもっている。（表５）消渇は「化火」し、陰液が虚損することによって発症している。それには気化の偏盛がまずあり、気化作用の大過であり亢盛である。気化偏盛は陽気に余剰があり相対的に亢盛になったものが「化火」である[32)]。

陽気の転化作用が過剰になると、精血津液の気化過程を加速増強し、火は燃え盛る。同時に、陰分である精血津液を気化作用によって過度に消耗し、陽を抑制することができなくなり、気化作用はさらに亢盛する。はじめは暴飲暴食や精神的ストレスにより経脈の異常として実火実熱としてあらわれるが、気化の亢盛が長引き虚熱症状があらわれる。消渇は虚熱の前段階である実火実熱の病期までに各古医書の戒めである養生を行うことが第1次予防となると思われる。

【結論】

消渇の記載されていた『素問』は、主に陰陽説と五行説を基本理論とし、生理、病理、診断、治療、養生法を論じ、東洋医学の原典とされている。そして現代においても、中医学を学習するための必読書となっている。古医書からの研究は、最新のものに実践的臨床的価値を有する現代西洋医学との学術的な違いがあるが、生活習慣病である糖尿病も、古医書にある消渇も最も重要な治療は食事療法を代表とする生活習慣の変容である。鍼灸治療により陰陽五行のバランスを整えつつ、養生法を教育していくことが増え続ける糖尿病を減少させていけるものと考える。

1）杉本恒明：糖尿病, 内科学 第９版, 1464-1488 , 朝倉書店, 東京, 2007.

2）白川静：字通, 177,795, 平凡社, 東京, 1996.

3）厚生労働省国民健康・栄養調査結果. http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/0000032813.pdf

4）著者不詳：五十二病方,馬王堆漢墓帛書整理小組編,成立年不詳,全頁にわたって参照, 文物出版, 中国, 1979.

5）著者不詳：黄帝内経素問（上）, 成立年不詳,鍼灸医学典籍集成１, 399, オリエント出版,大阪, 1985.

6）巣元方：諸病源候論, 610年成立, 東洋医学善本叢書6, 43-44, 東洋医学研究所, 大阪, 1981.

7）孫思邈：備急千金要方　宋版（下）, 652年成立, 東洋医学善本叢書11, 55-56, オリエント出版, 大阪, 1989.

8）王執中：鍼灸資生経, 1220年成立, 鍼灸医学典籍集成6,198, 鍼灸医学典籍集成１, オリエント出版, 大阪, 1985.

9）陳言：三因極一病証方論, 1175年成立, 北里研究所附属医学研究所, 医史文献研究室編, 136, エンタプライズ社, 東京, 1988.

10）嚴用和：済生方, 1253年成立, 北里研究所附属医学研究所, 医史文献研究室編, 136, エンタプライズ社, 東京, 54-55, 1988.

11）朱肅：普済方, 1460成立, 普済方第四冊, 2185-2190, 人民衛生出版社, 中国, 1982.

12）程充：丹溪心法附餘, 1481成立, 明隆慶六年山東布政使施篤臣刊本, 1469-1473, 新文豊出版公司, 中国, 1982.

13）徐春甫：古今醫統大全, 1565年成立, 古今醫統大全（７）3519-3525、新文豊出版公司,中国, 1978.

14）楊継洲：鍼灸大成,1601年成立, 全頁にわたって参照, 出版社と出版年は不詳.

15）王肯堂：證治準繩,1602年成立, 證治準繩（５）, 351, 上海科学技術出版社, 中国, 1984.

16）張景岳：類経, 1624年成立, 黄帝内経注解叢刊9, 388-389, オリエント出版, 大阪,1993.

17）張景岳：景岳全書譯注, 1640年成立, 中医古籍名著編訳叢書, 721-725, 黒龍江人民出版社,中国, 2008.
18）谷口克,宮坂昌之,子安茂夫：炎症のメカニズム, 標準免疫学,335-347, 医学書院, 東京, 2013.
19）葛谷英嗣,坂根直樹,岡崎研太郎：わが国における2型糖尿病発症予防戦略, 糖尿病学の進歩（第45集）, 2011, 13-17, 診断と治療社, 東京, 2011.
20）森保道：糖尿病の診断基準, 分類, 予防法, 内科113（6）, 1528-1530, 2014.
21）石原寿光：糖尿病における膵β細胞死, 実験医学28（7）, 198-205, 2010.
22）桒原孝也：糖尿病性腎症における自然炎症の意義とその分子機序, 腎・高血圧の最新治療2（3）, 129-135, 2013.
23）齋藤達哉,審良静男：TLRおよびNLRを介した自然免疫応答, 実験医学, 32（17）,（増刊）76-82, 2014.
24）池田賢司,小川佳宏：脂肪組織炎症とメタボリックシンドローム, 医学のあゆみ243（1）, 98-102, 2012.
25）小川佳宏：メタボリックシンドロームと慢性炎症,糖尿病学の進歩（第44集）, 2010, 120-124, 診断と治療社, 東京, 2010.
26）東医針法研究会編：十四経穴性発揮, 東京, 全頁にわたって参照.
27）王財源：わかりやすい臨床中医臓腑学, 第3版, 医歯薬出版,東京, 2013, 全頁にわたって参照.
28）井ノ上匠：第4回日本中医学会学術総会　シンポジウム⑤「穴性問題」シンポジスト,発表原稿,東京,2014.9.
29）高金亮, 劉桂平, 孟静岩：三因,中医基本用語辞典, 237, 東洋学術出版, 千葉県, 2006.
30）社団法人　東洋療法学校協会：東洋医学概論, 44-45, 80-82, 医道の日本社, 神奈川県, 2011.
31）Baliunas DO , Taylor BJ , Irving H et al: Alcohol as a risk factor for type 2 diabetes . Diabates Care, 32:2123-2131, 2009.
32）宋鷺冰,柴崎瑛子訳：中医病因病気学, 85, 人民衛生出版, 中国, 1987.

Report

Syokatsu on Old Medical Book

Yoshiko KUNIMATSU　Shizuo TODA

Graduate School of Health Sciences, Graduate School of Kansai University of Health Sciences

Purpose：In recent years, diabetes mellitus（DM）is referred to as the modern disease, increasing population of DM is great to be caused living lifestyle.Syokatsu in old medical book be described reveal symptom of thirst, polydipsia, sihneki（fluid humor）depleted, these symptom are similar to DM in the modern.That would be greatly helpful to acupuncture-moxibustion therapy for DM to extracted descriptions about syokatsu in old medical book.

Method：Koteidaikei, Shobyogenkoron, Bikyusenkenyoho, Saninkyokuitsubyosyohoron, Shinkyushiseikyo, Saiseiho, Huzaiho, Tankeishinpohuyo, Kokonitotaizen, Shinkyutaisei, Shochijyunki, Ruikei, Keigakuzensyosyakuchu were in referred.

Results：There were shown the old medical books in chronological order, we think that the most important books as described below.

1. Kouteidaikei kibyoronhen is described as “sweet taste in the oral cavity. This is referred to as hitan. It shows a state in which shineki stagnates spleen.This cause is gastronomy overeating, become fever overflow.”
2. Shobyogenkoron is described as “thirst and drink the water”, “ carbuncles multiple”.This cause is same description in Koteidaikei.
3. Bikyusenkinyoho is described as “drinking” is major cause, precept living habit to prevent “drying of five viscera”. It necessity of precept is in order to prevent “big carbuncles.”
4. Saninkyokuitsubyosyohoron is described as “syokatsu is depleted seiketsu and depletion of shineki”
5. In Shinkyushiseikyo, the treatment acupuncture points of syokatsu are 12 points.
6. Saiseiho is described as “cause of syokatsu are all renal” and same commandments with Bikyusenkinyoho.
7. Huzaiho is described as “suffer from sansyo（three disapperance）”, same commandments with Bikyusenkinho and Saiseiho. These causes are xin huo（below the heart）.
8. Tankeishinpohuyo is described as “syokatsu divided into sansyo（three disapperance）, and it cause all heat.
9. Kokonitotaizen is described as “syokatsu is sansyo（triple energizers）”, same commandments with Bikyusenkinho,Saiseiho Huzaiho and Huzaiho. Cause of Shokatsu is multiply of shinka（heart fire）.
10. In Shinkyutaisei treatment acupuncture points of syokatsu are 19 points.
11. Shochijyunki is described as “the cause is food and drink. Alternatively excessive mental.” As the result, congestion of sounetsu（dryness-heat）according to loss of yin ki（yin qi）.
12. Ruikei is described that syokatsu divided into sansyo（three disapperance）.
    And dwell “yinyang of disappearance”, exhibit “it is questionable to be all hi-syo（fire pattern）.”
13. Keigakuzensyoyakuchu is in the same way as Ruikei that described that syokatsu divided into sansyo（three disappearance）. It emphasize “divided into kyojitsu（deficiency and excess）.”

Discussion： The symptom of syokatsu has thirst, polyuria, nephropathy, neuropathy, infection disease of skin soft tissue similar to DM. These symptom are described in each old medical books.The etiology of syokatsu to be kaka（transform into fire）, exhausted inbun（yin portion）because by becoming chronic ki（qi）, ketsu（blood）and shineki（fluid humor）of five viscera were stagnate. It has shown that the most significant for treatment of primary prevention, is the stage of jikkajitsunetsu（excess fire and excess heat）, previous step for yin xu（yin deficiency）.

Conclusion： These results demonstrated that the understanding of the most significant to be transfiguration of lifestyle at the acupuncture-moxibustion therapy by the consideration of syokatsu on old medical book.

Keyword： Shyokatsu, diabetes mellitus, old medical book

平成26年度　関西医療大学大学院　保健医療学研究科　保健医療学専攻修士論文一覧

本年度は関西医療大学大学院・保健医療学研究科・保健医療学専攻の第Ⅲ期修了生５名を送り出すこととなりました。以下に示すように、専攻分野はさまざまですが、各々の大学院生が充実した論文を発表することが出来ました。これらの修士論文は２０１４年度関西医療大学大学院修士論文集として出版され、本学図書館において閲覧可能です。

学位	修了生	修士論文・副題	主査
第18号	生　田　啓　記	太白への鍼刺激が膝関節伸展運動時における大腿四頭筋の筋機能に与える影響　－最大随意等尺性収縮40％強度による検討－	坂　口　俊　二
第19号	池　田　幸　司	座位での側方移動時における座面の圧中心変位と体幹筋および股関節周囲筋の筋活動の検討	深　澤　洋　滋
第20号	畑　島　紀　昭	接骨院の衛生学的問題点その対策	伊　藤　俊　治
第21号	松　井　滉　平	ホールドリラックスを利用したリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　－3秒間収縮と5秒間収縮の比較－	谷　口　　亘
第22号	龍　神　孝　慶	低周波鍼通電療法が筋酸素動態に及ぼす影響 －周波数による検討－	郭　　哲　次

平成26年度　関西医療大学附属保健医療施設の活動状況について

附属保健医療施設の基本理念

私たちの診療所・施術所は、統合理念のもと、

1．心身一如、“こころ”と“からだ”を元気にする全人的な医療
2．「未病」から難病までの治療とケアの探究
3．安心で、安全なチーム医療と地域連携の実現
4．幅広い保健医療の知識を持ち、人にやさしい学生の育成

をめざします。

本学は、昭和60年関西鍼灸短期大学（鍼灸学科）として開学以来、地域に貢献する医療人を育成するために、平成15年４月に関西鍼灸大学（鍼灸学部）、平成19年４月には関西医療大学（保健医療学部）に名称変更に加えに理学療法学科を新に設置、それと同時に大学院/保健医療学研究科 鍼灸学専攻（修士課程）および長寿・健康総合科学研究センターを設置され、翌年の平成20年４月、ヘルスプロモーション学科設置、その翌年平成21年４月には保健看護学部保健看護学科が設置、平成23年4月に大学院 / 保健医療学研究科 鍼灸学専攻を保健医療学専攻（修士課程）に改組され、平成２４年４月に鍼灸学科をはり・灸スポーツトレーナー学科に変更、平成25年４月に保健医療学部臨床検査学科を新に設置いたしてきました。このように本大学は保健医療学部：はり灸・スポーツトレーナー学科、理学療法学科、ヘルスプロモーション整復学科、臨床検査学科の４学科と看護学部：看護学科を合わせて、２学部５学科、そして大学院を含めて、まさにメディカル・プロフェッショナル総合大学としてふさわしく、大幅に改組・改編されました。

このような大学の急速な改革のなかで、本学附属保健医療施設は、地域医療機関として地域住民の健康増進に貢献すること、一方で、大学生、大学院生、卒後研修員などの高度な臨床教育・研究センターとして、また、専門医療従事者や臨床研究者の育成の拠点として発展することが求められています。平成23年４月以降、附属診療所、附属鍼灸治療所および附属接骨院の全施設をまとめて関西医療大学附属保健医療施設として統合され、相互に連携して医療、臨床教育・研修ならびに研究ができるセンターとして、更に充実発展してきました。

今後も、本学の建学の精神「社会に役立つ道に生き抜く奉仕の精神」（本学創始者武田武雄）を忘れることなく、地域の住民の皆様方に安心して利用して頂ける保健医療施設の建設を目指して努力致したいと考えています。

Ⅰ．附属診療所の活動

（1）診療活動の現況

附属診療所（１階）は、一般診療所（内科、神経内科、外科、整形外科、皮膚科、心療内科、精神科、リハビリテーション科、漢方外来、婦人科、禁煙外来）、２階は鍼灸治療所（鍼灸治療科）として、地域医療に貢献してきました。

附属診療所では、西洋医学を中心に、従来から神経難病や慢性期疾患のリハビリテーションや漢方・鍼治療にも重点を置き、アルツハイマー病、パーキンソン病、脳血管障害など老年期慢性神経疾患にも積極的に取り組んでいます。メタポリックシンドロームとしての関連疾患一肥満、睡眠時無呼吸症候群、高血圧症、糖尿病、慢性腎臓病、さらに、関節・運動器疾患やスポーツ障害、それに伴う慢性疼痛など、それぞれの専門医が高度な医学知識をもって、診断．治療ならびにリハビリテーションに取り組み、地域医療への貢献を目指しています。また本年度５月より通所リハビリテーションを開設し、慢性期の介護リハビリテーションにも対応できるようにいたしました。

東洋医学に関しては、総合診療科として漢方外来を設け、漢方エキス剤を中心に治療を行っております。神経内科では、ジストニアに対しては、神経内科医、理学療法士、鍼灸師が連携した鍼治療の臨床研究チームをつくり、全国から来られる患者さんに対応しております。また、神経内科医によりジストニア（眼瞼痙攣、斜頸や脳血管障害など）の後遺症としての四肢痙縮に対するボトックス治療を含め、東西医療の両側面から治療を試みています。その他、企業検診、熊取町と提携した脳ドックなどにも取り組み、また、糖尿病外来、禁煙外来、ものわすれ外来など特殊外来も専門医により行われています。

（2）教育・研修活動

はり灸・スポーツトレーナー学科の４年次の学生は、附属診療所実習Ⅰ，Ⅱにおいて、医師の診療行

為（臨床検査を含む）を見修し、運動器疾患や神経疾患などにみられる慢性癖痛に対する鍼灸治療の適応と禁忌を判断する能力を高め、また、医の倫理についても学ぶことを目的としています。それには、高齢者の背景にある多臓器疾患を見落とさない医学的素養と医療機関と連携し強調できる能力を身に着けられるよう配慮しています。またその際、当日の担当医に指示に従い、白衣、上履きを着用し、清潔な身なりなど患者と接する際の医療従事者としてのマナーや医の倫理についても学べるよう指導しています。患者さんに対する挨拶が適切にできるよう厳しく指導しています。

同様に、理学療法学科や保健看護学科の学生についても、各指導教員のもとで、臨床現場で患者さんと直接接することで、面接技術や医療技術を学習し、意欲的に取り組めるよう臨床実習が組まれています。

臨床研修に関しては、大学院生や研修員としての臨床研究や卒後研修を積極的に推進するため、研究員・研修員制度を運用しています。

（3）診療体制の充実と地域連携

診療所事務室に地域医療連携室を置き、地域医療機関とも連携を深め、地域住民の健康増進に役立つことを願い、本学医療施設の発展に努めています。一方、熊取町には、本学以外に京大原子炉実験所、大阪体育大学ならびに大阪観光大学の四つの大学があり、大学間の連携した取り組みの中で、京大原子炉実験所で開発された癌に対するホウ素中性子補足療法（BNCT）が、極めて選択的に癌細胞のみを破壊する斬新な治療法として注目を集めています。京大をはじめ、文部科学省、大阪府、熊取町など産官学の連携で加速器を設置して、全国に広める計画が進行しており、本学も医療系大学として学生の講義に取り入れ、教員も含め学習に取り組むなど、地域の医療機関としての協力を積極的に進めています。原子炉の職員の見学会や治療実験への診療所医師の見学参加が計画されています。

Ⅱ.附属鍼灸治療所・サテライト和歌山鍼灸治療所

（1）活動の現況

附属鍼灸治療所では、各曜日に担当鍼灸師を配し従来の鍼灸施術を初め、現今の医療機器を用いた新しい施術方法を行い、多様化している症状に対応できる施術を提供しています。また、サテライト鍼灸治療所和歌山におきましては平成27年3月末におきまして閉院いたしました。なお施術を受けられていた患者様に配慮し、ご希望者については当附属鍼灸診療所や近隣の鍼灸院等をご紹介させていただきました。

（2）教育・研修活動

教育活動では、最終学年に至るまでの３年間で培われた、知識・技術の総括として鍼灸臨床の現場を体験させています。施術前に医療面接を実際に行わせることで、コミュニケーションをどのようにすれば、患者様とのラポールが形成できるのかを実地訓練しています。さらに、鍼灸の適応・不適応疾患の判別も研修させ、多様化している症状を東洋医学の見地からどのように理解し、施術に結びつけていくのか等を学べるよう指導しています。そのためには、鍼灸臨床に望まれる教育の効果を向上させる目的で適切な教員配置を行っています。大学院生の臨床実習の場としても、自主性を尊重しつつ、指導教員による適切な指導を、現役学生同様に行っています。

臨床研修においては、本学既卒者や他の大学．養成施設校の既卒者のみならず、さらにJICAを通じてブラジル、アルゼンチン等諸外国からの鍼灸臨床研修生を幅広く受け入れ、担当教員による充実した指導が行われています。

（3）治療体制

日本古来の鍼灸施術方法である『はり」『きゅう』に止まらず、様々な鍼灸仕様の現代的な低周波治療器、低出力レーザー、種々の温熱刺激装置などを配置し、卒業生が就職先の治療院で直ぐに扱えるように指導しています。その際は、最新の機器を用いた施術のオペレーションの治療体制を採用しています。

Ⅲ．接骨院

（1）沿革と活動の現況

附属接骨院は関西医療大学保健医療施設の一つとして平成23年２月に開設され、２年が経過しました。地域住民の健康増進に主眼を置き、通常の接骨院としての業務範囲である外傷の治療だけでなく、その後のフォローや予防ということで運動指導の資格（健康運動指導士・健康運動実践指導者）を

持ったスタッフによる運動指導：「ここから始まるトレーニング習慣」の運動教室、積極的に導入して、トータルに健康増進を図れる施設として活動しております。その努力もあり、大学周辺の地域住民の方々に徐々に本院の活動が認知されてきたと考えています。

開設時から一貫して、できるだけ患者様に「自ら身体を治す」という意識を高めていただくため、マッサージなどの徒手療法や物理療法だけの施術で終わることなく、積極的に運動療法を取り入れ、患者さんが能動的に施術に参加できるスタイルをとっています。

（2）教育・研修活動

附属接骨院ではヘルスプロモーション整復学科４年次に実施きれる臨床実習を受け入れています。カリキュラムでの時間数が少ない（年間45時間）ため、２～３名１グループで実施し、一般の患者さんに対して受付から問診、施術プラン（主に運動療法）の作成など段階を経て指導していきます。特に本学科では健康運動実践指導者やスポーツプログラマーなどの資格も取得できることより、附属接骨院での施術スタイルは将来的にそれを活かせるようなものを提示しています

また、大学院生の実習の受け入れや次年度からは卒後臨床研修施設の認可を受け、研修生の受け入れも可能となり、よりニーズにあった教育・研修施設にすることを心がけています。

（3）診療体制

本学の実習施設としての役割と、地域に密着した接骨院であるために、施術治療および運動療法などの取り組みを行いました。施術時間の見直しを図り、意識改革を図るとともに積極的に自費施術も取り入れ、増患対策に取り組みました。また運動（エクササイズ）指導を本格導入し、運動指導の資格保持者を中心に通常の施術とは別（保険適応外、実費、予約制）に、健康運動教室を開催し地域の健康増進にも寄与しています。

平成26年度　人文・自然科学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

中村　正信、亀　　節子、吉田　仁志、王　　財源、中吉　隆之

B. 研究活動の概要

前年度において本ユニットの共同研究が終了し，当年度は新たな共同研究の立案・検討・実施等は行われなかった。本ユニットの構成メンバーの専門分野は互いに大いに異なるので，全員が分担執筆できる共同研究のテーマ設定が今後とも大きな課題である。よって当年度は，各メンバー個人の研究活動が中心となった。

C. 研究業績

１．著書・原著

王　財源：『特殊鍼灸テキスト』「八卦頭鍼法」20-27頁を分担執筆，医歯薬出版，東京，2014.

王　財源：中国伝統医学における皮膚美容の文献的検討―『黄帝内経』にみえる鍼灸美容―，日本東洋医学会雑誌，65（2）, 124-137, 2014.

王　財源：中国古代「美」意識にみえる鍼灸美容の検討，関西医療大学紀要，8, 1-10, 2014.

王　財源：「気」の養生思想の研究―鍼灸美容における身体美の原点―，大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程・人間科学分野，博士論文，2014.

王　財源：いろいろセルフケア・集毛鍼，医道の日本，73（11）, 28, 2014.

王　財源：国家試験問題から学ぶ臨床の要点，東洋医学臨床論第26回，医道の日本，74（2）, 182-183, 2015.

中吉隆之：国家試験問題から学ぶ臨床の要点，東洋医学臨床論第18回，医道の日本，73（6）, 162-163, 2014.

中吉隆之：国家試験問題から学ぶ臨床の要点，東洋医学臨床論第23回，医道の日本，73（11）, 144-145, 2014.

中吉隆之：古代における馬医鍼灸の文献的研究，大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士前期課程・人間科学分野，修士論文，2015.

２．総説

特になし。

３．学術講演・学会発表

中村正信　他：細胞照射用重イオンマイクロビーム生成におけるバックグラウンド，第27回タンデム加速器及びその周辺技術の研究会，京都，2014.7

亀　節子：現代における伝統医学と代替医療，第29回日本医学会総会・医学史展医学史サロン，京都，2015.3

王　財源：中国伝統医療文化における鍼灸と美容の共生，東アジア伝統医療文化多角的研究班発表会，京都，2014.5

王　財源：中国伝統医学の理論法則と実践―臨床現場における鍼灸学の運用―，倉敷芸術科学大学，岡山，2014.12

王　財源：蔵象学理論と配穴法，愛媛中医学研究会・特別講座，愛媛，2015.3

王　財源：老官山遺跡について，愛媛中医学研究会・特別講座，愛媛，2015.3

王　財源：痔に対する伝統医学的な考察と鍼灸は配穴，愛媛中医学研究会・特別講座，愛媛，2015.3

王　財源：薬膳レシピと誰にでもできる中国茶道，熊取町教育委員会，大阪，2015.3

中吉隆之：七星論入門，大阪府鍼灸マッサージ師会・平成26年度府民公開講座生涯研修会，大阪，2014.8

平成26年度　基礎医学ユニット研究活動状況

A. 構成メンバー

大島　　稔、大西　基代、樫葉　　均、東家　一雄、戸田　静男、深澤　洋滋（五十音順）

B. 研究活動の概要

基礎医学ユニットは、もともと解剖学、生理学、東洋医学基礎をそれぞれ専門とする領域で活動していたメンバーにより構成されている。それ故、個々のメンバーは独立した研究テーマを有しており、ユニット全体としての研究テーマを持っていない。よって、以下に各教員の「研究テーマ」を記しておく。

大島　稔：視床 - 皮質投射系の研究
大西基代：高速液体クロマトグラフィーを用いた生理活性物質の分析
樫葉　均：脊髄後角における局所神経回路の形態学的および電気生理学的解析
東家一雄：リンパ系組織を対象とする機能形態学的研究
戸田静男：(1) 活性酸素障害および抗酸化作用物質の研究
(2) 東洋医学について古医書からの研究
(3) 生薬成分の研究
深澤洋滋：慢性炎症の中でも神経因性疼痛に焦点当て、実験動物モデルを用いてその発症機序の解析を行っている。マウスの坐骨神経結紮モデルにおいて、結紮部位での血管内皮増殖因子の増加が確認されたことから、神経因性疼痛の発現機序に血管内皮増殖因子がどのような関わりを有するかについて詳細な検討を進めている。

C. 研究業績

1. 著書、総説

松原勝美、和泉克典、大島　稔、澤田　規（編者）：柔道整復師国家試験　過去問題＋要点テキスト（1-497頁）、2015年度版　久美出版　2014年

松原勝美、松熊秀明、上藤美和、川畑浩久、松下美穂（編者）、大島　稔ら（執筆）：はり師きゅう師国家試験　過去問題＋要点テキスト（1-371頁）、2015年度版　久美出版　2014年

2. 原著

Rantakari P, Auvinen K, Jäppinen N, Kapraali M, Valtonen J, Karikoski M, Gerke H, Iftakhar-E-Khuda I, Keuschnigg J, Umemoto E, Tohya K, Miyasaka M, Elima K, Jalkanen S, Salmi M：The endothelial protein PLVAP in lymphatics controls the entry of lymphocytes and antigens into lymph nodes. Nature Immunolgy. 2015 Feb 9. doi: 10.1038/ni.3101.

Kiguchi N, Kobayashi Y, Kadowaki Y, Fukazawa Y, Saika F, Kishioka S. : Vascular endothelial growth factor signaling in injured nerves underlies peripheral sensitization in neuropathic pain. J Neurochem. 2014 Apr; 129（1）: 169-78. doi: 10.1111/jnc 12614. Epub 2013 Dec 4.

3. 学会発表

國松佳子、戸田静男：消渇について　古医書からの一考察．平成26年度全日本鍼灸学会第34回近畿支部学術集会、2014, 11, 大阪.

樫葉　均、清行康邦：下行性疼痛抑制系ニューロンの脊髄後角深層への興奮性入力－パッチクランプ法による解析－、第63回全日本鍼灸学会、2014.5. 松山

4. 報告、その他

若山育郎、石崎直人、斉藤宗則、鶴　浩幸、深澤洋滋：2016 WFAS国際シンポジウムの東京招致が決定、全日本鍼灸学会誌、2014, 64（1）: 65-75

深澤洋滋：2014年度WFAS学術大会開催（アメリカ・ヒューストン）、医道の日本、2015, 74（1）: 167

若山育郎、石崎直人、斉藤宗則、鶴　浩幸、深澤洋滋、増山祥子、山田昌紀、西村理恵：2014WFAS鍼灸国際シンポジウム（米国・ヒューストン）参加報告、全日本鍼灸学会誌、2015, 65（1）: 36-46

5. 科研費

樫葉　均（研究代表者）：脳幹からの下行性抑制ニューロンは脊髄後角の深層ニューロンを興奮させる　文科省科学研究費補助金（基盤研究C、平成26年～28年度、課題番号26462386）

平成26年度　臨床医学ユニット研究活動状況

A. 構成メンバー

吉田　宗平、横田　栄夫、郭　　哲次、近藤　哲哉、
紀平　為子、黒岩　共一、山本　博司、谷口　　亘、
池藤　仁美、鍋田　理恵、百合　邦子

B. ユニットの研究活動について

Ⅰ. 脊髄後角におけるTRPA1の活性化による痛覚伝達抑制作用（谷口）

温度感受性イオンチャネルであるTRPチャネルは近年，新たな鎮痛薬のターゲットとして注目されている。しかし、脊髄後角においてどのような中枢性の役割を果たしているのかは依然として不明である。今回、TRPチャネルの中でも冷刺激に反応するとされているTRPA1に注目し、脊髄後角レベルにおける生理的作用についてin vivo パッチクランプ法を用いて電気生理学的に解析した。膜電位は-70mVに電位固定して興奮性シナプス後電流（excitatory postsynaptic current：EPSC)、0mVに電位固定して抑制性シナプス後電流（inhibitory postsynaptic current：IPSC）を観察した。TRPA1選択的作動薬であるAllylisothiacyanete（AITC）を灌流投与するとEPSC・IPSCともに有意な増強を認めた。しかし、IPSCはAITCによってほとんどの細胞で増強したが、EPSCについては50%程度であった。またAITCに反応して増強していた時間もIPSCの方がEPSCより有意に長いことが判明した。また、AITC灌流時の静止膜はより過分極になることが判明した。さらに記録細胞の受容野の皮膚に触刺激や疼痛刺激を行うと激しくEPSCがみられたが、この刺激時の反応はAITCの存在下と非存在下で比較した場合、存在下の方が有意に弱かった。同様なことが電流固定時の活動電位の大きさにおいても観察された。以上のことから、脊髄後角レベルにおけるTRPA1の活性化は正常時には痛覚情報を増強させるよりも抑制させる作用が強い可能性が示唆された。

Ⅱ. キノホルムによる脊髄前角の興奮性シナプス伝達増強作用（谷口）

亜急性脊髄視神経症（Subacute-Myelo-Optico-Neuropathy：SMON）について、原因物質の整腸剤キノホルム（Clioquinol）が脊髄ニューロンのシナプス伝達についてどのような影響を与えるか、ラット脊髄スライスにwhole-cell patch-clamp法を用いて解析を行なった。当初、SMONの難治性疼痛に関して解析を行うため、脊髄後角細胞で実験を行ったがキノホルムに対する応答にばらつきがあることから、痙性麻痺や脱力に注目して脊髄前角細胞における作用を解析した。膜電位は-70mVに電位固定してEPSCを観察した。キノホルム100μMの灌流投与を行うと、EPSCの振幅の増強は認めなかったが、頻度の有意な増強を認めた。この効果は10 μMよりも強く、亜鉛添加でキレート化することでキノホルム単独時より増強した。次にキノホルムのシナプス前作用を解析するためにNa+チャネル拮抗薬であるテトロドトキシン存在下でキノホルムを投与したところ、微小興奮性シナプス後電流の頻度の有意な増幅が観察された。さらにグルタミン酸受容体拮抗薬のCNQX存在下ではEPSCは完全にブロックされ、キノホルムを投与しても変化はみられなかった。 次にキノホルム因性の酸化ストレスの関与を調べるため、活性酸素種（reactive oxygen species ： ROS）の非選択的消去剤であるPBNによるキノホルムのEPSC増強作用が抑制できるか検討した。また、ROSのシグナル伝達に関与するTRPA1受容体の選択的拮抗薬であるA-967079存在下においても投与実験を行った。PBNあるいはA-967079存在下ではキノホルム単独投与時群の頻度の増加率に対して有意差は認めず、これらでは抑制効果は認めなかった。以上の結果から、キノホルムは脊髄前角細胞に入力する神経線維終末部に作用し、興奮性神経伝達物質グルタミン酸の放出を増強した。その作用は濃度依存性でキレート化により増強した。この作用機序はROSやTRPA1受容体とは関連しない機序である可能性が示唆された。キノホルムによる脊髄前角細胞の興奮増強作用はSMONの痙性麻痺や脱力の症状との関連する可能性があると考えられる。

III. 平成26年度大島等の地域健診―住民毛髪中の有害金属蓄積について（紀平）

1911年、三浦謹之助の報告以来、紀伊半島南部で筋萎縮性側索硬化症（ALS）の多発が知られ、紀伊半島古座川地区、穂原地区、Guam島南部、西ニューギニアにおいてALSの集積発症が確認された。これら多発地の環境調査では、Guam島と紀伊半島古座川地区に共通して土壌、河川、飲用水中にCa含量が著しく低値であることが示された。また、我々は古座川地域のALS患者と住民において血清中Ca低値を認め、慢性的Ca欠乏による有害金属の体内蓄積とmetal-induced oxidative

stress増大が当地域でのALS多発に関連する一つの要因ではないかと推察した。本研究では、昨年に引き続き多発地住民と対照地区住民に健診と生活・食習慣の変化に関する自記式アンケートを実施した。健診では、身体測定、神経学的診察、認知症検査（HDS-R、MMSE、FAB)、においの検査（カード型嗅覚同定検査)、血清元素測定、尿検査を実施した。また以前に同地域の健診で採取した毛髪の金属元素分析の測定データを集計し検討した。

頭髪中の元素分析では、多発地ALSで頭髪中Mn, V含量が高値、Sが低値を認め、多発地住民では対照に比し毛髪中Al含量が高値、CuとSが低値を認めた．過剰なMnやV, Alは中枢神経細胞、特に黒質線条体神経細胞にtoxicに作用すると報告されている．多発地ALS患者と多発地住民においてMnやV, Alなど金属元素の過剰な体内蓄積あるいは体内分布の変化が示唆され、これらが酸化的ストレス増大を惹起している可能性が考えられた。有害金属元素など生活・食習慣や環境中のCa低値と酸化的ストレスとの関連を今後も本ユニットの研究活動としてさらに検討していきたいと考えている。

＜＜平成26年度国際共同研究＞＞

パーキンソン病など神経変性疾患の運動障害を加速度計（actigraphy）を用いて定量的に評価する方法を確立した上海中医薬大学付属曙光病院神経内科潘東衛中医師が、KargerにてOpen access articleの“Integrative Medicine International”をeditor in chiefとして立ちあげ、本ユニットから吉田と近藤が編集委員として参画し、すでに我々も本報告書の業績に記載したように、研究論文を投稿し受理されている。

Ⅲ. 構成メンバーの業績

1. 著書・原著等

T. Suzuki, Y. Bunno, C. Onigata, M. Tani, S. Uragami and S. Yoshida: Excitability of spinal neural function during motor imaginary in Parkinson’s disease. Functional neurology 29（4）:1-5, 2014.

W. Pan, Y. Song, S. Kwak, S. Yoshida and Y. Yamamoto: Quantitative evaluation of the use of actinography for neurological and psychiatric disorders. Behav Neurol. 2014;2014:897282..

Y. Kitagawa, K. Kimura and S. Yoshida: Spectral analysis of heart rate variability during trigger point acupuncture. Acupunct Med. 2014 Jun; 32（3）:273-8.

S. Yoshida, T. Ueda, Y. Uebayashi, T. Kihira, Y. Yase, K-M. Chen and R.M. Garruto: Reappraisal of the nosological significance of ALS-PDC mixed cases on Guam. International Symposium on Amyotrophic Lateral Sclerosis and Motor Neurone Disease 2013; 01/2914（Conference paper）.

郭　哲次：臨床検査14.脳波，POCKET精神科.武田雅俊，鹿島晴雄編集，改訂２版，89-96，金芳堂，2014

近藤哲哉: 英文誌から―ストレス性疾患に対する鍼灸.心身医学 55（1）: 84, 2015

Kondo T, Tokunaga S, Sugahara H et al: Identification of Visceral Patterns in Patients with Stress-Related Disorders. Integrative Medicine International 1（2）: 65-126, 2015

Kondo T, Yoshimasu K, Tokunaga S et al: Age-Related Changes in Visceral Patterns Associated with Anxiety Disorders or Depression according to Traditional Chinese Medicine. Integrative Medicine International 1: 80-92, 2014

川島基子, 吉野　孝, 紀平為子, 伊井みず穂, 岡本和士, 江上いすず, 藤原奈佳子, 石川豊美, 入江真行：新規料理登録機能を持つ高齢者を対象にした栄養管理システムの開発と評価. 情報処理学会論文誌 2015, 56, 1-12

Tameko Kihira, Iori Sakurai, Sohei Yoshida, Ikuro Wakayama, Koichi Takamiya, Ryo Okumura, Yuhto Iinuma, Keiko Iwai, Yoshinori Kajimoto, Yasuhiro Hiwatani, Junko Kohmoto, Kazushi Okamoto, Yasumasa Kokubo, Shigeki Kuzuhara : Neutron activation analysis of scalp hair from ALS patients and residents in the Kii Peninsula, Japan. 2014, Biological Trace Element Research 2015 164: 36-42.

Taniguchi W, Nakatsuka T : Chaptor31. Spinal synaptic plasticity in chronic pain. In : Neuroprotection and Regeneration of the Spinal

Cord, edited by Uchida K, Nakamura M, Ozawa H, Katoh S, Toyama Y, Springer Japan, Tokyo, pp387-398,2014

谷口　亘, 中塚映政：基礎編A.基礎知識12.痛みの研究手法－パッチクランプ法　痛みのScience & Practice シリーズ６「痛み診療キーポイント」文光堂, 東京, PP.14, 2014

谷口　亘, 中塚映政：基礎編C.脊髄 1.脊髄後角　痛みのScience & Practice シリーズ６「痛み診療キーポイント」文光堂, 東京, PP.41, 2014

谷口　亘, 中塚映政：基礎編D.脳 2.神経可塑性　痛みのScience & Practice シリーズ６「痛み診療キーポイント」文光堂, 東京, PP.60, 2014

谷口　亘, 中塚映政：基礎編D.脳 3.中枢性感作　痛みのScience & Practice シリーズ６「痛み診療キーポイント」文光堂, 東京, PP.61, 2014

Nishida K, Matsumura S, Taniguchi W, Uta D, Furue H, Ito S : Three-dimensional distribution of sensory stimulation-evoked neuronal activity of spinal dorsal horn neurons analyzed by in vivo calcium imaging. PLoS One 9:e103321, 2014

Taniguchi W, Nishio N, Yamanaka M, Kiyoyuki Y, Sonekatsu M, Yoshida M, Nakatsuka T : TRPV1 channels induce Knee osteoarthritis pain -in vivo patch-clamp analysis-. Pain Res 29: 171-179, 2014

Nishio N, Taniguchi W, Miyake Y, Kiyoyuki Y, Yamanaka M, Sonekatsu M, Abe T, Takiguchi N, Yoshida M, Nakatsuka T : A role of CGRP on excitatory synaptic transmission in spinal substantia gelatinosa neurons. The Journal of Functional Diagnosis of the Spinal Cord 35: 10-15, 2014

Matsumura S, Taniguchi W, Nishida K, Nakatsuka T, Ito S : In vivo two-photon imaging of structural dynamics in the spinal dorsal horn in an inflammatory pain model. Eur J Neurosci. 2015. Jan 29. doi: 10.1111/ejn.12837. [Epub ahead of print]

Mine N, Taniguchi W, Nishio N, Izumi N, Miyazaki N, Yamada H, Nakatsuka T, Yoshida M : Synaptic modulation of excitatory synaptic transmission by nicotinic acetylcholine receptors in spinal ventral horn neurons. Neuroscience. 2015 Jan 19;290C:18-30

百合邦子, 坂口俊二, 鍋田理恵, 久下浩史, 若山育郎：若年女性の冷え症に対する温筒灸治療部位の検討　膝陽関（GB33）と三陰交（SP6）との比較試験, 日本温泉気候物理医学会雑誌77巻3号237-249（2014.05）

百合邦子：国家試験問題から学ぶ臨床の要点（22）. 医道の日本.73（10）:154-155.2014

2. 研究班報告書等

小西哲郎、廣　伸之、上野　聡、楠　進、藤村晴俊、中野　智、撫井賀代、狭間敬憲、松永秀典、吉田宗手、舟川　格:平成25年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究班、総括・分担研究報告書、研究報告書（研究代表者 小長谷正明）、平成26（2014）年3月、pp60-63.

吉田宗平、紀平為子、森岡聖次、小西哲郎、小長谷正明、橋本修二:全国スモン患者におけるパーキンソン病発症頻度の前向き研究について-和歌山県における自験例の意義と全国集計の状況― 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究、平成23~25年度総合研究報告書（研究代表者 小長谷正明）、平成26（2014）年3月、pp125-127.

吉田宗平、紀平為子、鈴木俊明、中吉隆之：和歌山県スモン患者における日常生活動作（Barthel index）の長期推移とその背景要因について（第2報）、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究 平成25年度総括・分担研究報告書（研究代表者 小長谷正明）、平成26（2014）年3月、pp145-148.

吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之：スン患者の運動機能の経年変化―2症例での比較―、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究 平成25年度総括・

分担研究報告書（研究代表者 小長谷正明）、平成26（2014）年3月、pp179-181.

3. 学術講演・学会発表

田中健一、谷万喜子、酒井英謙、高木綾一、吉田宗平、鈴木俊明：ハンガー反射を応用した頭部への円皮鍼・銀粒刺激の検討－健常者の頸部姿勢に与える影響－
第63回（公社）全日本鍼灸学会学術大会. 愛媛. 2014.5.18

牧野一永、田中健一、生田啓記、谷　万喜子、鈴木俊明、吉田宗平：頸部後屈を呈する頸部ジストニア患者に対する鍼治療－運動ニューロパチーを合併した一症例－
第63回（公社）全日本鍼灸学会学術大会. 愛媛. 2014.5.18

鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子、谷　万喜子、浦上さゆり、吉田宗平：脳血管障害片麻痺患者への1分間のリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　―廃用手における検討―第54回近畿理学療法学術大会. 大阪. 2014.11.3

鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子、谷万喜子、浦上さゆり、谷埜予士次、吉田宗平
：脳血管障害片麻痺患者の麻痺側上肢F波はH波である可能性がある
第44回日本臨床神経生理学会学術大会. 福岡. 2014.11.20

吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之：両側中殿筋の筋緊張低下を認めたスモン患者1症例
―片脚立位動作と歩行様式の関連性―
平成26年度厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）「スモンに関する調査研究班」研究報告会. 東京. 2015.1.30

小西哲郎、廣　伸之、上野　聡、楠　進、藤村晴俊、中野　智、撫井賀代、狭間敬憲、松永秀典、吉田宗手、舟川　格:平成25年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究班（研究代表者小長谷正明）、研究報告会プログラム・抄録集平成26（2014）年1月、pp7.

吉田宗平、紀平為子、鈴木俊明、中吉隆之:和歌山県スモン患者における日常生活動作（Barthel index）の長期推移とその背景要因について（第2報）、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究班（研究代表者小長谷正明）、研究報告会プログラム・抄録集平成26（2014）年1月、pp43.

吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之:スモン患者の運動機能の経年変化―2症例での比較―、厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服事業））スモンに関する調査研究班（研究代表者小長谷正明）、研究報告会プログラム・抄録集平成26（2014）年1月、pp25.

Suzuki T, Bunnno Y, Tani M, Onigata C, Yoneda H, Todo M, Uragami S, Wakayama I, Yoshida S: F-wave waveform values increased following improved voluntary movements in a patient with cerebrovascular disease. The 4th Japan-Korea NeuroRehabilitation Conference. Akita. 2015.2.22

近藤哲哉: ストレス性疾患に対する東洋医学. 第84回日本衛生学会学術総会. 2014. 5. 岡山

近藤哲哉: 心療内科領域の漢方. 第6回泉北漢方懇話会. 2014. 5. 堺

近藤哲哉: 心身医学における東洋医学. 南大阪心療内科カンファレンス. 2015. 1. 大阪

近藤哲哉: 漢方が効果的だった数例. 日本東洋医学学会専門医制度委員会和歌山地区教育講演会. 2013. 12. 和歌山

近藤哲哉, 柳田まどか, 亀　節子: 自殺に注意すべき身体症状. 第53回日本心身医学会近畿地方会. 2013. 8. 和歌山

近藤哲哉: 音楽性幻聴の一症例. 日本東洋医学会関西支部例会. 2013. 10. 京都

伊井みず穂, 紀平為子, 川島基子, 吉野　孝, 岡本和士, 江上いすず, 藤原奈佳子, 石川豊美, 入江真行：スレー

ト型PC（iPad）を用いた栄養管理システムの精度及び妥当性の検討．第73回日本公衆衛生学会，2014. 11. 栃木県宇都宮市

山本博司：第63回全日本鍼灸学会学術大会　愛媛県（松山）ひめぎんホール
サテライトステップアップセミナー「膝痛」 平成26年5月18日

山本博司：日本東洋医学会奈良県部会
日時　2014年4月6日　日曜日
場所　奈良県立医科大学　第一臨床講義室
鍼灸実技　東洋医学における治療とコミュニケーション－治療の真髄―

Yamanaka M, Taniguchi W, Sonekatsu M, Nishio N, Abe T, Mine N, Miyazaki N, Nakatsuka T, Yoshida M: In vivo patch-clamp analysis of the pain mechanism by TRPA1 and TRPM8 activation on substantia gelatinosa neurons in the spinal cord. 44th Annual Meeting of Society for Neuroscience, 2014.11.15-19, Washington, D.C.

谷口　亘，西尾尚子，山中　学，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：ドパミン視床下部脊髄路は第３の下行性疼痛抑制系の作用を形成する．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

谷口　亘，山中　学，西尾尚子，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏　中塚映政，吉田宗人：情動中枢前帯状皮質の活性化は脊髄後角で直接痛みを増強する．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

谷口　亘，山中　学，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政,吉田宗人：前帯状皮質から脊髄後角に至る経路は下行性疼痛賦活系を形成する．第29回日本整形外科学会基礎学術集会，2014. 10. 鹿児島

西尾尚子，谷口　亘，山中　学，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：活性酸素種による脊髄後角TRPA1, TRPV1を介した興奮性シナプス伝達増強の作用機序．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

峰　巨，谷口　亘，阿部唯一，山中　学，曽根勝真弓，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：ニコチン性アセチルコリン受容体の脊髄運動前角細胞におけるシナプス制御機構の解析．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

阿部唯一，谷口　亘，峰　巨，山中　学，曽根勝真弓，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：バクロフェンの脊髄運動ニューロンに対する興奮抑制メカニズム．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

曽根勝真弓，谷口　亘，筒井俊二，山中　学，西尾尚子，阿部唯一，峰　巨，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：アストロサイト由来伝達物質Ｄ－セリンは脊髄後角における痛覚情報を増強する．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

山中　学，谷口　亘，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏，中塚映政，吉田宗人：脊髄後角のTRPA1/TRPM8の活性化による痛覚伝達の変調-in vivoパッチクランプ法による解析-．第43回日本脊椎脊髄病学会学術集会，2014. 4. 京都

山中　学，谷口　亘，曽根勝真弓，西尾尚子，清行康邦，中塚映政，吉田宗人：In　vivo patch-clamp法を用いたTRPA1/TRPM8の脊髄後角での疼痛メカニズム．第36回日本疼痛学会，2014. 6. 大阪

曽根勝真弓，谷口　亘，西尾尚子，山中　学，阿部唯一，峰　巨，宮崎展行，筒井俊二，橋爪　洋,山田　宏，中塚映政，吉田宗人：TRPチャネルを介した活性酸素種による脊髄後角における中枢性感作発症機序．第29回日本整形外科学会基礎学術集会，2014. 10. 鹿児島

山中　学，谷口　亘，曽根勝真弓，阿部唯一，峰　巨，宮崎展行，筒井俊二，橋爪　洋，山田　宏,吉田宗人，中塚映政：脊髄後角におけるTRPA1/M8の活性化がもたらす痛覚修飾　-in vivo patch-clamp法による解析-．第29回日本整形外科学会基礎学術集会，2014. 10. 鹿児島

山中　学，谷口　亘，曽根勝真弓，西尾尚子，清行康邦，

中塚映政, 吉田宗人: 脊髄後角TRPA1/TRPM8の活性化による疼痛メカニズムーIn vivo patch-clamp法による解析―. 第7回日本運動器疼痛学会, 2014. 10. 宇部

池藤仁美, 坂口俊二, 鍋田理恵：関西医療大学における学習管理システムの構築と運用　国家試験対策を例として，第63回全日本鍼灸学会学術大会，2014. 5. 愛媛

鍋田智之, 小島賢久, 江川雅人, 福田晋平, 野口栄太郎, 笹岡知子, 鍋田理恵：実技試験における教員評価の差に関する検討，第63回全日本鍼灸学会学術大会，2014. 5. 愛媛

4. その他＜社会活動など＞

郭　哲次：投稿原稿査読

日本未病システム学会雑誌 投稿原稿（2014年）．2編（2回）

近藤哲哉：

World Scientific Journal 投稿原稿査読　2編（2014年7月、8月）

Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine（eCAM）投稿原稿査読　1編（2014年12月）

日本東洋医学会和歌山県部会事務局長

平成26年度日本東洋医学会関西支部例会準備委員長（2014年10月. 泉佐野.）

Integrative Medicine International Associate Editor

Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine（eCAM）Guest Editor

ハートフル漢方研究会世話人

和歌山産業保健推進連絡事務所特別相談員

第10期あん摩マッサージ指圧師、はり師及びきゅう師国家試験委員

近藤哲哉: 新型うつ病の理解と職場の対応. 和歌山産業保健推進連絡事務所平成25年度第6回産業医等研修会, 2015. 1. 和歌山

近藤哲哉: 精神疾患事例における産業医の役割. 和歌山産業保健推進連絡事務所平成25年度第6回産業医等研修会, 2014. 8. 和歌山

紀平為子：最近のパーキンソン病治療薬．パーキンソン病友の会「泉友会」講演会、煉瓦館、平成26年8月21日

紀平為子：「骨をつよくし、健康にくらしましょう」. 古座地区サロン講話．H26年3月20日

山中　学, 谷口　亘, 曽根勝真弓, 西尾尚子, 吉田宗人, 中塚映政: 脊髄後角におけるTRPA1/TRPM8活性化は痛覚情報を修飾する. 第12回整形外科痛みを語る会, 2014. 6. 久留米

泉　尚史, 谷口　亘, 山中　学, 曽根勝真弓, 西尾尚子, 中塚映政, 吉田宗平, 吉田宗人: Clioquinolによる脊髄前角細胞の興奮性シナプス伝達増強. 第3回ニューロカンファレンス和歌山, 2015. 1. 和歌山

阿部唯一, 谷口　亘, 山中　学, 曽根勝真弓, 西尾尚子, 中塚映政, 吉田宗人：脊髄前角細胞におけるGABAB受容体作動薬バクロフェンの作用機序. 第3回ニューロカンファレンス和歌山, 2015. 1. 和歌山

山中　学, 谷口　亘, 曽根勝真弓, 岩橋弘樹, 筒井俊二, 中塚映政, 吉田宗人: 脊髄膠様質におけるTRPA1の抗侵害性作用ーin vivo patch-clamp法を用いた解析―. 第36回脊髄機能診断研究会, 2015. 2. 東京

泉　尚史, 谷口　亘, 西尾尚子, 清行康邦, 林　正貴, 中塚映政, 吉田宗平, 吉田宗人: 脊髄前角細胞におけるキノホルムの興奮性シナプス伝達増強作用. 第36回脊髄機能診断研究会, 2015. 2. 東京

谷口　亘, 泉　尚史, 西尾尚子, 吉田宗平：キノホルムによる脊髄前角の興奮性シナプス伝達増強作用．平成26年度 厚生労働省班会議（スモンに関する調査研究班研究報告会）, 2015. 1. 東京

鍋田理恵：国家試験から学ぶ臨床の要点　第24回, 医道の日本2014，73（12）：152-153

坂口俊二, 百合邦子：「中高年女性のためのもっと元気になるツボ刺激」－心身のストレスが掛かるこの時代！ツボを刺激して明るく乗り越えましょう－.泉佐野市健康講座. 2014. 3. 泉佐野市

平成26年度　鍼灸学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

錦織　綾彦、楳田　高士、川本　正純、吉備　　登、坂口　俊二、木村　研一、戸村　多郎、山﨑　寿也、北川　洋志

2．平成26年度活動報告

以下の各テーマに沿って、個人およびグループ研究（学外との共同研究含む）を行った。

＜楳田高士＞

1.クリーンニードル鍼の細菌学的安全性の検討は終了し、第63回全日本鍼灸学会学術大会にて発表した。今後も開発されたクリーンニードルについての問題点をさぐる研究が必要であるが、現在ニードル自体の供給が充分でなく研究が滞っている。供給が再開されれば検討を行う予定である。

2.接骨院における衛生学的問題点について研究を大学院生とともに研究を進めてきたが、この領域での検討課題は多く、引き続き検討を行っていく予定である。

3.鍼灸臨床におけるサーモグラフィの活用について検討し、日本サーモロジー学会第31回大会で発表した。

＜吉備　登＞

1.鍼灸治療のインシデント・アクシデントについては、それらのレポートの集約をおこない、適格な施術者が行えば極めて安全な治療法であるが、皆無にはならない。その対策について第66回日本良導絡自律神経学会学術大会にて発表した。

＜坂口俊二＞

1.若年女性の冷え症と関連する症状の検討

これまで冷え症の鍼灸治療効果の判定に用いてきた評価法（「冷え日記」）について、冷えと14症状の関連を相関分析で再検討した。本結果は第64回全日本鍼灸学会で発表の予定である。

2.冷え症に対する鍼治療の臨床研究の実施

「成熟期女性の冷え症に対する鍼治療の有効性を検証する多施設共同無作為化比較試験」（UMIN-CTR登録済）を実施した。今後、データ解析を行い、論文作成の予定である。

＜木村研一＞

1.鍼刺激による下肢血流と筋交感神経活動への影響（文科省科研費研究課題（基盤研究C）　研究課題番号：24590905）。

本年度は局所冷却時において足三里穴への鍼刺激と偽鍼刺激による筋交感神経活動への影響に関する実験を行っている。現在も実験中である。

2.低周波鍼通電療法が筋酸素動態に及ぼす影響

低周波鍼通電の周波数が筋酸素動態に及ぼす影響の違いについて大学院生と研究を行った。現在は低周波鍼通電の通電時間や刺激方法について検討を行っている。

＜戸村多郎＞

1.五臓スコア（FVS）で中高年者の健康状態が評価できるのか、血液・尿検査値等との関係を地域住民約200名に調査した結果を原著論文としてEvidence-Based Complementary and Alternative Medicineに投稿した（印刷中）。調査が継続・追跡できているので、コホート研究として検討していく。

2.改訂版「五臓スコア（ Five Viscera Score ）」の妥当性に関する原著論文が、関西医療大学紀要に掲載された（関西医療大学紀要, vol. 8, 12-19, 2014）。

3.鍼灸医療面接教育における教材開発及び普及に関する研究論文が全日本鍼灸学会雑誌に掲載された（全日本鍼灸学会雑誌, 64（4）,204-211, 2014）。

4.「五臓スコア」が特許庁で商標登録された（2014.6）。

＜山﨑寿也＞

1.鍼灸実習で使用している計測カードに対して、在学生・教員にアンケート調査により問題点を抽出し、第63回全日本鍼灸学会学術大会にて発表した。その結果を基に計測カードを更新し作成した。来年度より使用する。

2.ラットの延髄弧束核へタンパク質を直接導入（マイクロインジェクション）し、慢性期での循環動態へ及ぼす影響を検討している。継続中。

＜北川洋志＞

1.トリガーポイント鍼刺激による心血管系自律神経活動の筋による反応性の違い

本年度は前年度に行った前脛骨筋への鍼刺激以外に、総指伸筋、中殿筋、咬筋のトリガーポイントへの鍼刺

激時と無刺激時の心血管系自律神経活動の反応性の違いに関する実験を行った。現在も実験中である。

３．研究業績

１．著書

吉備　登，多賀谷　昭.大阪市加美遺跡Ｙ１・２号墳丘墓出土の弥生人骨．公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所（編）．大阪市平野区加美遺跡発掘調査報告Ｖ．公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所.2015:129-52.

坂口俊二．臨床⑤主要症状・疾患のエビデンスとメカニズム 第１節 6. 冷え症．川喜田健司，矢野 忠（編）．鍼灸臨床の最新科学 メカニズムとエビデンス第１版．医歯薬出版.2014:142-7.

２．原著

Kimura K, Ryujin T, Uno M, Wakayama I. The effect of electro-acupuncture with different frequencies on muscle oxygenation in humans. Evid Based Complement Alternat Med. Article ID620785, 6 pages 2015.

Taro Tomura, Kouichi Yoshimasu, Shunji Sakaguchi, Kanami Tsuno, Shigeki Takemura, Nobuyuki Miyai, Kazuhisa Miyashita. Influence of biomedical factors on the Five Viscera Score（FVS）on middle-aged and elderly: application of structural equation modeling. Evidence-based Complementary and Alternative Medicine（in press）

楳田高士．関西医療大学におけるサーモグラフィ研究の歩み．Biomed Cheromol. 34（2）:28-31.2015

林　正貴，遠藤　宏，田中泰史，吉備　登．良導絡データの多変量解析による診察法－胸椎圧迫骨折患者の良導絡（針）治療を通じて－．日良導絡自律神会誌．60（1）:28-37.2014

戸村多郎．改訂版「五臓スコア（ Five Viscera Score ）」の妥当性．関西医療大学紀.8：12-9.2014

奈良雅之，戸村多郎，小島賢久，福田文彦，中村真通，藤田洋輔．鍼灸師を対象とした医療コミュニケーション・スキル尺度の開発．全日鍼灸会誌．64（4）：204-11.2014

宮嵜潤二，久下浩史，池上典子，辻　涼太，坂口俊二，竹田太郎，小島賢久，佐々木和郎，森　英俊．女性の冷え症状に関する因子の検討－冷え・腰痛・月経関連症状尺度の関係性について－．QOL J. 15（1）：45-50.2014

宮嵜潤二，久下浩史，坂口俊二，森　英俊．日常生活活動を指標とした肩こり調査紙の作成－肩痛および肩こりの調査紙間の関係とその再現性について－．東医とペインクリニック．44（1）：2-10.2014

池上典子，辻　涼太，久下浩史，坂口俊二，竹田太郎，宮嵜潤二，小島賢久，森　英俊．冷え症状と月経関連症状との関係性について．東医とペインクリニック．44（1）：11-6.2014

辻　涼太，小島賢久，池上典子，久下浩史，坂口俊二，森　英俊．女性の冷え症状に関する因子の検討－冷え・腰痛・月経関連症状尺度の関係性について－．東医とペインクリニック．44（1）：17-24.2014

３．学会発表

楳田高士，北川洋志，山﨑寿也，東内あすか，家本旬二，下市善紀，清行康邦：クリーンニードル鍼の細菌学的安全性の検討．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5.愛媛

楳田高士．関西医療大学におけるサーモグラフィ研究の歩み（大会長講演）第31回日本サーモロジー学会．2014.6.大阪

吉備　登．鍼灸治療の落とし穴．第66回日本良導絡自律神経学会学術大会．2014.9．仙台

坂口俊二，戸村多郎，久下浩史，若山育郎．若年女性の冷え症に対する「五臓スコア」による原穴と三陰交（SP6）を用いた円皮鍼セルフケアの試み．平成26年度日本東洋医学会関西支部例会．2014.10. 大阪

宮嵜潤二，久下浩史，白井麻衣子，坂口俊二，佐々木和郎，森　英俊．肩こりとQOLとの関連について．第15回日本QOL学会．2014.9. 東京

池藤仁美，坂口俊二，鍋田理恵．関西医療大学における学習管理システムの構築と運用国家試験対策を例として．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5. 愛媛

宮嵜潤二，久下浩史，坂口俊二，佐々木和郎，森　英俊．肩こり調査紙と肩部の硬度および圧痛との関係について．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5. 愛媛

龍神孝慶，木村研一，坂口俊二，楳田高士，郭　哲次，若山育郎．低周波鍼通電療法が筋酸素動態に及ぼす影響　周波数による比較．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5. 愛媛

木村研一，竹内勇人，百合邦子，若山育郎．鍼刺激や電子温灸による局所皮膚血流増加反応と一酸化窒素の関与　マイクロダイアリシス法による検討．第31回日本サーモロジー学会．2014.6.大阪

木村研一，中村　健，高橋紀代，田島文博．鍼刺激が筋交感神経活動および循環動態に与える影響．第67回日本自律神経学会総会．2014.10. 埼玉

戸村多郎．五臓スコア（FVS）とストレスとの関連性（シンポジウム：ストレスに対する東洋医学的アプローチ）．第84回日本衛生学会学術総会．2014.5. 岡山

戸村多郎，中井一彦，坂口俊二，福田文彦，小島賢久，宮井信行．鍼灸医療面接教育における教材開発及び普及に関する研究（2）．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5. 愛媛

小野真裕子，出水小百合，酒井律子，中井一彦，戸村多郎．月経前症候群（PMS）に対する東洋医学的診断―五臓スコアとの関係．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5. 愛媛

森下美佳，青地由梨奈，宮井信行，内海みよ子，内川友紀子，辻　あさみ，戸村多郎，森岡郁晴，宮下和久．中学生における睡眠状態とストレス症状との関連．第61回近畿学校保健学会．2014.7. 大阪

山﨑寿也，北川洋志，坂口俊二，楳田高士．関西医療大学での鍼灸実習時の技術向上に対する取組み　～「計測カード」を用いて～．第63回全日本鍼灸学会学術大会．2014.5.愛媛

北川洋志，木村研一，吉田宗平．トリガーポイント鍼刺激が及ぼす心血管系自律神経活動の検討　筋による反応性の違いについて．第63回全日本鍼灸学会学術大会.2014.5.　愛媛

４．その他

楳田高士．東洋医学健康講座－長寿と健康－．熊取町ゆうゆう大学「はつらつ世代講座」長寿と健康－東洋医学から見た認知症と予防－．熊取町．2015.8

楳田高士．リスク管理（鍼灸師）．大阪府鍼灸マッサージ師会．大阪市．2014.9

楳田高士．リスク管理（あん摩マッサージ指圧師）．大阪府鍼灸マッサージ師会．大阪市．2014.9

楳田高士，坂口俊二，木村研一．鍼灸実技講習．平成26年度　日本東洋医学会 関西支部例会．泉佐野市．2014.10

楳田高士．日本サーモロジー学会第31回大会（大阪大会）報告．Biomedical THERMOLOGY. 34（2）．2015

池藤仁美，坂口俊二．多系統萎縮症に対する鍼治療の一症例．日東洋医物理療会誌．39（2）：59-63.2014

坂口俊二.「スポーツジムで心も体もリフレッシュセミナー」―東洋医学の「治未病」を活かしたセルフケアの実践―．警察共済組合和歌山県支部リフレッシュセミナー．　田辺市.2014.10

坂口俊二，百合邦子.「中高年女性のためのもっと元気になるツボ刺激」―心身のストレスが掛かるこの時代！ツボを刺激して明るく乗り越えましょう―．泉佐野市健康保健センター健康講座.泉佐野市.2015.3

坂口俊二．冷え症に対する酵素処理ヘスペリジンを主剤とする栄養補助食品（めぐりの十一源®）の効果．日本サーモロジー学会第31回大会ランチョンセミナー .熊取町.2015.6

戸村多郎．家庭で出来るツボ刺激 Part 2 ―美と健康のために―．公社 滋賀県看護学会.草津市.2014.12

戸村多郎．商標登録「五臓スコア」．　特許庁．2014.6

木村研一. 平成24年～26年度文科省科学研究費補助金（基盤研究C　継続）「鍼刺激が下肢血流に及ぼす影響と筋交感神経活動の役割に関する研究」木村研一, 石田和也, 高橋紀代, 田島文博

平成26年度　スポーツトレーナー学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

増田　研一、辻　　和哉、中尾　哲也、内田　靖之、山口　由美子

2．平成26年度活動報告

本ユニットの構成メンバーは学内外に於いて様々な種目・カテゴリーのスポーツ現場に出る機会が多く、多種多様なトレーニング方法やコンディショニング方法を実践もしくは指導する機会が非常に多い。それらに関する客観的なエヴィデンスをフィードバックすることを目的にして活動を継続している。

また、予防医学的観点から疫学的調査も施行して実際の活動現場に活かすよう心がけている。

主な項目として、

- 各種テーピングや物理療法などスポーツ現場で頻用される保存治療／コンディショニングの手法に関して、それらの効果発現メカニズムを可及的客観的に把握することを目的として様々なパラメーターを用いて検討すること。
- 予防医学的な観点からスポーツ現場における様々な因子を疫学的に調査すること。
- 色々なトレーニング方法やスポーツパフォーマンスに関してより効果的な手法を各種パラメーターを用いて検討すること。

3．研究業績

原著

増田研一、貞方勇祐、有本米次郎：慢性の足関節症状に対する低出力レーザーの効果～重心動揺性を指標にして～，関西臨床スポーツ医・科学研究会誌，23,43-44,2013

中尾哲也：呼吸方法と運動のタイミングの違いが換気量に及ぼす影響，体力科学，60,355,2014

中尾哲也：皮膚吸引は自動運動による関節可動域を向上させる，体力科学，60,362,2014

中尾哲也：皮膚吸引による筋膜リリースが呼吸機能に及ぼす影響，日本体力医学会第29回近畿地方会予稿集，37，2015

吉田隆紀、谷埜予士次、増田研一　他：足関節捻挫後の機能的不安定性に対する経費的電気刺激を加えたトレーニングについて－重心動揺計と筋電図を用いた検討－，臨床スポーツ医学，13,411-418,2013

下河内洋平、井口　理、内田靖之　他：着地の研究（前十字靱帯損傷と足関節捻挫をめぐって：ディスカッション），Sportsmedicine，26,20-25,2014

学会／研究会発表

増田研一：フットサルチームのメディカルサポート／スポーツ外傷について，第3回びわこスポーツ医学カンファレンス，滋賀，2014.5

増田研一、岡井和久、磯部一樹　他：『機能的』テーピングの試み～動揺性制御とバランス能維持を尺度とした検討～，第24回関西臨床スポーツ医・科学研究会，大阪，2014.6

吉田隆紀、谷埜予士次、増田研一　他：握力の疲労課題における末梢神経電気刺激の効果－筋積分値を用いた検討－，第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会，東京，2014.11

井口　理、國部雅大、内田靖之　他：異なる足関節角度と床面の安定性の変化が片脚立ち中の足関節動揺性に与える影響，第69回日本体力医学会大会，長崎，2014.10

島　洋祐、増田研一、内田靖之　他：ユニバーシアード男子サッカー日本代表候補選手の栄養・サプリメントに関するアンケート調査，東京，2014.11

その他

増田研一：「フットボール現場」のメディカルサポート①頭部外傷対策②現場活動の実際　和歌山県医師会日本医師会認定健康スポーツ医学再研修会．和歌山．2015.2.7

中尾哲也：京都教育大学　コンディショニング演習．2014.8.6-9

中尾哲也：大阪府立交野高等学校　スポーツ障害防止講演会．2014.8.20

中尾哲也：「安全・安心ウオーキング」～正しいストレッチから～　平成26年度熊取ゆうゆう大学　ゆうゆう楽部　地域活動入門講座～わたしのセカンドステージin Kumatori ～．大阪．2015.3.4

平成26年度　理学療法学ユニット研究活動状況

A．平成26年度　理学療法学ユニットの構成メンバー

鈴木　俊明、谷埜　予士次、米田　浩久、吉田　隆紀、谷　万喜子、鬼形　周恵子、文野　住文

B．研究活動概要

今年度の研究テーマは、下記のようである。

1）理学療法評価および治療法に関する神経生理学的・生体力学的研究
2）理学療法と鍼灸医学の考えを組み合わせた新しい治療法の開発と、その効果に関する神経生理学的研究
3）運動学習、運動イメージに関する神経生理学的研究
4）神経疾患に対する鍼治療効果に関する基礎および臨床研究

C．研究業績

（主に、平成26年度著書、論文等、学会報告、講演会など）

原　著

1）吉田隆紀、谷埜予士次、増田研一、鈴木俊明：捻挫後の機能的不安定性に対する経皮的電気刺激を加えたトレーニングの効果　－片脚立位時の重心動揺計と筋電図を用いた検討－，臨床スポーツ医学，31, 385-389, 2014

2）吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之：スモンの運動機能の経年変化　－2症例での検討－，厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班平成25年度　総括・分担研究報告書，179-181, 2014

3）鈴木俊明：理学療法と鍼灸の融合とは何か－「経穴刺激理学療法」と評価の重要性，
Sportsmed, 161, 2-4, 2014

4）鈴木俊明、谷　万喜子、田中健一、髙橋　護、生田啓記：理学療法と鍼灸に関する研究から　－鍼刺激と筋機能、経穴刺激と運動－，Sportsmed, 161, 5-15, 2014

5）吉田隆紀、谷埜予士次、鈴木俊明：足関節捻挫後の機能的不安定性に対する電気療法の効果　－不安定板上の運動時に電気療法を付加するトレーニング法の検討－，理療科，29, 417-420, 2014

6）池田幸司、大沼俊博、渡邊裕文、藤本将志、赤松圭介、鈴木俊明：端座位での側方体重移動時における移動側中殿筋・大腿筋膜張筋・大殿筋上部線維の筋電図積分値，理療科，29, 421-424, 2014

7）吉岡芳泰、谷埜予士次、鈴木俊明：膝伸展課題直後のハムストリングスの筋活動と膝屈曲トルク，理療科，29, 555-559, 2014

8）渡邊裕文、大沼俊博、高崎恭輔、谷埜予士次、鈴木俊明：座位での側方への体重移動における腹斜筋群の筋活動の特徴，理療科，29, 561-564, 2014

9）由留木裕子、鈴木俊明、文野住文、岩月宏泰：アロマテラピーが上肢での脊髄神経機能の興奮性に与える影響について，臨床神経生理学，42, 87-99, 2014

10）高橋優基、藤原　聡、伊藤正憲、嘉戸直樹、鈴木俊明：意識的には認識できない小さなリズムの変化が予測に基づく反応時間に及ぼす影響　－基本間隔を延長したパターンによる検討－，理学療法学，41, 306-311, 2014

11）大沼俊博、渡邊裕文、藤本将志、赤松圭介、谷埜予士次、鈴木俊明：立位での踵部および前足部荷重における腹斜筋群、多裂筋の筋活動について，ボバースジャーナル，37, 2-5, 2014

12）米田浩久、鈴木俊明：全習法と異なる二種の分習法での運動学習効果の検討　―単位時間軌跡長による検討―，理療科，29, 809-813, 2014

13）大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：立位時の体重側方移動が腰背筋の筋機能に与える影響　―組織硬度計を用いた検討―，生体応用計測，5, 63-67, 2014

14）鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子、谷　万喜子、米田浩久：筋緊張異常に対するアプローチ，関西理学，14, 27-31, 2014

15）橋谷裕太郎、早田　荘、赤松圭介、藤本将志、大沼俊博、鈴木俊明　他：立位での膝関節屈曲位保持課題が膝蓋骨の前額面上回旋角度変化に及ぼす影響，関西理学，14, 37-41, 2014

16）國枝秀樹、末廣健児、大沼俊博、渡邊裕文、石濱崇史、鈴木俊明：立位での前足部荷重における多裂筋・最長筋・腸肋筋の筋活動について，関西理学，14, 43-47, 2014

17）高橋優基、藤原　聡、伊藤正憲、嘉戸直樹、鈴木俊明：聴覚刺激のリズムの変化率の違いがリズミカルな反応運動に及ぼす影響，関西理学，14, 49-58, 2014

18）辻　智美、石橋佑実、藤本将志、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明　他：歩行の右立脚中期から後期に骨盤の過度な右側方移動が生じることで歩行動作の安全性・安定性低下を認めた小脳梗塞後患者の理学療法，関西理学，14, 59-65, 2014

19）小松菜生子、橋谷裕太郎、藤本将志、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明　他：立ち上がり動作時に左麻痺側後方への転倒の危険性を認めた右被殻出血後左片麻痺患者の理学療法，関西理学，14, 67-76, 2014

20）刀坂　太、早田　荘、赤松圭介、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：立ち上がり動作時に右後方への転倒傾向を認めた第6頸髄不全損傷四肢麻痺患者の理学療法，関西理学，14, 83-89, 2014

21）水口真希、高森絵斗、早田　荘、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明　他：第2腰椎圧迫骨折および腸閉塞外科術後に起き上がり動作が困難となった症例の理学療法，関西理学，14, 91-101, 2014

22）松井滉平、網本怜子、刀坂　太、文野住文、鈴木俊明：ホールドリラックスを利用したリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　―F波を用いた研究―，理療科，29, 979-982, 2014

23）渡邊裕文、大沼俊博、池田幸司、末廣健児、石濱崇史、鈴木俊明　他：座位での側方リーチ動作における圧中心（COP）の変位と内腹斜筋の筋活動について，ボバースジャーナル，37, 124-128, 2014

24）前田剛伸、嘉戸直樹、鈴木俊明：複雑性の異なる手指対立運動の運動イメージが上肢脊髄神経機能の興奮性に及ぼす影響，臨床神経生理学，43, 10-13, 2015

25）鈴木俊明：痙縮の病態生理と電気生理学的評価，MB Med Reha, 180, 23-28, 2015

26）谷埜予士次：誘発筋電図M派からみた内側広筋斜頭と長頭の機能的差異に関する考察,日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会雑誌

27）Suzuki T, Bunnno Y, Onigata C, Tani M, Uragami S: Excitability of Spinal Neural Function by Motor Imagery with Isometric Opponens Pollicis Activity, Influence of Vision during Motor Imagery, NeuroRehabilitation, 34, 725-729, 2014

28）Tanino Y, Suzuki T: Spinal Reflex Arc Excitability Corresponding to the Vastus Medialis Obliquus and Vastus Medialis Longus Muscle, J, Phys, Ther, Sci, 26, 101-104, 2014

29）Suzuki T, Bunno Y, Onigata C, Tani M, Yoneda H, Yoshida T, et al: Excitability of Spinal Neurons during Relaxation Imagery for 2 Minutes, Int J Neurorehabilitation Eng, 1, 105, 2014

30）Suzuki T, Bunno Y, Onigata C, Tani M, Uragami S, Yoshida S: Excitability of spinal neural function during motor imagery in Parkinson’s disease Functional Neurology 29, 1-5, 2014

31）Bunno Y, Yurugi Y, Onigata C, Suzuki T, Iwatsuki H: Influence of Motor Imagery of Isometric Opponens Pollicis Activity on the Excitability of Spinal Motor Neurons: a Comparison using Different Muscle Contraction Strengths. J, Phys, Ther, Sci, 26, 1069-1073, 2014.

学会発表

1）吉田隆紀、石元優々、中尾慎一、川上　守：腰椎疾患に対する脳由来神経栄養因子と多面的評価の関連

性について，第122回中部日本整形外科災害外科学会学術集会，岡山，2014.4

2）後藤勇太、髙橋　護、酒井英謙、高木綾一、谷　万喜子、鈴木俊明：ヒラメ筋筋腹への集毛鍼刺激がヒラメ筋のH波に与える影響　－集毛鍼刺激頻度2Hzでの検討，第63回（公社）全日本鍼灸学会学術大会，愛媛，2014.5

3）田中健一、谷　万喜子、酒井英謙、高木綾一、吉田宗平、鈴木俊明：ハンガー反射を応用した頭部への円皮鍼・銀粒刺激の検討　－健常者の頸部姿勢に与える影響－，第63回（公社）全日本鍼灸学会学術大会，愛媛，2014.5

4）牧野一永、田中健一、生田啓記、谷　万喜子、鈴木俊明、吉田宗平：頸部後屈を呈する頸部ジストニア患者に対する鍼治療　－運動ニューロパチーを合併した一症例－，第63回（公社）全日本鍼灸学会学術大会，愛媛，2014.5

5）山本吉則、嘉戸直樹、鈴木俊明：運動頻度の増加が体性感覚入力に及ぼす影響　－体性感覚誘発電位を用いた検討－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

6）前田剛伸、嘉戸直樹、鈴木俊明：手指対立運動の運動イメージが上肢脊髄神経機能の興奮性に及ぼす影響　－イメージ明瞭性の評価を用いた検討－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

7）嘉戸直樹、伊藤正憲、藤原　聡、野村　真、鈴木俊明：一側上肢の精緻な運動の学習が対側上肢脊髄神経機能への促通効果に及ぼす影響，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

8）髙橋優基、藤原　聡、伊藤正憲、嘉戸直樹、鈴木俊明：聴覚刺激の刺激感覚の変化がリズムの予測に基づく反応運動に及ぼす影響　－筋電図反応時間による検討―，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

9）伊藤正憲、嘉戸直樹、鈴木俊明:リズム刺激とタッピングの同期が運動リズムに及ぼす影響　1秒間隔の運動による検討，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

10）野瀬晃志、山本将輝、伊藤紀代香、坂本考優、谷埜予士次、鈴木俊明　他：足底への冷却および触圧覚刺激が歩行における立脚期のpre-activationに及ぼす影響，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

11）米田浩久、鈴木俊明：トレーニング設定のための同一運動課題に対する異なる分習法による運動学習効果を基にした検討　－運動構成要素の学習順序変更による比較－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

12）池澤秀起、高木綾一、鈴木俊明：腹臥位での下肢空間保持課題が反対側の僧帽筋下部線維の筋活動に与える影響－肩関節外転角度に着目して－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

13）高木綾一、畠　淳吾、鈴木俊明：セラピストの人事考課成績に影響を与える要因に関する研究，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

14）伊藤　陸、貝尻　望、藤本将志、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：立位でのステップ肢位保持における支持側大殿筋上部線維、中殿筋、大腿筋膜張筋の筋電図積分値について　－支持側股関節外旋角度の変化による検討－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

15）吉田隆紀、谷埜予士次、鈴木俊明：足関節捻挫後の機能的不安定性に対する経皮的電気刺激を加えたトレーニングの効果について　－片脚立位の重心動揺計と筋電図を用いた検討－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

16）渡邊裕文、大沼俊博、藤本将志、池田幸司、末廣健児、鈴木俊明　他：座位での側方リーチ動作における圧中心（COP）の変化と内腹斜筋の筋活動について　－リーチ速度の違いによる検討－，第49回日本理学療法学術大会，神奈川，2014.5

17）鈴木俊明：脳血管障害片麻痺患者の痙縮のリハビリテーション評価としてのF波、H波の応用，第51回日本リハビリテーション医学会学術集会，愛知，

2014.6

18）西村　健、矢島優磨、玉置昌孝、井上隆文、中道哲朗、鈴木俊明　他：端座位における座面の深さ変化が立ち上がり動作時の運動パターンと体幹・下肢筋の筋活動パターンに及ぼす影響，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

19）岩淵順也、清水貴史、玉置昌孝、井上隆文、中道哲朗、鈴木俊明：健常者における足関節背屈時の足関節後面の皮膚伸張性についての検討，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

20）玉置昌孝、井上隆文、中道哲朗、藤本将志、鈴木俊明：しゃがみ込み動作における下肢筋の筋活動パターンの検討　～ハムストリングスに着目して～，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

21）野口翔平、玉置昌孝、井上隆文、中道哲朗、藤本将志、鈴木俊明：立位での一側下肢への側方体重移動が多裂筋・腸肋筋・最長筋の筋活動パターンに与える影響について，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

22）網本怜子、高木綾一、鈴木俊明：降段動作にて左立脚期に左足関節前面に疼痛が生じた左脛骨高原骨折の一症例，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

23）本荘智也、井尻朋人、高木綾一、鈴木俊明：健常者のリーチ方向の違いによる実測値と予測値の変化，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

24）下沖泰裕、光田尚代、高木綾一、鈴木俊明：左後方リーチ動作時の足圧中心の変化と下肢・体幹の筋活動について　～左膝人工関節置換術後の症例を通して～，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

25）辻田依世、光田尚代、高木綾一、鈴木俊明：股関節と膝関節の関係性に着目し左側方への不安定性が改善した左大腿骨転子部骨折の一症例，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

26）矢野　悟、高木綾一、鈴木俊明：協調運動障害に対し膝立ちでのアプローチにより歩行時の転倒傾向が改善した心原性多発脳梗塞の一症例，第26回大阪府理学療法学術大会，大阪，2014.7

27）大沼俊博、渡邊裕文、藤本将志、赤松圭介、鈴木俊明：背臥位と直立位の肢位変化が上前腸骨棘間長に及ぼす影響，第4回日本ボバース研究会学術大会，大阪，2014.7

28）谷埜予士次、鈴木俊明：誘発筋電図M波からみた内側広筋斜頭と長頭の機能的差異に関する考察．第6回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会，広島，2014.7

29）鈴木俊明：パーキンソン病の体幹前屈偏倚には最長筋の筋活動の変化が関与する，第8回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス，京都，2014.10

30）鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子、谷　万喜子、浦上さゆり、吉田宗平：脳血管障害片麻痺患者への1分間のリラックスイメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　―廃用手における検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

31）西村　健、玉置昌孝、鈴木俊明　他：端座位における座面の深さ変化が立ち上がり動作時の下肢筋活動パターンと足底圧中心位置に及ぼす影響，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

32）熊川圭一、阿萬大地、清水啓介、中道哲朗、鈴木俊明：座位での体幹前傾角度変化が股関節伸展筋の筋電図積分値相対値に及ぼす影響，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

33）岡林　良、井尻朋人、高木綾一、鈴木俊明：床へのリーチ動作における関節角度と筋電図解析，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

34）田中智也、高木綾一、鈴木俊明：脳卒中片麻痺患者一症例における着座動作の分析　―足底中心に着目して―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

35）東藤真理奈、文野住文、米田浩久、鈴木俊明：運動イメージの具体的方法の個人差に関する一考察，第

54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

36）楠　貴光、早田　荘、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：肩関節水平屈曲角度変化が大胸筋の筋電図積分値相対値に及ぼす影響，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

37）大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：背臥位と直立位の肢位変化が内腹斜筋横方向線維の硬度に与える影響　―組織硬度計を用いた検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

38）林田修司、高木綾一、鈴木俊明：健常人における膝折れ機序の分析　―筋活動パターンに着目して―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

39）辻本麻帆、相坂美帆、大村　心、小川伊作、吉田隆紀、鈴木俊明　他：足関節捻挫後の機能的不安定性に対するキネシオテーピングの効果　―片脚立位とドロップジャンプ着地時の安定性による検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

40）今井庸介、高木綾一、鈴木俊明：介護老人保健施設における在宅復帰に影響を与える因子について　―在宅復帰者と非在宅復帰者の比較検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

41）高崎浩壽、末廣健児、鈴木俊明：運動観察による視覚刺激が脊髄神経機能の興奮性に及ぼす影響について　―F波を用いた視覚の効果についての検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

42）野村　真、嘉戸直樹、伊藤正憲、藤原　聡、鈴木俊明：一側上肢の精緻な運動の学習は対側上肢脊髄神経機能への促通効果を減弱させる，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

43）山本将揮、清水貴史、澤田拓馬、北野冬馬、吉田隆紀、鈴木俊明　他：わき腹痛を有したアンダースロー投法投手における投球動作解析　―三次元動作解析機を用いた検討―，第54回近畿理学療法学術大会，大阪，2014.11

44）吉田隆紀、増田研一、鈴木俊明：前腕筋群の疲労に対する末梢神経電気療法の効果　―グリップ動作課題における握力と筋電図筋積分値を用いた検討―，第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会，東京，2014.11

45）早田　荘、楠　貴光、藤本将志、大沼俊博、渡邊裕文、鈴木俊明：一側肩関節屈曲位保持課題における屈曲角度変化が両側最長筋、多裂筋、腸肋筋の筋電図積分値に及ぼす影響，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

46）山本将揮、岩淵順也、玉置昌孝、中道哲朗、鈴木俊明：健常者の後方ステップ動作における遊脚側下肢接地後の股関節周囲筋の筋活動パターンについて，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

47）佐々木元勝、玉置昌孝、中道哲朗、鈴木俊明：座位における足関節底屈運動時の足関節周囲筋の筋活動パターンについて，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

48）野口翔平、玉置昌孝、中道哲朗、鈴木俊明：立位での一側下肢への側方体重移動の速度変化が多裂筋、腸肋筋、最長筋の筋活動パターンに与える影響について，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

49）福本悠樹、武　凪沙、淵本　恵、文野住文、鈴木俊明：運動の巧みさは運動イメージに影響されるのか　―健常者による検討―，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

50）白井孝尚、上野喜常、森川智貴、福本悠樹、文野住文、鈴木俊明　他：尺沢穴への触覚、触圧覚、痛覚刺激の違いが母指球筋F波に与える影響　―健常者による検討―，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

51）東藤真理奈、文野住文、鈴木俊明：運動イメージの手続き方法が脊髄神経機能の興奮性に与える影響，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理

学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

52）水口真希、高森絵斗、渡邊裕文、鈴木俊明：経穴刺激理学療法抑制手技における尺沢穴への刺激の相違が母指球筋F波に与える影響　―脳血管障害片麻痺患者による検討―，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

53）今奈良　有、文野住文、鈴木俊明：等尺性収縮を用いた母指対立運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性と運動の巧みさに与える影響　―30%収縮強度における検討―，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

54）山本吉則、嘉戸直樹、鈴木俊明：脳卒中患者における非麻痺側手指の随意運動が非麻痺側の感覚機能に及ぼす影響，第44回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡，2014.11

55）鈴木俊明、文野住文、鬼形周恵子、谷　万喜子、谷埜予士次、吉田宗平　他：脳血管障害片麻痺患者の麻痺側上肢F波はH波である可能性がある，第44回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡，2014.11

56）髙橋　護、谷　万喜子、鈴木俊明：築賓穴への2分間の接触刺激がヒラメ筋のH波に与える影響，（公社）全日本鍼灸学会　第34回近畿支部学術集会，大阪，2014.11

57）平瀬尚貴、井上達哉、由井和久、柳原世紀、佐々木英文、鈴木俊明：母趾屈曲運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　―視覚と運動イメージの関連性について―，第23回日本柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2014.11

58）西　僚太、山野昌夫、大熊菜央子、溝端直人、佐々木英文、鈴木俊明：母趾屈曲運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響 ―開眼と閉眼時の運動イメージの関連性について―，第23回日本柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2014.11

59）佐々木英文、浦辺幸夫、鈴木俊明：母趾屈曲運動の運動イメージが脊髄神経機能の興奮性に与える影響　―運動課題の違いによる検討―，第23回日本柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2014.11

60）吉田隆紀、石元優々、川上　守：腰椎疾患の脳由来神経栄養因子について，第22回日本腰痛学会，神奈川，2014.11

61）吉田宗平、鈴木俊明、中吉隆之：両側中殿筋の筋緊張低下を認めたスモン患者1症例―片脚立位動作と歩行様式の関連性―，平成26年度厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）「スモンに関する調査研究班」研究報告会，東京，2015.1

62）鈴木俊明：脳血管障片麻痺患者へのリラックスイメージの時間変化は脊髄神経機能の興奮性を変化させるか？　―リラックス効果が異なった2症例での検討―，第6回日本ニューロリハビリテーション学会学術集会，秋田，2015.2

国際学会

1）Suzuki T, Bunnno Y, Onigata C, Tani M, Uragami S: Effects of 1-and 2-min periods of relaxation imagery on spinal neuronal excitability, 8th World Congress for NeuroRehabilitation, Istanbul-Turkey, 2014.4

2）Suzuki T, Bunno Y, Tani M, Onigata C, Wakayama I, Yoshida S, et al: F-wave waveform values increased following improved voluntary movements in a patient with cerebrovascular disease, The 4th Japan-Korea NeuroRehabilitation Conference, Akita, 2015.2

シンポジスト

1）鈴木俊明：運動イメージにおける脊髄神経機能，第1回日本基礎理学療法学会学術集会・日本基礎理学療法学会第4回学術大会合同学会，愛知，2014.11

平成26年度　ヘルスプロモーション・整復学ユニット研究活動状況

A. 構成メンバー

ユニット長：五十嵐　純
相澤　慎太、井口　　理、伊藤　俊治、牛島　詳力、
尾原　弘恭、金井　成行、高岸　美和、津田　和志、
畑島　紀昭、畑村　育次、山原　正美

B. 研究の計画と概要

平成22年4月1日から共同研究推進委員会のもとで、ヘルスプロモーション・整復学ユニットとしてユニット組みをして活動を開始。

（ヘルスプロモーションの分野）

ヘルスプロモーションの分野は多岐にわたるが、本ユニットでは、静的な状態の継続や、運動や動作などの動的な影響や、物理的刺激が、体に及ぼす様々な生理的な変化・効果についての研究を行っていく。さらに、ヘルスプロモーション全般にかかわる分子生物学的な研究も加えて活動を行っていく。

（柔道整復の分野）

柔道整復は、業として古来より日本に伝わる施術体系の一つである。業としての柔道整復は現状伝統的手法で骨折・脱臼・打撲・軟部組織等の処置を行ってきている。また柔道（柔術）を起源とするので運動器の損傷や動きについての理解がある。しかし、未だ研究機関も少なく、施術論理の解明に至っているとは言えない。そこで、本分野では、これら伝統的に行われてきている施術について基礎的・臨床的・教育的な研究と運動器についての研究の構築を行いつつある。

上記についてヘルスプロモーションと柔道整復についての研究（下記）を、単独もしくは組み合わせて行う予定である。

（研究内容・結果について）

1.金井らは磁気が筋肉の組織血液酸素動態に及ぼす影響について検討した。本研究では、健常人に、ヘッドレスト付きリクライニングチェア座位安静後に磁気（磁石群：表面磁束密度／55mT）を60分間曝露した（対照：Sham磁石群／コントロール群）。評価は、近赤外線分光法（NIRS）にて僧帽筋上部の酸素化ヘモグロビン濃度（*oxy*Hb）及び脱酸素化ヘモグロビン濃度（*deoxy*Hb）を経時的に測定した。*oxy*Hbは、２群ともに上昇する傾向であったが、*deoxy*Hbは、磁石群のみに低下する傾向がみられたことから、磁気が組織血液酸素動態に対して影響を及ぼす可能性が示唆された。

2.津田らは細胞膜の物理的性質の検討として、電子スピン共鳴ならびにスピンラベル法を用いて高血圧患者の細胞膜fluidity を測定し、その調節を各種血管内分泌因子との関連から考察した。高血圧患者の赤血球膜fluidityは正常血圧者に比し有意に低下していた。
既に津田らは酸化ストレスの指標のひとつである血中8-iso-prostaglandin F2 α（8-isoPGF2 α）値は高血圧群で正常血圧群に比し有意に高値であり、赤血球膜fluidityの悪化やNO代謝産物の低下と有意に相関することを報告した。
この成績は酸化ストレスが高血圧の膜機能調節に重要な役割を果たす可能性を示唆するものと考えられる。
一方、adipokineのひとつであるresistin の血中濃度は高血圧群で正常血圧群に比し有意に高値であった。また血中resistin濃度の増加しているほど、赤血球膜fluidityは悪化していた。さらに血中resistin濃度は血中8-iso-prostaglandin F2 α（8-isoPGF2 α）値と有意に正相関した。このことはresistinが一部酸化ストレスを介して膜fluidityを低下させることを示すものと考えられる。
以上から肥満に関連した血管内分泌因子が高血圧の細胞膜機能に重要な影響を及ぼし、それらの調和破綻がメタボリックシンドロームの心血管病の成因に一部関与する可能性が示唆された。

3.畑村らは多嚢胞性卵巣症（Polycystic Ovary Syndrome,PCOS）は、月経異常,多嚢胞性卵巣,血中男性ホルモン高値またはLH基礎値高値かつFSH基礎値正常を満たす疾患で、体内環境ホルモンの異常で生じるが原因の詳細な解明はされていない。
多嚢胞性卵巣（ＰＣＯ）はストレスや内分泌攪乱物質等の環境ホルモンや体内環境ホルモンの乱れなど多因子の影響で、下垂体、卵巣機能の障害を来たしステロ

イドホルモンの産生異常が病因となっていることが予想されるが、その原因や病態生理は複雑でいまだ明らかにされていない。そこで畑村らはステロイドホルモンの一種であるアンドロゲンをマウスに投与しＰＣＯを作製し、その卵巣内環境ホルモンの異常がどのように卵母細胞成熟に関与するのかをセロトニンを中心に組織学的および分子生物学的に検討している。

4.運動が生体に及ぼす影響について、平成26年度は、五十嵐・相澤研究員が、看護学ユニットと共同的な研究を行った。

5.動的・静的な影響や物理刺激に関する研究については、昨年同様基礎的な研究を進めた。

C. 研究費獲得状況

平成26年度（競争的研究資金）

（1）科学研究費補助金　基盤研究（C）代表　津田和志（新規）
細胞膜異常と骨血管相関からみた高血圧ならびに肥満関連生活習慣疾患の病態生理

（2）科学研究費補助金　基盤研究（C）代表　畑村育次（継続）
アンドロゲン誘導マウス多嚢胞性卵巣における卵母細胞成熟の基礎的研究

（3）日本腎臓財団　腎不全病態研究助成　代表　伊藤俊治
腎性骨症における基質小胞機能の探索的研究

D. 研究業績

原　著・その他の論文

谷口典正，金井成行：肩こりに対する磁気治療の客観的評価．慢性疼痛誌，33（1），123-129，2014.

金井成行,谷口典正：疼痛に対する磁気治療の経験　－サーモグラフィを用いて－，日本サーモロジー学会機関誌，34（2），34-40，2015.

織田育代，金井成行：顔面部皮膚温度に対するフェイシャルエクササイズの効果，日本サーモロジー学会機関誌，34（2），44-48，2015.

井口　理，下河内洋平：足関節内反捻挫予防のバランストレーニングを効果的に行うための足関節肢位と床条件の検討，大阪体育大学大学紀要，2014．第45巻，218

下河内洋平，井川貴裕，渡邊有実，油谷　浩，井口　理，内田靖之，楠本繁生：大学女子ハンドボール選手における踏切脚と非踏切脚による片脚リバウンドジャンプ遂行能力と両脚スクワット1RMおよびスクワットジャンプ最大パワー発揮能力との関係性の相違，トレーニング指導，2014．1（1），4-9

M Takagishi, S S Gouraud, M E R Bhuiyan, A Kohsaka, M Maeda and H Waki:Activation of histamine H1 receptors in the nucleus tractus solitarii attenuates cardiac baroreceptor reflex function in rats.Acta Physiologica.2014;211（1）:73-81

Hidefumi Waki, Miwa Takagishi and Sabine S Gouraud:Central mechanisms underlying anti-hypertensive effects of exercise training.J Phys Fitness Sports Med.2014; 3（3）:317-325

Tsuda K, Mieth A, Revermann M, Babelova A, Weigert A, Schermuly RT, Brandes RP. Sympathoinhibitory effect of diltiazem and prevention of aneurysm formation. Hypertension.2014;63:e12-13.

Tsuda K, Samuelsson AM, Clark J, Rudyk O, Schattock MJ, Bae SE, South T, Pombo J, Redington K, Uppal E, Coen CW, Poston L, Tayler PD. Role of hyperleptimemia in the regulation of blood pressure and cardiac function. Hypertension.2014;63:e1-2.

Tsuda K: Alsmadi O, Melhem M, Hebbar P, Channanath A, Thareja G, John SE, Alkayal F, Behbehani K, Thanaraj TA. Leptin and nitric oxide in blood pressure regulation in humans. Am J Hypertens. 2014;27:1428-1430.

Tsuda K, Tanahashi K, Akazawa N, Maeda S. Aerobic exercise and endothelial function in pre- and postmenopausal women. Am J Hypertens. 2014;27:989-

990.

Tsuda K, Zhou JP, Kuang DB, Chen XP. Asymmetric dimethylarginine and DDAH1 transcript vatiants in cardiovascular and cerebrovascular diseases. Am J Hypertens. 2014;27:497-499.

Tsuda K: Letter regarding article, Plasminogen activator inhibitor-1 antagonist TM5441 attenuates N-omega-nitro-L-arginine methyl ester-induced hypertension and vascular senescence. Circulation. 2014;130:e83.

Tsuda K, Kim J, Heo JH. Letter regarding article, Serum alkaline phosphatase and phosphate in cerebral atherosclerosis and functional outcomes after cerebral infarction. Stroke. 2014;45:e46-47.

Tsuda K: Role of adipokines in the regulation of endothelial function and membrane fluidity in hypertension: an electron spin resonance study-. J Jpn Coll Angiol. 2014;54:123-127.

(eLetters)
Tsuda K: Bradykinin and sympatholytic action of angiotensin converting enzyme inhibitor in prenatally programmed hypertension. Hypertension. eLetters, published on-line, January 15, 2014.

Tsuda K: Sympatho-inhibitory action of calcitonin gene-related peptide in angiotensin II-induced hypertension. Hypertension. eLetters, published on-line, April 22, 2014.

Tsuda K: Central action of neuropeptide Y and its contribution to sympathetic nerve activity regulation in prenatal hypoxia. Hypertension. eLetters, published on-line, November 14, 2014.

学会発表

（シンポジウム）

津田和志：ここまで進歩した脈管の基礎研究：電子スピン共鳴からみた高血圧ならびにメタボリックシンドロームの細胞膜機能異常と微小循環障害.
第55回日本脈管学会総会シンポジウム. 倉敷.　2014.10

（一般演題）

谷口典正, 金井成行：肩こりの評価－筋弾力による客観的検討－第2報－, 第87回日本産業衛生学会, 岡山, 2014.5

金井成行：疼痛に対する磁気治療の経験 －サーモグラフィを用いて－, 日本サーモロジー学会, 第 31 回大会, 大阪, 2014.6

織田育代, 金井成行：顔の運動が効果的である顔面部皮膚表面温度の検証, 日本サーモロジー学会 第 31 回大会, 大阪, 2014.6

谷口典正, 金井成行：磁気が酸素化ヘモグロビン（Hb）濃度に及ぼす効果, 第44回日本慢性疼痛学会, 横浜, 2015.2

鍵弥朋子, 伊藤俊治, 畑島紀昭, 櫻井威織, 櫻井悠加, 椎崎和弘,畑村育次：副甲状腺関連遺伝子Pspは精子形成を支配する, 第37回日本分子生物学会年会, 横浜, 2014.11

和気秀文, 高岸美和, グホサビン, 向阪　彰, 前田正信：結節乳頭核―孤束核経路は昇圧反応を惹起する, 第120回日本解剖学会総会・全国学術集会　第92回日本生理学会大会合同大会, 神戸, 2015.3

井口　理, 國部雅大, 渡邊有実, 内田靖之, 下河内洋平：異なる足関節角度と床面の安定性の変化が片脚立ち中の足関節動揺性に与える影響, 第69回日本体力医学会大会, 長崎, 2014.9

井口　理, 天野文貴, 奥田真人, 長塩達也, 西野悟史, 渡辺泰平, 下河内洋平：異なる足関節位置と床面の安定性の変化による片脚開眼起立時における足関節トルク発揮度合の相違, 第23回日本柔道整復接骨医学会学術大

会，東京，2014.11

渡辺泰平，下河内洋平，天野文貴，奥田真人，長塩達也，西野悟史，井口　理：片脚起立時の足圧中心の軌跡によって足関節動揺性は適切に評価できるか？，第23回柔道整復接骨医学会学術大会，東京，2014.11

石野レイ子、兒嶋章仁、岩井恵子、相澤慎太、五十嵐純：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討
―運動支援による運動の成果と認識の変化から―，日本健康心理学会第27回大会，沖縄，2014.11

Kanai.S. Orita I：Effects of facial exercises for anti-aging, The Combined Academic Conference of the 18th Biennial Congress of Asia Pacific Orthopaedic Association（APOA），Pattaya Thailand, 2014.10

Tsuda K: Urinary albumin excretion and membrane fluidity of red blood cells in hypertensive and normotensive subjects: an electron spin resonance study.
The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology. May, 2014, Tokyo, Japan.

Tsuda K: Resistin is associated with reduced kidney function and impaired membrane fluidity of red blood cells in hypertensive and normotensive men.
The 14th Asian Pacific Congress of Nephrology. May, 2014, Tokyo, Japan.

Tsuda K: Retinol-binding protein 4 predicts membrane microviscosity of red blood cells and microcirculatory dysfunction in hypertension via inflammation and endothelial dysfunction.
The 78th Annual Scientific Meeting of the Japanese Circulation Society. March, 2014, Yokohama, Japan.

Tsuda K: Associations of arterial stiffness with membrane microviscosity of red blood cells and endothelial dysfunction in hypertension –an electron spin resonance study.
The 78th Annual Scientific Meeting of the Japanese Circulation Society. March, 2014, Yokohama, Japan.

Tsuda K: Chronic kidney disease and plasma cystatin C levels are closely associated with impaired membrane fluidity in hypertension.
The 37th Annual Scientific Meeting of the Japanese Society of Hypertension.
October, 2014, Yokohama, Japan.

平成26年度　臨床検査学ユニット研究活動状況

1．ユニットメンバー

若山　育郎、市村　輝義、花井　淳、後藤　きよみ、鍵弥　朋子、竹田　知広、大瀧　博文、荒川　裕也

2．平成25年度活動報告

以下の各テーマに沿って、個人およびグループ研究（学外との共同研究含む）を行った。

＜若山育郎＞

・鍼灸の診療ガイドラインに関する研究

各学会による診療ガイドラインに鍼灸の記載があるかどうかを調査したうえで、記載があるものについては、最新のEBMに基づいたものであるかを検証する。

・全日本鍼灸学会学術大会の発表論文の出版バイアスに関する研究

全日本鍼灸学会学術大会で発表された論文がその後どの程度実際に雑誌等に掲載されているかを調査する。

＜市村輝義＞

・認知症（予防）の診断と臨床検査に関する研究と啓蒙

認定認知症領域検査技師（認知症予防学会＆日本臨床衛生検査技師会）の資格を獲得し、認定認知症領域検査技師認定試験ワーキンググループ委員および認定認知症領域検査技師講習会委員長として企画・運営をし、その啓蒙をした。（次年度継続）

認知症診断のための臨床検査（アミロイドβ、リン酸化タウ、頸動脈エコー、光トポグラフィーなど）の有用性について確認し、その教育をした。（次年度継続）

＜花井　淳＞

・各種疾患の臨床病理学的研究

経験した症例の病理学的検索を行い報告した。

＜後藤きよみ＞

・超音波診断装置を用いた検査の応用

組織エラストグラフィを応用した筋肉組織の硬度評価に関する研究

＜鍵弥朋子＞

・梅等の食品中成分が生体に与える影響について（和歌山医大食品機能講座との共同研究）

消化器細胞に与える影響について、実験継続中である。

・副甲状腺関連遺伝子についての研究

第37回日本分子生物学会年会にて発表した。

＜竹田知広＞

・血友病インヒビター新規免疫寛容療法の研究（奈良県立医科大学小児科との共同研究）

・蕁麻疹の病態と血液凝固の関わりについての研究

allergy internationalに投稿した。（広島大学皮膚科との共同研究）

・喘息の病態と血小板についての研究

American Academy of Asthma Allergy and Immunology年次総会にて報告した。

（国立成育医療研究センター研究所　免疫・アレルギー研究部との共同研究）

＜大瀧博文＞

・トリプトファン代謝と感染免疫に関する研究

ウイルス性劇症肝炎マウスモデルおよびマウス敗血症モデルにおけるトリプトファン代謝の役割をBBA誌およびInfect Immun誌に報告した（岐阜大学との共同研究）。

・臨床的に稀に分離される菌血症起炎菌の臨床背景における検討

Leptotrichia trevisaniiにおける菌血症例を日本臨床微生物学雑誌に報告した（岐阜大学病院との共同研究）。

・細菌の簡易同定および薬剤耐性菌検査の効率化における検討

発色剤および抗菌薬含有培地を用いた簡易同定法および薬剤耐性菌検出の効率化について基礎検討および前向き検討を実施した（岐阜大学病院との共同研究）。

＜荒川裕也＞

・自己免疫性甲状腺疾患と病態感受性遺伝子における一塩基多型の探索

昨年度より継続中。平成27年度中に投稿予定。（大阪大学医学系研究科　予防診断学研究室と共同研究）

・副甲状腺関連遺伝子pspの分子生物学的研究

in situ ハイブリダイゼーションに用いるプローブ作製のためにクローニングを行った。

・ALS多発地域における健康診断検体を用いた新規検査マーカーの検索

健康診断を行い、検体採取を行った。今後、この検体を用いて検査マーカーの検索を行っていく予定である。

平成26年度臨床検査学ユニット業績

＜原著＞

若山育郎. パーキンソン病と付け足し漢方. 和漢薬. 2014; 64（4）: 13-14.

下市善紀, 春木淳二, 若山育郎.「腰痛患者に対する鍼治療　日本で実施されたRCTのシステマティックレ

ビュー」に対するご指摘へのお返事. 全日本鍼灸学会雑誌. 2014; 64（3）: 162-170.

若山育郎, 形井秀一, 山口　智, 篠原昭二, 山下　仁, 小松秀人. 病院医療における鍼灸 -鍼灸師が病院で鍼灸を行うために. 日本東洋医学雑誌. 2014; 65（4）: 321-333.

増山祥子, 若山育郎. WFAS Houston 2014 Acupuncture & Integrative Medicine Conference 参加報告. 鍼灸OSAKA. 2014; 30（3）: 122-124.

若山育郎,石崎直人,斉藤宗則,鶴　浩幸,深澤洋滋,増山祥子,山田昌紀,西村理恵. 2014WFAS鍼灸国際シンポジウム（米国・ヒューストン）参加報告－2016WFAS年次大会のつくば国際会議場での開催が決定－.全日本鍼灸学会雑誌. 2015; 65（1）: 36-46.

Wakasa T, Nakamura M, Kagiya T, Taniguchi E, Sakurai T, Kakudo K. Loss of cellular cohesion in cytology composes a special subgroup of breast tumors - analysis of 37 cases. Acta Cytol. 2014; 58（1）: 89-95.

Kono R, Nomura S, Okuno Y, Nakamura M, Maeno A, Kagiya T, Tokuda A, Inada K, Matsuno A, Utsunomiya T, Utsunomiya H. 3,4-Dihydroxybenzaldehyde Derived from Prunus mume Seed Inhibits Oxidative Stress and Enhances Estradiol Secretion in Human Ovarian Granulosa Tumor Cells. Acta Histochem Cytochem. 2014; 28; 47（3）: 103-12.

Sakurai Y, Takeda T. Acquired hemophilia A: a frequently overlooked autoimmune hemorrhagic disorder. J Immunol Res. 2014: 320674. doi: 10.1155/2014/320674. Epub 2014 Mar 24.

Sakurai Y, Morioke S, Takeda T, Takahagi S, Hide M, Shima M. Increased thrombin generation potential in patients with chronic spontaneous urticaria. Allergol Int. 2015; 64（1）: 96-8.

Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Kynurenine production mediated by indoleamine 2,3-dioxygenase aggravates liver injury in HBV-specific CTL-induced fulminant hepatitis. Biochim Biophys Acta. 2014; 1842: 1464-1471.

Hoshi M, Osawa Y, Ito H, Ohtaki H, Ando T, Takamatsu M, Hara A, Saito K, Seishima M. Blockade of indoleamine 2,3-dioxygenase reduces mortality from peritonitis and sepsis in mice by regulating functions of CD11b+ peritoneal Cells. Infect Immun. 2014; 82: 4487-4495.

大瀧博文，大楠清文，中山麻美，米玉利準，安藤航平，宮崎崇，太田浩敏，古田伸行，渡邉珠代，伊藤弘康，村上啓雄，清島　満. 中心静脈ライン関連血流感染の判定における細断法を用いた中心静脈カテーテル先端培養の菌量および血液培養結果に関する後方視野的な検討. 臨床微生物迅速診断研究会誌. 2014; 24: 39-43.

米玉利準, 大瀧博文, 中山麻美, 安藤航平, 宮崎　崇, 太田浩敏, 古田伸行, 渡邉珠代, 兼村信宏, 伊藤弘康, 大楠清文, 村上啓雄, 清島　満. 血液培養好気ボトルよりLeptotrichia trevisaniiを分離した多発性骨髄腫患者における菌血症の1例. 日本臨床微生物学雑誌, 2014; 24: 201-206.

＜発表＞

市村輝義. 臨地実習の課題と部会・協議会としての取組み. 日本臨床検査教育協議会近畿中国四国部会. 天理市.2014.6

小嶋啓子, 花井　淳. 上行結腸に発症した炎症性線維芽細胞性腫瘍の一例. 第103回日本病理学会総会. 広島国際会議場. 広島市. 2014.4.

花井　淳, 小嶋啓子. TUR後に発症した高度異形成を伴う慢性膀胱炎の一例. 第19回泌尿器腫瘍フォーラム. 市立堺病院. 堺市. 2014.12.

鍵弥朋子, 伊藤俊治, 畑島紀昭, 櫻井威織, 櫻井悠加, 椎崎和弘, 畑村育次. 副甲状腺関連遺伝子Pspは精子形成を支配するParathyroid gland related gene, Psp plays important roles in spermatogenesis. 第37回日本分子生物学会年会. 東京. 2014.11.

竹田知広, 海野浩寿, 森田英明, 斎藤博久, 松本健治, 松田明生. 血小板は恒常的に活性型IL-33蛋白を発現する. 第26回日本アレルギー学会春季臨床大会.京都.2014.4.

Takeda T, Unno H, Morita H, Arae K, Sugie M, Futamura K, Nakae S, Saito H, Matsumoto K, Matsuda A, Matsuda A. Platelets constitutively express interleukin-33 protein. American Academy of Asthma Allergy and Immunology Annual Meeting. Huston. USA. 2015.2.

Nakayama A, Ohkusu K, Ohtaki H, Furuta N, Ito H, Seishima M. Cost-Effective and rapid detection of Extended-spectrum β-Lactamase（ESBL）-Producing Gram-negative bacilli directly from clinical specimens: An improved algorithm for identification of Gram-negative and ESBL-Producing bacilli using CHRO Magar Orientation/ESBL 54th Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy, Washington, DC, USA. 2014. 9.

太田浩敏, 宮崎　崇, 大瀧博文, 中山麻美, 米玉利準, 安藤航平, 古田伸行. ICT活動による適切な喀痰検体提出への取り組み. 第62回日本医学検査学会総会. 新潟市. 2014.5.

荒川裕也. DNMT1, DNMT3, MTFR, MTRR遺伝子の多型が全ゲノムのメチル化と自己免疫性甲状腺疾患の予後に及ぼす影響の解析. 第9回日本臨床検査学教育学会学術大会. 東京. 2014.8.

城尾可奈, 荒川裕也, 野口依子, 岡崎葉子, 中町祐司, 林　伸英. コリンエステラーゼ活性が極低値であった1症例の遺伝子解析. 第54回日臨技近畿支部医学検査学会. 神戸. 2014.9.

＜その他＞

若山育郎. 話題の臨床漢方－パーキンソン病など. 京都漢方研究会. 京都薬科大学. 京都市. 2014.9

若山育郎. パーキンソン病と漢方. 第54回癒師のための北摂漢方フォーラム「右近塾」. 大阪医大健康科学クリニック. 高槻市. 2014.10

市村輝義. 認知症予防の基礎知識. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会　認知症予防講座. 奈良市. 2015.3.

市村輝義. 東西両医学・医療の融合「心電図など“生体検査”で何がわかるか」.第29回関西医療大学公開講座. 2014.10.

後藤きよみ. 東西両医学・医療の融合「画像診断検査（エコー検査）で何がわかるか。」第29回関西医療大学公開講座. 2014.10

鍵弥朋子. 病理検査と細胞検査. 平成26年度和臨技新人オリエンテーション. 和歌山市. 2014.4.

大瀧博文. 近畿地区の技師会活動状況と教育現場のこれから. 岐阜県臨床検査技師会・第5回臨床微生物部門研修会. 岐阜. 2014.12.

＜受賞＞

竹田知広. 第11回（2014年度）日本アレルギー学会学術大会賞

平成26年度　基礎看護学ユニット研究活動状況

A. 構成メンバー

辻　　幸代、中納　美智保、和田　幸子
浅霧　博美、髙木　みどり、松下　直子
山根木　貴美代

B. 研究の計画と概要

このユニットは、看護ケアの開発や改良に寄与することを目的とした基礎的研究及び看護基礎教育への貢献を目的とした看護技術に関する研究を研究課題としている。

本年度も、昨年度より継続して実施している足浴および湿性温罨法がもたらす生体への影響について研究を行った。今後は、ユニットメンバー全体で共同して行う研究を実施したいと考えている。

C. 研究費獲得状況

平成26-28年度科学研究費補助金　基盤研究（C），中納美智保，辻　幸代，「皮膚洗浄法による温熱刺激・機械的刺激・化学的刺激が皮膚バリア機能に及ぼす影響」（研究課題番号：26463225）

D. 研究業績

著書

平澤久一監修，中納美智保他：表情看護のすすめ，メディカ出版，2014.10，29-34

原著

中納美智保，松下直子，山根木貴美代，永井芳子，辻　幸代：足浴がもたらす肩部の温度・血流・筋硬度の変化，日本看護学会論文集，看護総合，44号，48-51，2014

学会発表

中納美智保、辻　幸代、松下直子、山根木貴美代：後頚部への湿性温罨法が肩部・末梢の皮膚温と自律神経活動に及ぼす影響，日本健康科学学会第30回学術大会、浜松，2014.9

中納美智保、辻　幸代：座位での足浴が末梢の皮膚温および自律神経活動に及ぼす影響，第34回日本看護科学学会学術集会，名古屋，2014.11

その他

辻　幸代：看護部研修会「看護研究」，奈良県立医科大学附属病院，2014.5.17,6.21,10.18,2.14

辻　幸代：奈良県看護協会研修会「新人看護職員研修（実地指導者研修）」，奈良県看護研修センター，2014.5.30

辻　幸代：認定看護管理者教育課程ファーストレベル「看護情報論」，奈良県看護研修センター，2014.7.28，8.11

辻　幸代：保健師助産師看護師実習指導者講習会「看護基礎教育の今後の方向性」，和歌山県県民文化会館，2014.7.18,7.25

辻　幸代：「実地指導者研修」，日本赤十字社和歌山医療センター，2014.6.6

辻　幸代：看護研究指導，西奈良中央病院，2014.4 ～ 12

辻　幸代：看護研究指導，済生会中和病院，2014.5 ～ 12

和田幸子：大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会「基礎・成人・老年看護学実習」2014.6.17,10.22,2015.2.10

中納美智保：大阪府専任教員養成講習会「看護論演習」，大阪府看護協会ナーシングアート大阪，2014,5 ～ 8

中納美智保：看護研究指導、大阪府済生会富田林病院、2014.6.14

平成26年度　臨床看護学ユニット研究活動状況

構成メンバー

石野　レイコ、井村　弥生、板東　正巳、
北得　美佐子、築田　　誠、兒嶋　章仁、宇田　賀津、
紅林　祐介、伊井　みず穂、

研究活動の概要

ユニット研究は、個人研究、共同研究、科研費採択による研究である。

共同研究としては昨年に引き続き、「術後患者の観察能力習熟への教育方法の検討」をテーマに、平成25年度～28年度予定で、研究活動を実施している。

科研費採択による研究は、科研研究補助費（挑戦的萌芽研究）課題番号23660051（石野レイ子）平成23年～25年度採択の研究報告を行った。

著書

石野レイ子：呼吸器疾患，実務者研修課程テキスト７―介護に関わるこころとからだ―，小池将文監修，第2版第1刷，pp129-137，日本医療企画，2014.

井村弥生，板東正己ほか編著，平澤久一監修：表情看護のすすめ　第2章　表情看護　理論編，P74-81，メディカ出版，2014.

板東正己，平澤久一，井村弥生他：表情看護のすすめ第2章表情看護理論編 p90-p99, メディカ出版，2014.10.1

学術論文

1. 森岡郁晴, 宇田賀津, 有馬美保他：梅干し製造工場における冷水作業が循環機能に及ぼす影響, 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 2014, 第10巻, 25-30.
2. 鹿島英子，吉村牧子，吉本和樹，大橋純子，森永聡美，増田恵美，伊井みず穂，井村弥生，和田幸子，兒嶋章仁，築田　誠，石野レイ子，岩井恵子：高齢者SP（Simulated Patient）養成の課題，関西医療大学紀要，8，20-26，2014.
3. 築田　誠，兒嶋章仁，伊井みず穂，石野レイ子：成人の健康づくりへの関心と運動習慣確立の関連要因の検討，関西医療大学紀要，8，27-33，2014.
4. 川島基子，吉野　孝，紀平為子，伊井みず穂，岡本和士，江上いすず，藤原奈佳子，石川豊美，入江真行：新規料理登録機能を持つ高齢者を対象にした栄養管理システムの開発と評価，情報処理学会論文誌56巻，1-12，2015.
5. 紅林佑介，原田祐輔，芳賀恵美子：複数の認知機能領域の評価に基づいた看護援助により外用薬塗布の継続に繋がった地域で生活する統合失調症患者の一例，日本リハビリテーション看護学会誌，2015，4巻1号，47-53.
6. 紅林佑介：入院中の慢性期統合失調症患者における入院期間と認知機能との関連，日本リハビリテーション看護学会誌，2015，4巻1号，18-25.
7. 紅林佑介：精神科病院に長期入院している統合失調症患者の認知機能に関する研究，日本保健福祉学会誌，2015，21巻2号.

学会発表

1. 石野レイ子，伊井みず穂，兒嶋章仁，岩井恵子，相澤慎太：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討「支援プログラム参加者の認識の分析」，第８回日本慢性看護学会学術集会，久留米，2014年5月.
2. 紅林佑介，大滝純一：統合失調症患者における属性要因と認知機能の関連性～外来患者と入院患者についての調査～，第110回日本精神神経学会学術総会，横浜，2014.6.
3. 北得美佐子，新川さゆり，高　峰美：緩和ケア病棟で行う遺族ケア―『旅立ち入浴』に参加した遺族の経験―，第19回日本緩和医療学会学術集会，神戸，2014.6.
4. 松永真実，北得美佐子：造血幹細胞移植看護における看護師の感情労働の実態調査 －看護師の感情労働測定尺度（Emotional Labor Inventory for Nurse：ELIN）による実態調査－，第19回日本緩和医療学会学術集会，神戸，2014.6.
5. 井村弥生,伊井みず穂：看護大学生の食事習慣による栄養摂取状況　－食物頻度調査と食習慣アンケート－，第40回日本看護研究学会学術集会，奈良，2014.8.
6. 伊井みず穂，井村弥生：看護大学生の実習期間中と期間外での食事摂取状況の変化と影響する関連因子，日本看護学教育学会第24回学術集会，千葉，2014.8.
7. 井村弥生：テキストマイニングを用いた急性期看護学教育の研究の動向と課題について，第24回日本看護学教育学会学術集会，千葉，2014.8.
8. 築田　誠，北得美佐子，山田　忍，岩井恵子，石野

レイ子：模擬患者（SP）を導入したロールプレイング演習のプログラムの検討，－糖尿病患者への教育指導演習の評価，第24回日本看護学教育学会学術集会，2014.8.

9.佐田順子，井村弥生：口腔ケアの現状と意識調査 看護師自身の口腔衛生と患者に施す口腔ケアへの関係性，第45回日本看護学会学術集会，神奈川，2014.10.

10.阿部香織，井村弥生：看護師の栄養スクーリング評価と介入に関する実態調査，第45回日本看護学会学術集会　急性期看護，神奈川，2014.10.

11.井村弥生　伊井みず穂　石野レイ子：看護学生の術後観察の傾向―眼球運動測定装置（Tobiiグラス）使用による看護学生と看護師との比較―，第34回日本看護科学学会学術集会，愛知，2014.11.

12.伊井みず穂，紀平為子，川島基子，吉野　孝，岡本和士，江上いすず，藤原奈佳子，石川豊美，入江真行：スレート型PC（iPad）を用いた栄養管理システムの精度及び妥当性の検討，第73回日本公衆衛生学会総会，2014．11.

13.築田　誠，多留ちえみ，福田敦子，兒嶋章仁，川島孝太，宮脇郁子：一般病棟看護師の人工呼吸器ケア看護実践プロセス・チェックリストの内容妥当性の検討，第34回日本看護科学学会学術集会，名古屋，2014.11.

14.石野レイ子，伊井みず穂，兒嶋章仁，岩井惠子：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討―運動支援の成果と認識の変化―，第34回日本看護科学学会学術集会，名古屋，2014.11.

15.石野レイ子，兒嶋章仁，岩井惠子，相澤慎太，五十嵐　純：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討　運動支援による運動の成果と認識の変化から，日本健康心理学会第27回大会，沖縄，2014.11.

16.北得美佐子，新川さゆり，築田　誠，宇田賀津，高峰美：死後の湯灌を経験した遺族の思いについての調査 －改善点に関する自由記述から得られた示唆－，第29回日本がん看護学会学術集会，横浜，2015.2.

17.福留由紀子，北得美佐子：院内マニュアル導入後における抗がん剤の曝露対策の普及に向けた取り組み，第29回日本がん看護学会学術集会，横浜，2015.2.

その他

1.石野レイ子　井村弥生：生長会　ラダー研修　看護研究の実際，2014.6 ～ 2015,1.

2.板東正己：高校生殺人事件を精神力動的視点から考える，関西地区力動精神看護研究会，クレオ大阪 2014.4.19.

3.板東正己：大阪府立刀根山高等学校　出張講義 看護医療系の講義概要・職業との関連について 2014.6.19.

4.板東正己：ワークショップ　臨床に活かす表情看護 第24回日本精神保健看護学会　横浜　2014.6.21.

6.紅林佑介：シンポジスト「通信制保健室のこれからー通信制高校で学ぶ生徒の実態から支援のあり方を探るー」，第6回　つながろう！通信制保健室研修会，静岡，2014.8.2.

7.清水佐智子，北得美佐子，岸野　恵，宇多　雅：死を教えることを恐れていませんか？最期まで患者に寄り添える看護者の育成をめざして，第24回日本看護学教育学会学術集会　交流セッション，2014.8.

8.北得美佐子，ELNEC-J（End-of-Life Nursing Education Consortium Japan）コアカリキュラム看護師教育プログラム　ファシリテータ，大阪府看護協会，2014.8.30 ～ 31.

9.紅林佑介：はらからの家福祉会　勉強会（当事者を対象とした勉強会）講師，「解離症」「統合失調型パーソナリティ障害」「うつ病を抱える人の接し方」，はらからの家福祉会，東京，2014.9.3.

10.井村弥生：手塚山高校　看護の可能性，2014．10.

11.紅林佑介：講演会「静岡県立静岡中央高校通信制課程　心の教育講演会」，静岡県立静岡中央高校通信制課程，静岡，2014.10.26.

12.築田　誠：第3回日本光電循環器病研究助成　研究発表，大阪，2014.12.

科研費および研究費助成採択による研究

1.石野レイコ：H23 ～ H25科研報告書「成人の運動習慣を継続するための支援モデルの開発」の報告

2.北得美佐子，野田　京，森田達也，宮下光令：遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究，日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団研究事業 J-HOPE3付帯研究分担研究者，2013 ～ 2018.

平成26年度　生涯発達看護学ユニット研究活動状況

A．構成メンバー

田中　静枝、平尾　恭子、津島　和美、室谷　牧子、
家曽　美里、三宅　美恵子、池内　里美
小原　裕子、濱田　亜意子

B．ユニットの研究活動について

テーマ「乳児家庭全戸訪問事業の課題と支援に関する研究」

概要：乳児家庭全戸訪問事業は生後4か月までの児童のいる家庭を訪問し、母子の心身状況の把握を行い、子育てに関する情報提供や必要な支援等を実施するものであり児童虐待及びその予備軍のスクリーニングの意味を持つ重大な政策である。

しかし、全戸訪問を実施している市町村には格差があり、訪問者も看護職等の専門職以外に母子保健推進員や民生委員、子育て経験者等様々で、要支援家庭のアセスメントや実際の支援においても違いがある等、効果的な訪問が行われていないことが課題としてあげられる。そこで、本研究では、大阪府と和歌山県における乳児家庭全戸訪問事業の実態および課題を明らかにするため、乳児家庭全戸訪問事業を行う市町村担当課の職員および母子保健推進員、4か月児の保護者を対象に質問紙調査を行い、乳児家庭全戸訪問事業の課題と養育者の事業に対するニーズおよび乳児期早期に必要な支援内容を検討する。

進捗状況：質問紙の回収が終了し、結果を検討中である。

C．研究費獲得状況

平成25、26年度学術研究助成基金助成金　若手研究B　代表　家曽美里
適時かつ十分な医療アクセスに向けた、乳幼児を育てる女性の受診行動と関連事象の解明

D．研究業績

原著論文

室谷牧子：認知症の人への選択の機会を提供する意味－グループホーム入居者の表情・行動を手がかりにした介入研究－,甲南女子大学大学院看護学研究科修士論文集,2014

学会発表

田中静枝,三宅美恵子：母乳育児教育「母乳育児の探求」による実践能力の評価,
－看護学生のアンケート調査より－ 第29回日本母乳哺育学会,横浜,2014.10

津島和美：色彩表現からみた感覚的、感情的反応の特性―看護学生の感覚的、感情的反応を捉える試み－,日本人間性心理学会第33回大会,愛知,2014.10

室谷牧子：包括的に見えてしまう、多職種が連携してしまう、今、話題の『見える事例検討会』ファシリテーター,第5回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会特別企画,岡山, 2014.10

室谷牧子,臼井キミカ：認知症の人の自己決定を支援する日常的な倫理的ケア－グループホーム入居者の表情・行動を手がかりにした介入研究－,第15回日本認知症ケア学会大会,東京,2014.5

山本恵,臼井キミカ,木塚理恵子,室谷牧子：介護付有料老人ホームにおけるグループ回想法の実施と評価－,第15回日本認知症ケア学会大会,東京,2014.5

山川みやえ,竹内志穂,恩塚浩史,岡村卓哉,室谷牧子他:若年認知症の日常的ケア支援データベースシステムの開発,日本認知症ケア学会2014年度関西地域大会,大阪,2014.9

家曽美里：乳幼児を育てる専業主婦の対処行動とその影響要因に関する質的研究,
第55回日本母性衛生学会総会・学術集会, 千葉, 2014.9

家曽美里：乳幼児を育てる専業主婦の体調不良時の対処行動に関する概念枠組みの構築, 第34回日本看護科学学会学術集会, 名古屋, 2014.11

上田佳世,大寺祥佑,家曽美里,中山健夫：院内助産の低リスク出産に関する質指標（Qualty Indicator)開発：ガイドラインに基づくエビデンスレビューと修正デルファイ法を用いて, 第29回日本助産学会, 東京, 2014.3

濱田亜意子,津島和美：看護学生の子どもに対する意識の一考察　－学内演習の試み－,第45回日本看護学会看護教育,新潟,2014.9

社会活動・その他

室谷牧子：指導者のための認知症セミナー「認知症医療・ケアにおけるこれからの役割と活動」講師,(株)母子保健事業団,ノバルティスファーマ共催,2014.7

室谷牧子：大阪府介護支援専門員協会堺支部多職種事例検討会講師,ファインプラザ大阪,2014.10

室谷牧子：大阪市認知症支援関係者連絡会認知症事例検討会ファシリテーター,大阪市社会福祉協議会主催,2014.10

室谷牧子：大阪市平野区高齢者支援ネットワーク連絡会専門職向け研修事例検討会ファシリテーター,大阪市平野区医師会主催,2015.1

室谷牧子：若年性認知症家族とサポーターの会研修会講師,堺市, 2014.9,2014.11

室谷牧子：見える事例検討会ファシリテーター養成講座サポートファシリ,藍野病院主催,2015.2(2日間)

室谷牧子：堺・若年性認知症支援ネットワーク認知症ケア研究会事務局、隔月１回多職種協働ワーキング開催

室谷牧子：見える事例検討会チーム堺事務局,隔月１回多職種事例検討会開催

津島和美：カラーワークショップ,大阪狭山市,2014.7 ～11

田中静枝：第2回　大阪看護学会演題査読

田中静枝：第46回　日本看護学会-精神看護-学術集会　企画等

池内里美：看護教育実践臨床研究会　大阪支部研修会企画担当

平成26年度　地域・老年看護学ユニット研究活動状況

A. 構成メンバー

岩井　惠子、増田　惠美、鹿島　英子、森永　聡美、吉村　牧子

B. 研究活動

1．研究費執行の経過

ユニットの研究は、共同研究費、科研費、個人研究費による。

共同研究費は、「SP（Simulated Patient）参加型看護教育システムの構築」として平成25年度～26年度で採択され、研究を継続した。

科研費による研究は、挑戦的萌芽（課題番号24660067岩井惠子）、「超限界集落で生活をする高齢者の生活実態と保健医療的支援に関する研究」（平成24～26年）を継続した。

2．共同研究の経過

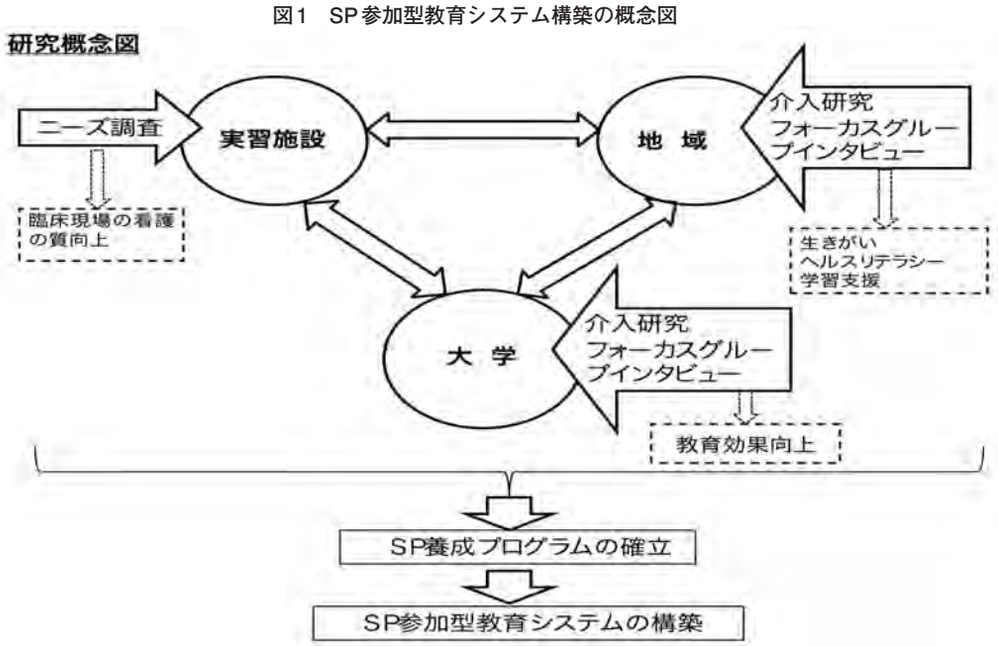
平成25年度より「SP参加型看護教育システムの構築」として研究を開始し、平成26年度は第2期くまとりSPを7名（男性1名、女性6名）養成した（表1）。

表1　くまとりSP第2期生養成講座

	月 日	曜日	時 間	内 容		講 師
pre	3 12	水	10 00 11 30		SP SP	岩井
1	4 7	月	13 00 15 00	養成講座①	コミュニケーションとは	井村
2	4 21	月	13 00 16 00	②	SP	藤崎
3	5 12	月	13 00 16 00	③	フィードバック 演習)	藤崎
4	5 21	水	14 30 16 00	④	SP	水越
5	6 4	水	10 00 11 30	⑤	DVD	鹿島
6	6 21	土	10 00 12 00	⑥	演習 役作り・フィードバック)	岩井
7	7 5	土	10 00 12 00	⑦	演習 役作り・フィードバック)	岩井
8	7 10	木	13 00 14 00		これからの活動	岩井
				修了式	学長より認定証授与	吉田学長

さらにSPの活動の拡大をめざし、介護福祉士養成校においての演習への参加およびそのためのシナリオ作成、平成27年度6月に予定している、実習病院での新人看護師教育での演習のためのシナリオ作成を行った。SP参加型教育システム構築の概念図（図1）に示すように、SPが単に保健看護学部の演習だけで活躍するのでなく、地域、実習施設へと具体的に活動範囲が広がった。これはシステムの構築という意味では、大きな前進であった。今後はそれぞれでの活動の教育的効果を検証するとともに、実習施設や地域との連携を図り、さらにSP参加型教育システムの構築を進めていく。

図1　SP参加型教育システム構築の概念図



3．活動内容

表2

表2　2014年度　くまとりSP活動状況

回数	月　日	曜日	内　　容
1	4月09日	水	SP研究会
2	5月14日	水	SP研究会
3	5月29日	木	保健看護学科3年生慢性看護論演習 糖尿病の教育入院患者への指導
4	6月11日	水	SP研究会
5	7月09日	水	SP研究会
6	7月18日	金	第46回日本医学教育学会参加★
7	8月05日	火	堺東高校体験授業（高校生との交流）
8	9月15日	月	第2回関西SP交流会に参加★
9	9月17日	水	SP研究会（2期生初参加）
10	9月26日	金	演技練習
11	10月01日	水	演技練習
12	10月03日	金	保健看護学科2年生老年看護方法論演習
13	10月10日	金	入院患者からの情報収集（シナリオ4種類）
14	10月15日	水	演習についてのFGI (Focus Group Interview)
15	11月05日	水	SP研究会
16	12月10日	水	SP研究会
17	1月14日	水	大阪社会福祉専門学校にて演習参加（シナリオ3種）
18			SP研究会
19	2月18日	水	SP研究会
20	3月11日	水	SP研究会

★ SPのみ参加

C. 研究業績

１．原著

鹿島英子、増田恵美、森永聡美、吉村牧子、岩井恵子：高齢者SP（simulated Patient）の養成の課題，関西医療大学紀要，vol 8，2015.

２．学会発表

岩井恵子、吉村牧子、紀平為子他：認知症とともに超限界集落で暮らす高齢者支える要因の分析，日本老年看護学会第19回学術集会，2014.6.

吉村牧子、増田恵美、大橋純子、鹿島英子、吉本和樹、森永聡美、岩井恵子：高齢者ＳＰ（Simulated Patient）の自覚・やりがいの形成について，日本老年看護学会第19回学術集会，2014.6.

岩井恵子：超限界集落の成り立ちと存続の要因－和歌山県山間村落の構造と生活の変遷－，日本老年社会科学会第56回大会，2014.6.

石野レイ子、伊井みず穂、岩井恵子他：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討－参加者の認識－，日本慢性看護学会第8回学術集会，2014.7.

築田　誠、岩井恵子、石野レイ子他：模擬患者を導入したロールプレイング演習プログラムの検討，日本看護学教育学会第24回学術集会，2014.7.

石野レイ子、兒嶋章仁、岩井恵子他：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討－運動の成果－，日本健康心理学会第27回大会，2014.11.

岩井恵子、吉村牧子、紀平為子他: 超限界集落における住民の生活実態について（第3報），第34回日本看護科学学会学術集会.2014.11.

石野レイ子、兒嶋章仁、岩井恵子他：成人の運動習慣を継続するための支援プログラムの検討－運動成果と認識－，第34回日本看護科学学会学術集会.2014.11.

４．その他

岩井恵子：大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会講師，大阪府看護協会，2014年6・10月2014年2月.

平成25年度　関西医療大学　動物実験に関する現況調査票

Ⅰ．動物実験に関する組織

機関長	職名　学長　　氏名　吉益文夫		
事務担当者	職名　学務係　　氏名　松尾沙矢香		
同　連絡先	TEL 072-453-8251	FAX　072-453-0276	e-mail matsuo@kansai.ac.jp
動物実験委員会 委員長	職名　教授　　氏名　樫葉　均		
同　委員	職名　教授　　氏名　中峯　寛和（平成25年前期まで）		
同　委員	職名　教授　　氏名　吉田　仁志		
同　委員	職名　准教授　　氏名　大西　基代		
同　委員	職名　講師　　氏名　深澤　洋滋		

Ⅱ．機関における動物実験の概要

1．動物実験を行う主たる研究分野

■　医歯薬学分野　　□　畜産・獣医学分野
□　生物科学分野　　□　理工学分野
□　その他（　　）

2．年度ごとに使用した実験動物の種類と概数

動　物　種	概　　数				
	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
マウス	134	67	63	44	28
遺伝子改変マウス	−	25	10	4	49
ラット	457	709	1018	646	671
ウシガエル	0	6	6	6	6

3．年度ごとの承認された動物実験計画数

動物実験計画数	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
	10件	9件	7件	6件	6*1件

*1：継続の研究計画、3件を含まない。

４．年度ごとの動物実験に関する教育訓練の受講者数

教育訓練受講者数	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25度
	8人	6人	4人	4*2人	5人

***2：平成24年度の報告において、「5人」と報告していたが「4人」の間違いであったので修正した。**

５．実験動物飼養保管施設の現況

施設の名称	管理者の職・氏名	実験動物管理者の職・氏名 （関連資格・経験年数）	動物種	最大飼養頭数 （概数）
動物実験センター	教授・樫葉均	教授・樫葉均*2 （医学博士、経験年数：動物実験を始めて28年）	マウス ラット ウシガエル	120 60 3

６．特記事項

（動物実験に関連した、機関の特徴や特殊事情）

関西医療大学・動物実験センターの特殊事情

本学における動物飼養施設は動物実験センター、１施設のみである。ここ数年、使用する年間の動物数も600～1000匹程度であり、きわめて小さな施設である。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、動物実験センターの管理・維持等についても、動物実験責任者と動物実験センター長がお互いに協調しながら運営に努めている。

本来、「ウシガエル」は実験動物に含まれないが、本学動物実験委員会では「ウシガエル」についても他の実験動物と同様に取り扱っている。

本学の「動物実験規定」において、動物実験センター主任が実験動物管理者の任に当たることが定められている。実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに相当する者がいない。本学では動物実験センター長がこれを兼任している。

平成25年度　関西医療大学　動物実験に関する自己点検・評価報告書

Ⅰ．規程及び体制等の整備状況

1．機関内規程

1）評価結果

■　基本指針に適合する機関内規程が定められている。

□　機関内規程は定められているが、一部に改善すべき点がある。

□　機関内規程が定められていない。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験規程」

「動物実験センター規程」

「動物実験委員会規程」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

本学は、文部科学省が策定した「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」等に則し機関内規定を適正に定めている。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

2．動物実験委員会

1）評価結果

■　基本指針に適合する動物実験委員会が置かれている。

□　動物実験委員会は置かれているが、一部に改善すべき点がある。

□　動物実験委員会は置かれていない。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験委員会規程」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

「動物実験委員会規程」に則し、本学は動物実験委員会（委員長含め全５名）を適正に設置している。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

３．動物実験の実施体制

（動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告の実施体制が定められているか？）

１）評価結果 ■　基本指針に適合し、動物実験の実施体制が定められている。 □　動物実験の実施体制が定められているが、一部に改善すべき点がある。 □　動物実験の実施体制が定められていない。
２）自己点検の対象とした資料 「動物実験規程」
３）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。） 「動物実験規程」において動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告等の手続きが定められている。それぞれの書類の様式も整えられており、動物実験の実施体制が適正に整備されている。
４）改善の方針、達成予定時期 特に改善すべき点は無いと考えている。

４．安全管理に注意を要する動物実験の実施体制

（遺伝子組換え動物実験、感染動物実験等の実施体制が定められているか？）

１）評価結果 ■　基本指針に適合し、安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められている。 □　安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められているが、一部に改善すべき点がある。 □　安全管理に注意を要する動物実験の実施体制が定められていない。 □　該当する動物実験は、行われていない。
２）自己点検の対象とした資料 「遺伝子組換え実験等安全管理規程」 「遺伝子組換え実験等安全委員会規程」
３）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。） 本学は「遺伝子組換え実験等安全管理規程」および「遺伝子組換え実験等安全委員会規程」により、遺伝子組換え実験等安全委員会を設置し、遺伝子組換え動物実験、感染動物実験等の実施体制を整えている。
４）改善の方針、達成予定時期 特に改善すべき点は無いと考えている。

５．実験動物の飼養保管の体制

（機関内における実験動物の飼養保管施設が把握され、各施設に実験動物管理者が置かれているか？）

１）評価結果

□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正な飼養保管の体制である。

■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

２）自己点検の対象とした資料

「動物実験規程」

「動物実験センター規程」

３）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）

本学において、動物を飼養する保管施設は「実験動物センター」１施設のみで、これ以外の施設等で実験動物は飼養されていない。「動物実験規程」により管理者は「動物実験センター長」と定められている。実験動物管理者は「動物実験センター主任」がこれにあたることが定められているが、平成22年度まで不在であった。平成23年度、動物実験委員会では、動物実験センター長が動物実験センター主任（実験動物管理者）を兼務することを決めた。

４）改善の方針、達成予定時期

実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに適した者がいない。よって本学では動物実験センター長が実験動物管理者を兼務している。現在、動物実験センター長は実験動物管理者の素養を高める努力をしているところである。平成２５年度は公私動協主催の「第一回研修会・実験動物管理者の教育訓練」に出席し、管理者としての知識や技能の習得に努めた。

６．その他

（動物実験の実施体制において、特記すべき取り組み及びその点検・評価結果）

特に記載事項はありません。

Ⅱ．実施状況

１．動物実験委員会

（動物実験委員会は、機関内規程に定めた機能を果たしているか？）

１）評価結果

■　基本指針に適合し、適正に機能している。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料
動物実験委員会議事録
動物実験委員会に提出された以下の資料
動物実験計画承認申請書
動物実験計画書
動物実験実施報告書
動物実験センター利用者講習会資料
自己点検報告書・評価報告書（本報告書）および現況調査票

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）
①動物実験計画の審査を行っている。
②動物実験計画の立案に関して、助言・指導を行っている。
③動物実験センターの管理・保管を行っている。
④動物実験センター利用者講習会（教育訓練を含む）を開催している。
⑤動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書および動物実験に関する現況調査票を作成している。
⑥その他、動物実験の適正な実施のために必要な活動を行っている。
（以上、これらの主な活動は議事録に記載されている。）

4）改善の方針、達成予定時期
特に改善すべき点は無いと考えている。

2．動物実験の実施状況
（動物実験計画書の立案、審査、承認、結果報告が実施されているか？）

1）評価結果
■ 基本指針に適合し、適正に動物実験が実施されている。
□ 概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□ 多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料
動物実験委員会議事録
動物実験委員会に提出された以下の資料
動物実験計画承認申請書
動物実験計画書
動物実験実施報告書

3）評価結果の判断理由（改善すべき点があれば、明記する。）
①平成24年度、動物実験委員会に提出された「動物実験計画書」は計6件であり、審査の結果、6件が承認された。
②このうち6件の「動物実験実施報告書」が提出されている（平成25年１０月現在）。
③実験計画の立案についても適宜指導を行っている。

4）改善の方針、達成予定時期
特に改善すべき点は無いと考えている。

3．安全管理を要する動物実験の実施状況

（当該実験が安全に実施されているか？）

1）評価結果
■　基本指針に適合し、当該実験が適正に実施されている。
□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□　多くの改善すべき問題がある。
□　該当する動物実験は、行われていない。

2）自己点検の対象とした資料
動物実験実施報告書
遺伝子組換え実験等安全管理規程

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）
動物実験委員会は動物実験計画の審査の段階で、危険性を有する薬剤の使用や実験実施者の健康管理等について注意を喚起し、実験の実施についても安全管理に努めている。これまで、実験による事故や健康被害についての報告は受けていない。
本学では、「動物実験規定」とは別に「遺伝子組換え実験等安全管理規程」を定めており、遺伝子組み換え動物を取り扱いに関しては、この規定に基づき遺伝子組換え実験等安全管理委員会の審査を経なければならない。遺伝子組み換え動物の拡散防止については、両委員会がこれに努めている。

4）改善の方針、達成予定時期
特に改善すべき点は無いと考えている。

4．実験動物の飼養保管状況

（実験動物管理者の活動は適切か？　飼養保管は飼養保管手順書等により適正に実施されているか？）

1）評価結果
□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。
■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。
□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料
「動物実験規程」
「動物実験センター、施設利用の手引」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

「動物実験規程」および「動物実験センター、施設利用の手引」において飼養保管手順等が案内されており、これに従って、実験計画を遂行するそれぞれの実験実施者が適正な飼養保管に努めている。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、これを動物実験センター長が管理してきたところである。

4）改善の方針、達成予定時期

上で述べたように実験動物管理者は獣医の資格を有する者、もしくはこれに準ずる者が適切であると考えられるが、本学にはこれに適した者がいない。よって本学では動物実験センター長が実験動物管理者を兼務している。現在、動物実験センター長は実験動物管理者の素養を高める努力をしているところである。

5．施設等の維持管理の状況

（機関内の飼養保管施設は適正な維持管理が実施されているか？　修理等の必要な施設や設備に、改善計画は立てられているか?）

1）評価結果

□　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に維持管理されている。

■　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

備品チェックリスト（大学事務局・総務課）

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

動物実験センターにおける備品等のチェックは、毎年、行っている。空調等に関わる設備についても定期的な点検が実施されており、不具合や故障が発生した場合はその都度対処している。よって改善計画は立てていない。

4）改善の方針、達成予定時期

当該センターは開設されてから二十数年の月日が過ぎている。この老朽化の問題については、学校法人関西医療学園全体の問題であり、将来構想の一環として取り組みたいと考えている。

6．教育訓練の実施状況

（実験動物管理者、動物実験実施者、飼養者等に対する教育訓練を実施しているか？）

1）評価結果

■　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験センター、施設利用の手引」

動物実験センター利用者講習会資料

「実験動物購入申請書」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

毎年、教育訓練を含む動物実験センター利用者講習会を開催しており、受講者には「センター登録番号」を発行している。講師は動物実験センター長（教授・樫葉均）が務めている。動物実験センター長は、より充実した「教育訓練」を実施できるように、その素養を高めるべく努力をしているところである。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

7．自己点検・評価、情報公開

（基本指針への適合性に関する自己点検・評価、関連事項の情報公開を実施しているか？）

1）評価結果

■　基本指針や実験動物飼養保管基準に適合し、適正に実施されている。

□　概ね良好であるが、一部に改善すべき点がある。

□　多くの改善すべき問題がある。

2）自己点検の対象とした資料

「動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書」（本報告書）

「動物実験に関する現況調査票」

3）評価結果の判断理由（改善すべき点や問題があれば、明記する。）

「動物実験に関する自己点検報告書・評価報告書」および「動物実験に関する現況調査票」は作成されており、これを裏付ける基本的な資料も揃っている。これらの報告書については、「関西医療大学紀要」や本学ホームページにおいて情報公開している。

4）改善の方針、達成予定時期

特に改善すべき点は無いと考えている。

８．その他

（動物実験の実施状況において、機関特有の点検・評価事項及びその結果）

本学における動物飼養施設は動物実験センター、１施設のみである。ここ数年、年間当たりの実験計画数は5～10件程度であり、使用する年間の動物数も少ない（年間約500～1000匹）。このような小さい規模の施設なので、専任の職員等は配置されていない。これまで、実験動物の搬入、飼養、保管に関しては、それぞれの動物実験責任者（動物実験計画書を提出した者）が責任を持って行うこととし、これを動物実験センター長が管理してきたところである。このような実験を行う者とそれを管理する者はお互いの立場を理解し、良好な関係を築いてきた。本学におけるこのような関係は、将来にわたって維持・発展させたいと考えている。

編集後記

就任後１年を経過したところで新学長に巻頭言をお願いしました。「医学・医療と生命倫理というとても格調の高い内容のオープニングとなりましたが、あらためて日常の研究や医療行為等に関して胸に手をあてて襟を正し自問し直した次第です。

さて、今年はマイナンバー制の導入、安保関連法案の成立をはじめ、社会は大きく変化して行こうとしています。またグローバル化の流れの中で、医療や医学研究領域も急速に変化し、それに合わせて自己変容していくことが求められています。そのためにも、多様性の尊重こそが現代社会において未来への原動力となるといわれています。

今年の関西医療大学ユニットの研究報告集を見渡すと、学科の増設に伴い、分野の多様性を具現した頼もしい内容に着実に進化してきていることが見て取れます。投稿論文掲載は、今年は、少数となりました。これは、着実に歩みを進める蝶のキャタピラーが未来への飛躍に向けて十分なエネルギーをためている時期と編集部では拝察いたしました。

そもそも、大学紀要は、大学の顔であるとともに、所属研究者の創意に富んだ研究論文集であり、大学組織の広報誌であると考えられます。今後、本学でも独自に関西医療大学紀要の、学会誌とは異なる意味を、もう一度、再確認してゆく必要がある時期と考えられます。是非とも、来年も、研究論文含めその他たくさんの投稿を、編集部一同、こころから、お待ちしております。

編集担当　郭　　哲次

関西医療大学紀要　Vol. 9

2015年12月30日　発行

発行者　関西医療大学
〒590-0482　大阪府泉南郡熊取町若葉2丁目11番1号
（編集代表者　吉田宗平）

印刷所　富士紙工業株式会社
〒547-0034　大阪市平野区背戸口3丁目8番6号